

マックス・ウェーバーにおける 歴史科学の展開（下）

犬 飼 裕 一

目 次

序 論

第1節 課 題

第2節 方法と枠組み：

ウェーバーの方法をウェーバー自身の言説に当てはめること

第3節 この研究の見取り図

第1章 社会政策という出発点

第1節 若手社会研究家

第2節 産業労働と心理学

第3節 批判者としての登場：科学論における新しい試み

第4節 最初の代表作の仕掛 (以上、第40巻第2号)

第2章 プロテスタンティズム研究と関心の移動

第1節 研究の仮説

第2節 テキストの動き

第3章 普遍史と歴史主義の課題

第1節 普遍史という問題

第2節 「普遍史」あるいは「歴史哲学」の動き

第3節 歴史主義の課題と困難

第4節 「価値自由」と普遍史

第5節 従来理解

第6節 普遍史と西洋中心主義の問題

第7節 新たな普遍史へ (以上、第40巻第3号)

第4章 歴史科学と文化諸科学の関係

第1節 生と個別性：ゲオルク・ジンメルとの関係

第2節 生に対する歴史の利害

第3節 「実証主義」との関係

第4節 芸術との関係

第5章「社会学」という新事業

第1節 「社会学」という新事業

第2節 厳密な歴史科学としての「社会学」

第3節 合理性類型論の登場

結 論

第1節 孤独な軌道修正

第2節 職業としての学問ということ

第3節 展開していく歴史科学

エピローグ：一つの思考様式の極点と終焉

文 献

(以上, 本号)

(略号表)

本研究で使用するマックス・ウェーバーのテキストその他に以下の略号を用いる。

J.C.B. Mohr 社版著作集

RS I/II/III = Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I/II/III

PS = Gesammelte Politische Schriften

WL = Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre

SWG = Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte

SSP = Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik

WuG = Wirtschaft und Gesellschaft

『マックス・ウェーバー全集』

MWG = Max Weber Gesamtausgabe

刊行中の全集は三つの部門に分かれており, 部門 (Abteilung) I は, 著作・講演, 部門IIは書簡, 部門IIIは講義録にあてられている。目下の所 (1998年) 部門IIIは刊行されておらず, 主に部門Iの著作が半数近く刊行され, 部門IIの書簡は二冊 (Bd. 5: 1906-1908, Bd. 6: 1909-1910) が出ているにすぎない。

「マックス・ウェーバー全集」の表記はMWGという略号とともに部門を表記し, それに頁数を続ける。

例:

MWGII/6, S. 93f. = 「マックス・ウェーバー全集」部門II, 6巻, 93頁並びに次の頁
 [本論文は文部省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果をまとめあげたものである。この場を借りてお礼を申し上げたい。]

第4章 歴史科学と文化諸科学の関係

イタリアの歴史理論家カルロ・アントーニの規定に従うならば、マックス・ウェーバーが歴史科学にもたらした変革は、「歴史主義から社会学へ」という過程を決定づけたことにある。ただしアントーニの議論にはまだ論じられるべき問題が残されている。とりわけ、「歴史主義」とウェーバーの時代の他の領域との関係が放置されている。また「社会学」が今日のそれと同一のものであったのかという問題についても検討されていない。アントーニの議論をどのように評するにせよ、ウェーバーは当時まだ未確立の学問でしかなかった「社会学」に歴史科学の新たな可能性を探求しようとしたのである。それではウェーバーの念頭にはどのような先行者が意識されており、彼らとともにどのような共通の課題に取り組もうとしていたのだろうか。

われわれは先にマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の改訂の中に、この人物の関心の変化を観察してきた。当人の意識の中でどのように位置づけられるにせよ、この改訂は重要な変化を伴っていた。晩年のウェーバーが手を染めていた「社会学」もこうしたウェーバー自身の変化の中に位置づけることで、より自然に理解できるようになるのではないだろうか。

第1節 生と個別性：ゲオルク・ジンメルとの関係

これまでの研究が明らかにしてきたところによると、マックス・ウェーバーが世紀が変わる頃から徐々に精神疾患から回復して最初に取り組んだ書物は、ジンメルの『貨幣の哲学』（1901）であった⁽¹⁾。ウェーバーはここから「資本主義の精神」についての分析視角を受け取った。批判的な検討を経たにせよ、それが1904/5年に刊行される『プロテスタンティズムの

(1) 例えば、David Frisby, *The ambiguity of modernity: Georg Simmel and Max Weber*, in: Wolfgang J. Mommsen and Jürgen Osterhammel (eds.), *Max Weber and his Contemporaries*, London 1987, pp. 422–433.

倫理と資本主義の精神』初版の成立につながることになる⁽²⁾。またウェーバーとジンメルのテキストの間には、いわば一方的な引用関係がある。ウェーバーが数多くの脚注でジンメルの名前を挙げているのに対し、ジンメルには少なくとも主要著作に関する限りそれが見当たらない。このことはジンメル自身の著述スタイルにも起因している。しかし、それ以上に両者の世代関係が微妙にずれているという事情に基づいている。1858年に生まれたゲオルク・ジンメルが1864年生まれのマックス・ウェーバーに先行して研究業績を挙げているのは自然なことである。とりわけ後で触れる「社会学」に関しては、ウェーバーの仕事はジンメルのこの分野における主要著作の刊行後に開始されている。ウェーバーがこの新事業に乗り出していく晩年の約十年間には、ジンメルの社会学はすでに国際的な名声を得ていた。1894年に発表した論文「社会学の問題」⁽³⁾は、英語、フランス語、イタリア語に訳されている⁽⁴⁾。後発のウェーバーがジンメルの先行業績を常に意識していたことは間違いない。ウェーバーは1903-1906年に発表したいわゆる「ロッシャーとクニース」論文の注記で、「ジンメルの立場に対する体系的な批判」の準備を示唆している⁽⁵⁾。また実際に「社会学者として

(2) Frisby, *The ambiguity of modernity*, p. 424 また、関連して, Klaus Lichtblau, *Kausalität oder Wechselwirkung? Max Weber und Georg Simmel im Vergleich*, in: G. Wagner/H. Zipprian (Hg.), *Max Webers Wissenschaftslehre*, S.528f. リヒトブラウは同問題に関して, G・ルカーチや K・マンハイムから近年に至るまでの研究の経過について多くの文献を挙げている。

(3) Georg Simmel, *Das Problem der Soziologie*, in: *Jahrbuch für Gesetzgebung*, 18. Jg., 4. Heft, 1894, (Georg Simmel Gesamtausgabe 5, S. 52-61).

(4) ジンメルのいくつかの論文は、すでにフランスの *L'Année Sociologique* (1886)やアメリカの *American Journal of Sociology*(1896-1910)に続々掲載されており(Frisby, *The ambiguity of modernity*, p. 424), 『貨幣の哲学』については1900-1901年にG・H・ミードが書評を書いているし(*The Journal of Political Economy*, vol. 9, 1900-1901), 『社会学』については1908-1909年にA・W・スモールが書いている(*American Journal of Sociology*, vol. 14, 1908-1909)。同問題についての研究状況は, Lichtblau, *Kausalität oder Wechselwirkung?* S. 533.

(5) Max Weber, *WL*, S. 97.

のゲオルク・ジンメル」(執筆1908頃)と題する未完の草稿を残している⁽⁶⁾。

同様のことは、歴史学方法論(Historik)にも当てはまる。ジンメルの歴史学方法論についてはこれまで集中的な検討が加えられてきたとはいえない。ジンメルの最初期の著作に属する『歴史哲学の諸問題』(初版:1892)では、新カント派的色彩の濃い歴史認識論を展開している。歴史学研究の主観的性格や、歴史の「意味」についての議論⁽⁷⁾は、しばしば引き合いに出されるハインリヒ・リッカートの同種の議論とともに、後にウェーバーが展開する一連の議論を、すでになんかの部分で先取りしている。

この意味で、ゲオルク・ジンメルにおける哲学と歴史科学の展開を考える必要が出てくる。ジンメルによる先行事業は、マックス・ウェーバーが歴史科学の展開において果たした新たな貢献を考えるのに避けて通ることができないのである。とりわけウェーバーが次々と新たな関心に移動していく様子を観察していく場合には、直前の先行者ともいべきジンメルの仕事を見ておくことが必要になってくる。

ゲオルク・ジンメルの仕事を考える上で、恐らく最も一般的な方法は哲学者としてのジンメルの業績の上に歴史学や社会学の業績を覆い被せる形

(6) 原題は, „Georg Simmel als Soziologe und Theoretiker der Geldwirtschaft“ であり, ミュンヘン大学のマックス・ウェーバー研究所の所長であったJ・ヴィンケルマンが発見した。書かれたのは英語版の編者D・レヴァインによると, ジンメルの『社会学』が刊行された直後の1908年と思われる。このテキストは最初英訳で1972年に刊行され, 後に1991年になってからドイツ語で刊行された。英語版: Max Weber (Introduction by Donald N. Levine), Georg Simmel as sociologist, in: Social Research 39, 1972, pp. 155-163 = David Frisby (ed.), Georg Simmel Critical Assessments, London 1994, vol.1, pp. 76-81, ドイツ語版: Georg Simmel als Soziologe und Theoretiker der Geldwirtschaft, in: Simmel Newsletter I, 1991, S. 9-13.

(7) Vgl. Georg Simmel Gesamtausgabe 2, S. 319ff., S. 380ff. ただし1905年に大幅に書きかえられて刊行された『歴史哲学の諸問題』の第二版は, 逆にウェーバーによる「現実科学論 (Wirklichkeitswissenschaft)」や「理解論 (Theorie des Verstehens)」や「理想型 (理念型) 的概念構成論 (idealtypische Begriffsbildung)」の展開から影響を受けている。Lichtblau, Kausalität oder Wechselwirkung? S. 530f.

で理解するという方法であろう。それによってわれわれが主題として論じている歴史科学の展開に対するジンメルの貢献と、それがもたらしたウェーバーに対する影響も理解しやすくなるはずである。

通説によれば、歴史主義から社会学への過程を考える上で最も重要な対立概念は、「個別性」と「全体性」の対立である。それはもちろん背後に民族と個人、国家と個人、社会と個人、自然法則と人格、秩序と人格といった問題群を背負っている。個別性は人格と結びつけられ、さらに生(Leben)概念に結びつけられる。生は歴史主義が陥った困難を考えるキーワードとして繰り返し登場する。ゲオルク・ジンメルが「カントと個人主義」(1904)という論文で次のように書いている背景には、科学的な法則知と個人の人格の自由や自律性との間の緊張関係に対する意識がある。

「近代の生についての原理的な諸問題は、その最も本質的なところで個別性の概念にかかわっている。権力に対して、あるいは自然や社会の法則に対して、いかにしてその自律性を保持するのか、あるいはいかにしてそれらに従うのか、考えるすべての組み合わせや比率において徹底的に試されなければならない。この問題を包括的に解決しようとする試みの一つは、十八世紀に特有のものであり、この面ではカントにおいて頂点に達する。」⁽⁸⁾

ただし、ジンメルがカント哲学のなかに求めようとするものは、「十八世紀に特有のもの」というよりも、ジンメル自身の同時代の課題に対する解答である。カントはショーペンハウアーやニーチェとともにジンメルが繰り返し論じた哲学者である。ジンメルの手にかかる、カントもまた「生」と「個人(人格)」の問題に一貫して取り組み続けた思想家であるということになる。ただしカントに体现される十八世紀の個別性の概念、あるいは生と個人(人格)の概念は、もちろん例外はあるにせよ、まだ啓蒙主義的な普遍妥当性や非歴史的な理念を追求するものであった。

「十八世紀の歴史的な状況がもたらした個別性の概念は、カント哲学のなかで一方では理論的に、また他方で実践的に展開されることで完成された。しかし人間の現存在についてのカントの解釈は、自由と平等の理念に基づいており、

(8) Simmel, Kant und der Individualismus, 1904, in: Georg Simmel Gesamtausgabe, Bd. 7, S. 273.

環境の変化によって簡単に古くなるという意味で、歴史的なものではない。[中略] 個別性の意味についての新しい表象は、ゲーテによって、シュライエルマッハーによって、十九世紀のロマン主義によってもたらされたのであり、十八世紀のそれをそのまま変化させたのではなく、その補完物としてあるいは競争者として傍らに現れてきたものである。』⁽⁹⁾

ジンメルが言うように、個別性の概念は、ゲーテ（1749－1832）、シュライエルマッハー（1768－1834）、十九世紀ロマン主義を経ることで歴史的、さらに言うならば歴史主義的な様相を帯びてきた。歴史主義的哲学の代表者の一人であるヴィルヘルム・ディルタイが書いた膨大なシュライエルマッハー伝（1870）は、当然ジンメルの念頭に置かれていたはずである⁽¹⁰⁾。自他ともに認める代表的歴史主義者であり、ウェーバー兄弟やジンメルの同時代人フリードリヒ・マイネッケ（1862－1954）が、大著『歴史主義の成立』（1936）で描いたのは、ヴォルテールの先行者たちにはじまり、ゲーテにおいて頂点に達するヨーロッパの知的展開の「精神史（Geistesgeschichte）」であった⁽¹¹⁾。マイネッケはこれに先立って『人格と歴史的世界』（1918）において次のように書いている。

(9) Ebd., S. 280f.

(10) シュライエルマッハーの個別性問題と歴史主義の成立の関係というテーマについては、次に論じるフリードリヒ・マイネッケも同様のテーマの小論を書いている。Meinecke, Entstehungsgeschichte des Historismus und des Schleiermacherschen Individualitätsgedankens, 1939, Friedrich Meinecke Werke, Bd. 4, 1959, S. 341ff.

(11) マイネッケにとって、「啓蒙運動が歴史に対してもたらした貢献を問う際に、その頂点にあるのはヴォルテールである。人はヒュームやロバートソンやギボンの貢献の学問的な価値をいくつもの観点からヴォルテールのそれよりも高く評価することはできよう。しかし歴史的思考全体の内部で、これほど広範に自明な形で、とりわけ影響力をふるったという点でヴォルテールの右に出る者はいない」（Meinecke, Entstehung des Historismus, 1936, Friedrich Meinecke Werke, Bd. 3, 1959, S. 73）のである。さらにマイネッケによれば「ゲーテなくして、われわれが今日われわれであるものではない」のであり、ヘーゲルやカントやヘルダーやシラーの貢献がいかに大きかろうと、「思考と感情において同時に、そして内的生（Innerleben）の全体において、ゲーテのように深く把握できた人間はいない」のである（ebd., S. 445）。

「私にとって最重要の問題はつぎのものである。すなわち人格の形成にとって歴史的世界は何を意味するのか。それに対する答えによって、その精神に対する帰結や歴史教育の方法がすばやく容易に引き出せるのである。

ただしわれわれは最初に人格というものがいかなるものであらうと意欲し、いかなるものでなければならないのかを問わなければならない。人格とは大地の子どもにとって最高の幸福であるというゲーテの言葉が、われわれすべての耳に鳴り響くのであり、それは教会の鐘の音のように耳にとどき、煩わしい日々の取り組みのなかでわれわれに一つの泰然として規則正しく繰り返される約束を与えてくれている——その一つの約束とはしかし同時に一つの探求でもある。」⁽¹²⁾

人格、個別性と歴史的世界、そして何度も繰り返し登場する「生」、ジンメルがカントについて書き、ニーチェやショーペンハウアーについて書くときも、マイネッケが歴史主義の成立を論じるときも、両方とも共通して同じ問題に取り組んでいるように思われる。マイネッケが『歴史主義の成立』で、ゲーテを歴史主義の頂点として顕彰し、同全集版で140頁もの紙幅を捧げているのは、マイネッケのいう「最高の意味での生の問題」をゲーテが一人で体現していると信じるからである⁽¹³⁾。1930年代後半のマイネッケの発言が1910年代のそれとは別の文脈で理解されなければならないとしても、マイネッケが思想的な素材としているものはほとんど変わらない。それは1920年前後に没した同時代人たちと共有してきた課題に結びつけられている。共有してきた課題とは「生」の問題である。

ここに今日の哲学史のいう「生の哲学」の展開において見落とされてきた問題の連鎖がある。「生」の問題は、ベルクソンやニーチェやディルタイ、ジンメルの独占物ではないのである。「生」はほとんど決まり文句のように何度も夥しく登場し、他の領域の全く異なった指向をもった人々が、「生」について同じようなことを述べている。この時代のドイツ知識人のゲーテ崇拜⁽¹⁴⁾の熱狂についてはここでは触れないとしても、彼らが時代の

(12) Meinecke, *Persönlichkeit und geschichtliche Welt*, in: Friedrich Meinecke Werke, Bd. 4, 1959, S. 30.

(13) Meinecke, *Entstehung des Historismus*, S. 446.

(14) 歴史主義に与えたゲーテの影響史はそれだけで大部の研究書を必要とする。これに関してはアイザーマンがつぎの長文の注記でマイネッケ、クローチェ以来の研究史を挙げているのでそちらを参照されたい。Gottfried Eisermann,

課題（Zeitproblematik）として念頭に置いていた問題⁽¹⁵⁾がどのようなものであったのかはおおよそ想像できる。だからマイネッケやジンメルやマックス・ウェーバーが「生」の問題にしばしば言及したとしても、それをそのままディルタイやニーチェの直接の影響であると断じることは間違っている。そのような単純な影響関係を求めて時系列的にたどっていくと、ディルタイやニーチェもまたゲーテやシラー、シュライエルマッハー、ヘルダーリン等に帰されるべき素材を使って語っているからである。単に用語の上での近似関係をたどっていくにせよ、概念として把握されている内容をたどっていくにせよ、「生」の元祖をみつける作業は、それほど多くのものをもたらしてくれるわけではない。少なくともわれわれの課題にとって実り多いものではない。

ここで重要なことは概念史的な先祖探しではなくて、時代の課題として当時の人々に共有されていた表象であり、表象がもたらす現実感（リアリティ）である。彼らは何よりも「生」と「歴史」の二極を中心として楕円の軌道を周回していたように見える。「生」は歴史的な変動を常に経験するものとして表象され、「歴史」は生と密接に結びつけられた「個別性」や「人格」、あるいは「精神」に関係づけられる。歴史的に変動していく精神の創造物、人格が生み出した「作品」、作品に表現される「意志」。さらにこれらを全体としてみた場合の「文化」。個々の文化に結びつけられた「民族」や「国家」、そして「社会」。「民族精神」「民族意志」「国家意志」「個別性としての国家」、これらは上記の合成概念である。このように各概念の間の関係を見ていくだけで、この時代のドイツ人の手許にあった道具立ての大半が出尽くしてしまうように見える。

彼らにとっての「生」は、おそらく「歴史」という概念がそうであるのと同じく、特定の人名に結びついたものである以上に、誰もが取り組んでいる彼らの共通の課題であった。われわれは単純な影響関係の措定とは反対の問題も問わなければならない。それはすなわち「生」の問題について

Max Weber und die Nationalökonomie, 1993, S. 22, Anm.4.

(15) Vgl. Carl Hinrichs, Einleitung des Herausgebers, in: Friedrich Meinecke Werke, Bd. 4, 1959, S. VIIIff..

誰も彼も何かを口にしているような状況で、ショーペンハウアーやニーチェやディルタイ、さらにはベルクソンといった人々の「思想」が、いかにもてはやされ、称揚されたのかということである。思想というものがそれ自体で自立的に実体的に存在するものではなく、むしろ解釈者の解釈行為を通じて展開していくものであるならば、「ニーチェの直接の後継者としてのマックス・ウェーバー」といった一方的な影響関係の特定は、誤解を招きやすいものであることが分かる。同じことはマイネッケにもジンメルについても言えるはずである。

特定の思想や学派、スローガンのようなものが、特定の時代にもてはやされ、次々と解釈者を生み出していく様子は、結果として生み出された個々の「思想」を初めからかけがえのないもの、価値の高いものとして考えるときには、なかなか見えてこない。すでに検討してきた理論的研究は、マックス・ウェーバーやマイネッケやジンメルを独自完結した存在として捉えようとする。その場合暗黙の了解とされているのは、彼らの業績が高い価値を持っている——あるいは持っているべきである——ということである。またウェーバーやジンメルだけではなく、多くの原著者たちは自分の語る内容が、できるだけ多く自分に独自であり、反対にできるだけ少なく他人から借用していることを示そうとする。例えば、ジンメルの著作を見ると、数百頁にわたって同時代人からの引用、参照を示す注記もなければ、個人的に交流のあった同時代人の人名すら出てこないことが多い。このためジンメルに対する同時代人の影響は、字面の上では判定しがたい。例えば1908年に刊行された『社会学』にはグスタフ・シュモラーやヴィルヘルム・ディルタイの名もなければ、エミール・デュルケム、マックス・ウェーバーやフェルディナント・テニエス等の名前すらもない。ただし彼らからの影響や問題の共有がこの大著に見られないわけでは全くない。この本の第1章の補説の末尾にある次の文章は、明らかにこの本の刊行の五年前に刊行されたウェーバーの有名な論文と関係している。

「この態度は職業のカテゴリーによって、意識化された先鋭化に達する。なるほど古代には、個人的な分化と分業化に編成された社会という意味でのこの概念はまったく知られていなかった。しかしその根底にあるもの、すなわち社会的影響力をもつ行為は内的な適性の統一的な表現であるということ、主観性の全

体的で不変的なものは社会におけるその機能によって実地に客観化されるということ——これは古代においてもまた存在した。ただしこの関係は、あくまでもより均等な内容において実現された。その原理はアリストテレスの表現、すなわち若干の者は彼らの本性によって『奴隷』に、他の者は『主人』に定められているということにあらわれている。概念をより高次に形成したばあい、それは次のような独自の構造を示す。すなわち一方において社会は『位置 (Stelle)』を自己の中につくりだし提供し、この位置はなるほど内容と範囲よりすれば他から区別されるが、それでも原理的には多くの者によって満たされることができ、それによっていわばなにか匿名的なものである。ところで他方この社会的な位置は、その一般的な性格にもかかわらず個人によって、内的な『召命 (Ruf)』にもとづいて、まったく個人的 (persönlich) と感じられる適性にもとづいて占められる。一つの『職業 (Beruf)』が存在するためには、一方における社会の構造と生活過程、他方における個人的な特質と衝動、この双方のあいだにかの調和が、いかにして生じたにしても存在しなければならない。それぞれの人格にとって社会の内部で地位と職務とが存在し、彼はこの地位に『召されて (berufen)』いるという考えと、人はそれを見いだすまではそれをさがし求めよという命令とは、結局は一般的な前提として右の調和を基礎とする。」⁽¹⁶⁾

今日の読者は「職業 (Beruf)」,あるいは内的な「召命 (Ruf)」といった概念を眼にすると反射的にマックス・ウェーバーの名前を思い出す。それは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』においてあまりにも有名になった議論と関係している。ただし、ジンメルはこの文章がウェーバーのアイディアからの無断借用であると断定することは控えなければならない。その理由はウェーバーが同論文で有名にした議論そのものが百パーセントウェーバーの独創にかかるものであり、「社会的分化」「相互関係の諸形式」について長年論じてきたジンメルの考えがまったく介在していないなどということは、そもそも検証不可能だからである。ウェーバーの論文の方が多く読まれ、議論の対象になってきたが、そのこととウェーバーの独創性とは同じではない。

大切なことは、執筆年代の特定や本人たちや関係者の証言によって、「ど

(16) Georg Simmel, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Georg Simmel Gesamtausgabe, Bd. 11, S. 60 = 居安正訳『社会学』白水社1994年, 上, 55頁, ただし訳文変更。

ちらが先なのか」という問題を解くことではない。そもそも資料はすべて残っていると期待できるわけではない⁽¹⁷⁾、それ以上に独創性や借用関係、影響関係に関して、本人たちの言辞ほど信用できないものはない場合が往々にしてあるからである。われわれの関心にとっては、むしろジンメルやウェーバーが当時共通して取り組んでいた問題を明らかにすることや、それをめぐる両者の取り組み方の違いの方が検討に値する。ところが特定の著者だけに照準を合わせた考察では、しばしば彼らの時代の課題から遊離した、普遍的ではあるが同時にいかようにでも解釈可能な概念の束のようなものしか掴むことができない。とりわけ後年の読者は何でも自分の言葉として語ってしまうジンメルの著作だけに専念する場合、そこに語られる内容がカントやショーペンハウアー、ニーチェのような古典的著者たちとこの著者だけの独創であるかのように考えがちである⁽¹⁸⁾。ところがジンメルを含めた当時の著者たちが飽きることなく繰り返し論じた問題

(17) 例えば近年刊行されつつある全集に収録されているマックス・ウェーバーの書簡集を読んでいくと、ウェーバーが他の受取人に対してジンメルに手紙を書いたことや返事を受け取ったことを述べているが（例えばゲオルク・イエリネク宛 1908 年 3 月 21 日, Max Weber Gesamtausgabe, Ab. 2, Bd.5 (1906–1908), 1990, S. 470), 肝心のジンメル宛のウェーバーの手紙は失われてしまっている。全集の編集者によると、ゾンバルト宛の手紙も一部を除いて大半失われている。マックス・ウェーバーの手紙が失われているのはジンメルの他に、カール・ノイマン、ヴィンデルバント、フランツ・オイレンブルク、ロベルト・リーフマン (ebd., Einleitung, S. 7 u. 13)。また同じハイデルベルクで生活していたエーベルハルト・ゴットハイン、エミール・ラスク、エルンスト・トレルチ、カール・フォスラー、ヴィンデルバントとの間のこの時期 (1906–1908) の書簡は当然のことながらない。また彼らは当時現れた新しいメディアによって意思の伝達をしていたため、書簡の数は少なくなりつつあった。新しいメディアとは電話のことである (ebd., S. 7)。

(18) この点ではマックス・ウェーバーと対照的である。しばしば本文を上回る分量の脚注を書いたウェーバーは、同時代人や若年者の著作をしばしば引用している。例えば全編の大半が注記ばかりでできている『社会学の基礎概念』では冒頭で、K・ヤスパース『一般精神病理学』、H・リッカート『自然科学的概念構成の限界』、ジンメル『歴史哲学の諸問題』、F・ゴットル『言葉の支配』、F・テニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』、R・シュタムラー『唯物論的歴史観に基づく経済と法』を挙げている。Weber, WuG, S. 1.

は、驚くほど共通している。彼らは確かに同時代人への訴えかけを求めるためにそれらの概念に依存し、同時にそれらの概念が与えてくれる世界像や社会像、時代意識、さらには世界観を共有していた。

このように考えていくと、思想や学問、思想家や研究者を考える際に重要なのは、彼らが常用していた用語や概念間の共通関係や直接的な影響関係ではなくて、むしろそれぞれの独自性にある。独自性を可能にする差異が問題なのである。つまりショーペンハウアーやニーチェやディルタイ、ベルクソンに似たマックス・ウェーバーやジンメル、マイネッケよりも、特定の課題と領域においてそれらの遺産を克服し改変した彼らの方が重要なのである。そもそも共通した歴史的な背景を持ち、同一の言語を話し、互いの著書を批評しあっていた著者たちが、同じことを述べているのは当然の成りゆきである。「独創性」という今では使い古されてしまった概念によって著者たちの仕事について語ろうとするならば、そのようなごく当然の成りゆきから彼らがそれぞれいかにして脱したのか、あるいは逸脱したのかを考えるべきである。

第2節 生に対する歴史の利害

十九世紀の終盤に現れた旧来の歴史科学の在り方に対する批判は、一部分では各々の歴史科学が全体として取り組んでいた共通課題の消滅に発している。それまでのドイツ歴史科学は、統一国家の樹立を共通の目標に置き、ナショナリズム的志向を素朴な形で受け入れることができた。彼らの主張をそのまま信じるならば、普遍史はあたかもヨーロッパ史とドイツ民族の統一をもってその頂点に達したかのようである。このような信仰を共有していた人々が生み出したドイツ歴史科学が、永らく世界の同領域の学問研究を支配し、今日に至るまでその余韻を残していることは、今日の歴史科学にすらいくつもの困難を残すことになった。とりわけ十九世紀ドイツにおいて磐石の哲学的、理論的基礎付けを与えられた西洋中心主義的近代化目的論は、度重なる批判にもかかわらず、不死鳥のように復活してはわれわれの歴史的思考力に影響を及ぼし続けている。そもそもわれわれが今日所有している普遍史（世界史）の概念が、ほとんどの場合、ドイツの西洋中心主義的近代化目的論に発しているからである。このことは、例え

ば「市民社会」や「資本主義」という概念を考えれば、多くの論証を要しないはずである。

ところが、民族国家の樹立を達成した後、歴史科学はそれまで表面に現れてこなかった諸問題に直面することになる。とりわけ知識人にとって重要なのは、従来の歴史科学が熱心に収集してきた知識が、果たして彼らの理想とする世界観や社会観に好都合な影響を及ぼしているのかという疑問であった。特定の型の知識が大規模な形で組織的に収集されるには、それらの前提になっている理論的な理解がしっかりと共有されていなければならない。それが不可能になるとき、古い科学は危機に陥り、哲学的、理論的な関心が上昇していく。例えば、フリードリヒ・ニーチェは有名な論文「生に対する歴史の利害について」(1874)で次のように書いていた。

「ある時代が歴史に食傷していることは、私の見るところでは、五つの観点からいって、生に敵対的であり危険であると思われる。1. 歴史が度を過ぎるとき、上に述べたような内容と外面との対立が生まれ、そのために人格は弱められる。2. 歴史の過剰によって、ある時代は、もっとも稀有な徳である公正を、他のいかなる時代にもまして高度にそなえているという空想におちいる。3. 歴史の過剰によって、国民の本能は阻害せられ、個人も全体に劣らずその成熟の点において妨害される。4. 歴史の過剰によって、いかなる時代にも有害な人類の老齢に対する信仰、すなわち自分は末裔であり亜流であるという信念が植えつけられる。5. 歴史の過剰によって、ある時代は、自己自身に対する皮肉という危険な気分におちいり、そこからしてもっと危険な犬儒主義的気分にはまりこむ。しかし、このような気分において、時代はいよいよ小賢しい利己主義的な実践に向かって熟してゆくのであり、このような実践のゆえに、生の活力は萎えしめられ、ついには破壊されるのである。」⁽¹⁹⁾

このことは確かに十九世紀終盤の歴史主義について妥当している。カール・レーヴィットはブルクハルトについて次のように書いていた。

「……ところがブルクハルトの場合には歴史それ自体のうちに、放棄を可能にしたポジティブな原因がある。歴史それ自体が万物流転の中に等しいものの変転を、持続し恒常するものを、いわば一つの繰り返しとして示しているかぎりにおいて、そう言えるのである。しかし歴史上の変転がいつも等しい恒常を示

(19) F. Nietzsche, Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben = 秋山英夫訳『生に対する歴史の利害』, 筑摩書房 1960年, 328頁。

しているのは、歴史の中心、すなわちブルクハルトが理解したかぎりであれば堪え忍び行動する人間が、実体的に見て『歴史時代に入ってから』人間ではなく、現在も過去も未来もつねに変わらぬ同一の人間であることに基づいている。ブルクハルトによれば、『人間の魂も頭脳も歴史時代に入って目に見えて成長したわけではない。いずれにせよあらゆる能力はとうの昔にでつくした』のである。[中略] 歴史上の人間はすでに二千年前に時代の頂点に達した。そして『すでに太古草昧の時代に、他者のために生命を捧げた人間がいるとすれば、以来もはや人間は往時の域を越え出てはいない』。しかし人間がもしも過去のまま変わらないのだとすれば、時間的観点からしてわれわれが偉大な過去の『亜流』であるかそれとも『初子』であるかという決定的な問題も、もはや存在しないと言っていい。人間が永続的な存在であることについて、ブルクハルトは歴史的な知識を持っていたおかげで、『われわれは』決して初子ではなく、そこから単に『遅れて派生した人間』にすぎないのであり、ほかでもない、まさにそれであるからこそ、われわれには知識を歴史的に追想する能力が与えられていることを彼は知っていたのである。』⁽²⁰⁾

亜流としての時代意識は、初期のマックス・ウェーバーの論調をもまた根底から規定していた。すでに1895年の『国民国家と経済政策』で彼は以下のように断言していた。

「ともかくこのように国民の統一が達成され、国民の政治的『満足』が確定してみると、成功に酔い平和に飢えたドイツ市民の青年層は、独特に『非歴史的』な、非政治的な霊に憑かれた。ドイツの歴史は終着駅にたどりついたかにみえた。現代は過去数千年の歴史の完全な実現であった。誰か人あって、将来の世代は別の判断を下すのではないかなどと、いふかることがあるだろうか。世界史は、ドイツ国民が体験したこの成功から日常の茶飯事へと移行することを、慎みぶかく控えるはずだ、そのように思われた。今日われわれは酔いから醒めた。われわれに似つかわしい仕事は、祖国の歴史の展開の中でわれわれの世代の位置をわれわれの目から隠している幻想のヴェール、これをはがして見ることである。するとわれわれは、また別の判断を下すようになるのではあるまいか。われわれの世代の揺られた揺りかごの傍らには、実に重苦しい呪いが立っていた。われわれの誕生日に、歴史が餞別として贈ってくれたその呪いとはなにか。政治的エピゴーネンという惨めな運命すなわちこれ。』⁽²¹⁾

(20) Karl Löwith, Jakob Burckhardt: der Mensch inmitten der Geschichte, W. Kohlhammer, 1966 = 西尾幹二・瀧内慎雄訳『ブルクハルト 歴史のなかの人間』, 1994年, 78-9頁。

(21) Weber, PS, S. 21 = 中村貞二他訳『政治論集』, みすず書房 1982年, 58頁。

これはこの有名な——悪名高い——講演の結論に当たるところである。さらに引用を重ねるならば、先に引用したニーチェのテキストの直前には、次の一節があった。

「……そして、以上の危急、要求、認識の例を私が取ってきたのはどこからであるか、この点についていささかも疑念の残らないように、ここにはっきりと私の証言を記しておかねばならぬ、曰く、われわれがその達成に努力し、かつ政治的団結以上に熱烈に努力しているものは、あの最高の意味におけるドイツの統一であり、形式と内容、内面性と紋切型という対立を絶滅した後の、ドイツ的精神とドイツ人の生との統一である、と——」⁽²²⁾

当事者たちの意識を浮かび上がらせるために敢えて長文の引用を続けてきたが、1895年のウェーバーの主張が、確かにニーチェとレーヴィットの間に見事に位置付けられうることは事実である⁽²³⁾。外枠としての民族国家が前提とされ、同じく実体的な性格をもった個人や集団の「生」が何ものにもまして重要な要件として扱われている。1966年のレーヴィットの見解に、ドイツナショナリズムのその後の展開が深刻な影を落としていることはいうまでもない。レーヴィットが引用する「すでに太古草昧の時代に……以来もはや人間は往時の域を越え出てはいない」というブルクハルトの言葉は、レーヴィット自身の省察を代弁するものである。ここでブルクハルトは、すでに前世紀の段階でドイツの歴史科学の行く末を憂えた予言者として描き出される⁽²⁴⁾。レーヴィットの論じるニーチェとブルクハルトが、ドイツの歴史科学の複雑な有様を暗示していることは間違いない。十九世紀の終盤から今世紀の初頭にかけて登場した歴史科学への批判が、さらに幾重にも非難されたり、復活したりする状況が折り重なってわれわれの前にある。

歴史主義が陥った状況への批判は、今日まで継続して論じられてきた。

(22) F. Nietzsche, Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben = 同訳書, 327-328頁。

(23) ニーチェとマックス・ウェーバーの関係はこれまでもすでに多く論じられてきた。わが国で最も早いものとしては、大林信治「ウェーバーとニヒリズムの問題——ニーチェとの対比」, 『理想』1973年5月号, があげられる。

(24) この観点はレーヴィットのこの著作の主題の一つである。

見渡しがたい知識の迷路に陥ってしまった歴史学者への批判は、今日では通常ニーチェの名前と結びつけられている。ニーチェが論文「生に対する歴史の利害」において展開した批判は、後々まで歴史主義批判の支点としての役割を果たす。卓越した哲学史家レーヴィットが指摘するように、「時間は全能であって、結局、時間がニーチェの歴史批判に勝利を得させ、十九世紀の『歴史主義』を沈黙させてしまった」のである⁽²⁵⁾。複雑に絡まりあった議論の流れの中からレーヴィットが切り取って見せたニーチェとブルクハルトの相互関係は、歴史主義と新しい哲学との緊張関係を鮮明に表現している。

同じくギリシア精神の賞賛者であるニーチェとブルクハルトが、その「生」において、志向において、どのような相違と緊張を抱えながら対峙していたのかは、哲学史上のドラマとして永遠に記憶されるべき価値をもっている。地方の地味な教育者としての「生」に長寿を全うしたブルクハルトは、歴史主義者の現状に対する批判にもかかわらず歴史主義的な姿勢を最後まで守り通した。ここでいう歴史主義的な姿勢とは、あらゆる文化的な事象を歴史的な文脈の中に還元していこうとする研究態度のことである。そこに実証的な手続きによって命題を根拠づけていこうとする態度が重なる。この点でブルクハルトは、過去ではなくて現在の「生」に集中した。ブルクハルトの本は大胆な断定と奔放なアレゴリーに満たされたニーチェの著作活動とは根底から異なっている⁽²⁶⁾。ところがレーヴィットが言うように、少なくとも哲学の領域での歴史主義は、時の流れの中で沈黙する。年長者ブルクハルトとの精神的対決に破れ、狂気の中に死んでいった

(25) Karl Löwith, Jakob Burckhardt = 同訳, 56 頁。

(26) このことはニーチェの思想のウェーバーへの影響をめぐって数多く生み出されてきた研究にも大きな影を落としている。ウェーバーの研学生活に対してニーチェが及ぼした影響を否定することはできないが、ニーチェの著作の性質上それを立証することは、直接的な引用を除けば不可能に近い。そもそも「ニーチェ的思想」と呼ぶべきものはウェーバーの時代に流布していたが、それをどこまでニーチェ当人に帰し、どこからそれを排除するのかは、あくまでも解釈の問題でしかない。どこまでも延長することができる「ニーチェ的思想」とウェーバーの議論を接続するならば、いかようにでも議論は組み立てることができるからである。

ニーチェの哲学が最後に勝利するというわけである。ここには大都会の栄誉ある顕職を拒否し田舎の大学で静かな思索生活や後進の育成に時をおくる学究と、荒々しい「生」を礼賛し、時代を罵倒し、大言壮語する預言者のなんとも見事な対照がある。これは緊張感をはらんだドラマである。ただし、われわれの目的はレーヴィットが描き出す哲学史のドラマに感動することではない。マルチン・ハイデガーに師事したレーヴィットは「生の哲学」の信奉者の一人として、どちらかといえばニーチェの側に加担している。さらに書簡や小品にまで言及しているとはいえ、レーヴィットが用いている手法は、ニーチェとブルクハルトのテキストと、そこに表現される成熟期の典型的な「思想」だけを扱う、伝統的な思想史（あるいは哲学史）のそれである。ここではニーチェの「思想」とブルクハルトの「思想」とが入念に比較対照され影響関係が特定される。しかし、少なくともレーヴィットが信じる意味での「思想」以外のものは意識に上ってこない。さらにニーチェとブルクハルトが書いたもの以外は、後の解釈者の著作を除いて検討に入っていない。

これらの結果、ニーチェとブルクハルトは、あくまでもレーヴィットが考える「思想」あるいは「哲学」の先行者、創始者として描かれるに止まっている。レーヴィットが『ヤーコプ・ブルクハルト』のなかで、ニーチェに共通するギリシア精神賛美や、「歴史主義」の様態とその可能性・限界については入念に論じていながら、ブルクハルトの本業であった文化史、芸術史についての記述が簡単な概説の域を出ないのはこのためである。極言すれば、それはニーチェに向かうためのブルクハルトでしかない。思想家、哲学者ブルクハルトの「人格」は描き出されていても、研究者、史家ブルクハルトの「仕事 (Werke)」は抽象的なままである。『世界史的諸考察』やニーチェとの交流を中心に展開してきたブルクハルト研究は、この「バーゼルの思想家」の本業が何であったのかを放置しているようである⁽²⁷⁾。

(27) ブルクハルトの歴史哲学的・普遍史的思考が最もまとまったかたちで表現されている遺稿『世界史的諸考察』についてヴェルナー・ケーギは次のように書いている。

「……それは、公刊された最初の書簡集とともに、われわれの世紀のはじ

さらに言うならば、レーヴィットの立場は、あくまでも哲学者としてのそれであって、レーヴィットの時点での哲学的、理論的主流に対して、先行者がいかに貢献し、いかに貢献しないで忘れられたのかということのみを問題にしている。先の引用にあるように、レーヴィットにとって問題なのは、無時間的に存在する「ニーチェ思想」であって、ニーチェ自身の思想の変遷やニーチェを取り巻くブルクハルトのような人々との時間的な相互関係は放置されたままなのである。先に検討してきた理論的なウェーバー研究の特性と同じく、レーヴィットの場合も特定の思想家の「成熟期」の到達点からそれまでの生涯を目的調和的に再構成しようとする点では変わらない。

レーヴィットとは異なって、われわれにとって重要なのは、思想家が時代の課題にどのように取り組み、そして彼の残した課題が後の人々によってどのように展開させられたのかということである。そのようにして見ていくことにより、とりわけニーチェの仕事が、はるかに具体的なものとして理解されうる。これまでのニーチェ論では、いわゆる「末人」の徘徊する世紀末に一人立ち上がり同時代人の無理解の中に破滅していく英雄的・悲劇的なニーチェの姿ばかりが強調されてきた。それがニーチェ自身の望むことであるにせよ、後のファシズム（ナチズム）と共鳴することを強調するにせよ、否定するにせよ、はるかに抽象的な近代批判をそこに読み取

めに、このバーゼルの思想家「ブルクハルトのこと」のまったく新しい像を打ち立てた、すなわち現代批評家の像を、われわれが体験した暗黒世界の予言者の像を。この影響はすこぶる強く、そのゆきわたった範囲はすこぶる広がったので、なにがしの騒々しい崇拜者たちに、ときには次のことを想起せしめる必要があったくらいである、——ブルクハルトの名声を確立した古典的著作は、なんといってもその本来のテーマが美術と精神文化とであって、政治でもなければ、社会史でもない、ということ。この影響の中の良い部分は、ブルクハルトがルネサンス研究の専門家ではなくて、ニーチェやヘーゲルの相手役であり、歴史一般に関する思想家であったという認識の中に存した。今や彼の特別の地位が認識された。そして彼は偉大なヨーロッパ人であると言われはじめた。」 Werner Kaegi, *Europäische Horizonte im Denken Jakob Burckhardts*, 1962 = 坂井直芳訳『ブルクハルトとヨーロッパ像』37頁。

るにせよ同じである。ところがレーヴィットが古典的な形で提示して見せたように、ニーチェの業績のかなりの部分は、ブルクハルトという年長の友人なくしてはありえなかったはずである。そもそもニーチェやブルクハルトのギリシア精神賛美には、フリードリヒ・ヘルダーリン等に代表されるドイツロマン主義の先行者が不可欠であったし、ヘルダーリンの同世代のヘーゲルのギリシア的自由の賛美、さらにはニーチェやブルクハルトの同時代人の同様の志向が必要であったはずである。その上、ドイツロマン主義が批判対象として想定していたフランス啓蒙主義が、ギリシア・ローマの遺産をどのように扱ってきたのかも重要になってくる。そこでは「精神」よりも「理性」に勝ったギリシア人、ローマ人が登場していた。ドイツロマン主義がギリシア・ローマの古典に見出したのは、「理性」ではなくて「運命」やそれを英雄的に受け入れる——われわれがすでに論じてきた——「精神」であった。

他方でルネサンスから今日に至るヨーロッパ文化史は、ラテン語・ギリシア語教育の衰退に象徴されるようなギリシア・ローマの遺産の意義の縮小の歴史でもあった。歴史家テオドール・モムゼンのような巨人的専門家による未曾有の大業績にもかかわらず、文学においてギリシア・ローマは次第に縮小していく。モンテーニュからヴォルテールを経てニーチェに至る過程は、ギリシア・ローマの圧倒的影響力の相対化の過程でもあった。それらはますます専門科学者の対象となり、文学者や哲学者の関心からは外れていく。このように考えていくだけでも、ニーチェがやろうとしたことが、ギリシア・ローマそのものの復興などではなくて、それらに対する同時代人の専門科学的な取り組みからの解放であったことが理解できよう。それはむしろ専門家の独占に帰していくギリシア・ローマ「精神」の奪回の試みであった。レーヴィットが哲学的に「生」への態度の相違として捉えようとしたニーチェとブルクハルトの間の緊張関係は、ニーチェの奪回事業とブルクハルトの専門性の間の緊張としても理解できる。もちろんこの緊張には専門的な古典文献学者でもあったニーチェ自身の研究生活への自己言及が、興味深い形で重なってくる。

ニーチェの哲学が後の人々に与えた影響は、単に同時代の知識人への批判や時代診断、科学批判だけにとどまらず、学問的な研究における変革を

も意図していたことが知られている。ニーチェの歴史(学)批判, 歴史主義批判は, 第3章でわれわれが見てきた歴史主義的な学問のあり方への批判でもあった。ニーチェはあらゆる生の活動が全てかつて存在した前例の繰り返し, 焼き直しでしかないという歴史的知識の帰結を非難した。そこではどのような来るべき「偉大な」英雄の事業も, アレクサンダー大王やカエサルの仕事の再現でしかない。全ては亜流（エピゴーネン）の仕事であるにすぎない。このような歴史的洞察がもたらすものは, 老いて世知にたけ, 既得権の故に変革を好まぬ人間のものであって, 未知の事業に乗り出し, 若々しく「生」を謳歌する人間のものではないというわけである。このようなニーチェの認識が, どれほど努力したところでビスマルクの偉大なドイツ統一事業の亜流でしかないと感じていた人々, とりわけ十九世紀末から二十世紀初頭に政治的な志向をもった人々に, どれほどの重みをもっていたかは, 今では理解しがたい。1890年代のウェーバーのテキストを理解するには, このような時代的な現状認識をふまえなければならない。マックス・ウェーバーの『国民国家と経済政策』(1895)は, 十九世紀末のこの若い国民経済学者の時代意識を物語っている。

彼らが好んで使用した概念であるドイツ「民族」や「祖国」が, すでに目標を失い, タキウトゥスが『ゲルマーニア』で描いた若々しい「民族」ではなくて, 老いてしまったのだという理解は, ナショナリズム的・ロマン主義的な志向をもつ人々にとって耐え難いことであったのだろう。このような認識をめぐって, この時代の人々は相互に自分たちの「現実」に対する意識を共有していたのである。彼らが「われわれの世代の位置」と呼ぶものは, この時期のウェーバー自身も賛同していた世界史（普遍史）の目的論における位置付けであった。そこでは——何がそれを決定したにせよ——偉大な時代と, そうでないエピゴーネンの時代が想定されている。さらにいうならば, ウェーバー自身もドイツ史の目的論を受け入れている。ウェーバーによれば目的を達成してしまったドイツ史は, 目標を失い「成功に酔い平和に飢えた」段階に入っていく。三十歳を過ぎて間もないマックス・ウェーバーが重々しい調子で宣告する「歴史が餞別として贈ってくれたその呪い」, あるいは「政治的エピゴーネンという惨めな運命」もまた, 発展段階論を前提としている。

このような意識は初期のウェーバーにおいては何度も登場する。知識社会学者のニコ・シュテールは「マックス・ウェーバーと社会科学的知識の政治的効用」と題する文章の冒頭で、ウェーバーが1892年に『キリスト教世界 (Christliche Welt)』誌に発表した論文から次の一文を引用している。

「現代人とは、ひとつの偉大な時代が過ぎ去ってしまっただけからの人間であり、その偉大な時代を、ませた子どもが大人をまねるように、人まねのやり方によってだけでは…… [中略] ……現代人にとっては縁が切れてしまった、数々の幻想を必要とするさまざまな理念を高く掲げた生き方というものを、再び熱烈に崇拜し、再びよみがえられようとしても、決してできなくなっているのだ。」⁽²⁸⁾

1892年と1895年の前後二つの引用から、1890年代のマックス・ウェーバーの普遍史論・歴史哲学的な立場が理解できる。それは目的論的な発展段階論とそれぞれの段階に対する明らかな価値判断の介在である。

このような立場から研究生活を始めたマックス・ウェーバーが、すでにわれわれが引用してきた箇所からも明らかなように、1904年当時には遥かに抽象的で普遍的な問題に移動する。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の初稿でウェーバーが意識していた研究対象が、ドイツではなくておもにオランダやアングロ・サクソン世界でのプロテスタンティズムの動きであったことは、R. H. トーニー以来しばしば強調されてきたことである⁽²⁹⁾。同時期は、われわれが観察してきたように、ドイツの労働者の現況についてのウェーバー自身の研究が次第に後退していく時期でもあった。しかもプロテスタンティズム研究の初稿がウェーバー自身の宗教的環境や人間関係に呼応する問題を扱っていたのに対し、晩年の十年間には更に一層独自の立場に向かっていくかのようである。

それはニーチェの影響とはいえない関心の増大である。ニーチェとウェーバーの関連を強調する文献においては、これまでしばしば『プロテ

(28) Nico Stehr, *Practical Knowledge*, 1992 = 石塚省二監訳『実践〈知〉』, 84頁, ただし訳文一部変更。

(29) Richard Henry Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism*, 1926 = 出口勇蔵・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆』, 岩波文庫1959年, 下巻, 257頁以下, 註32。

スタンティズムの倫理と資本主義の精神』の部分、われわれが第2章でも引用した、

「そして、もちろんこの文化発展の「最後の人間」にとっては、次の言葉が真実となりうる。『精神のない専門人、心情のない享楽人、これらの無意味な連中は、自分たちが人類の空前の水準に到達した最初の人間であると自惚れる』。
——」⁽³⁰⁾

という部分の意義が強調されてきた。『精神のない専門人、心情のない享楽人……』の引用部分が出典不明で、ニーチェの全集にも見当たらないことは、しばしば指摘されてきた。ただし、これはいかにもニーチェ的な物言いである。

しかし晩年の『経済と社会』や『世界諸宗教の経済倫理』に特徴的な立場は、はたしてニーチェの影響と何らかの関係があるのだろうか。ニーチェの思想の主眼が悪しき近代人の醜態を克服する「超人」の獲得、すなわち新たな価値の創出にあるとするならば、晩年のウェーバーのなかにそれに当たるものがあるのだろうか。答えは否定的にならざるをえないはずである。

むしろウェーバーが向かったのは、ニーチェとは反対に、そのような意図を放棄することであった。ニーチェは新たな価値の創出について語ったが、晩年のウェーバーはそのような価値を信じることができない時代の到来をいち早く告知することで名声を得たはずである。『職業としての学問』（1917/19）の有名な最後の部分は、次のように始まる。

「現代に独特の合理化と主知化、そして何よりも脱魔術化、すなわち、まさに究極のそして至上の価値が、公の領域から神秘生活の別世界や個々人の直接の関係による友愛の中に後退してしまうことこそが、われわれの時代の運命である。[中略] 新しい真の預言者なくして新しい宗教を作ろうと思案するならば、同じようなこと[承前：新時代の芸術の陳腐化]になってしまうし、宗教の場合は芸術よりも一層悪質なものとなる。そして教壇の預言はただ狂信的な宗派（Sekten）をつくりだすにすぎず、決して本当の教団（Gemeinschaft）を創造しない。時代の運命を男らしく耐えることができない人間には次のように言うべきである。彼はむしろ黙って、しばしばありふれているように背教者を気取ること（Renegatenreklame）をせずに、単純素朴に、腕をひろげて慈悲深く

(30) Weber, RS I, S. 204.

まってくれている、古い教会の中へ帰りなさい、と」⁽³¹⁾

ツァラトゥストラの口を借り、狂気に沈んだ晩年には自らを「ディオニソスの祭司」、あるいは単に「ディオニソス」と呼んだニーチェには相応しくない言辞である。ニーチェと晩年のウェーバーの根本的な相違がここにある。両者の違いは何よりも、上記の引用に典型的に現れているような、晩年のウェーバーに独特の醒めた現実認識である。ここには、「超人」も「ディオニソス」も居場所がない。

確かに初期の1890年代と1904年当時のウェーバーにニーチェの影響が色濃く見つけられるとしても、晩年のウェーバーは別の問題に関心を移動させてしまっているのではなかろうか。少なくとも言えることは、ニーチェには比較文化論的な普遍史への関心は見られないということである。そもそも普遍史の多元的な比較論は、「生に対する歴史の罪」を指弾したニーチェにとって、最も排斥されるべき知の在り方であったのではなかろうか⁽³²⁾。この点で、ニーチェはペルシアの預言者の名前を冠した有名な著書——『ツァラトゥストラかく語りき』——を書いているにもかかわらず、徹頭徹尾ヨーロッパ中心の哲学者なのである。

ここまで議論をつなげてきた後で、前の章で論じた晩年のウェーバーの普遍史論の立場は、どのように理解できるのだろうか。先にウェーバーの

(31) Weber, *Wissenschaft als Beruf* 1917/1919, in: Studienausgabe der Max Weber-Gesamtausgabe, Bd. I/17, Tübingen 1994, S. 22f.

(32) そもそもニーチェは「社会学」に対して敵対的態度を示していた。例えば、『善悪の彼岸』(1886)では、コント社会学をカトリック・ローマ的論理と呼び、北方民族には無縁のものであると主張した (Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, in: Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke: Kröner Taschenausgabe Bd. 76, Stuttgart 1976, S. 62)。また『偶像の黄昏』(1889)では、スペンサーの名前を挙げて「イングランドとフランスのすべての社会学」を「墮落本能」と呼んでいる (Friedrich Nietzsche, *Götzendämmerung*, in: Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke: Kröner Taschenausgabe Bd. 77, Stuttgart 1964, S. 159)。ニーチェにとって社会学とは強者の本能を凡庸な社会倫理へと「墮落」させる現象、「デカダンス」なのである。もちろん、ニーチェの論理に従えば晩年のマックス・ウェーバーの「社会学」も同様のものとみなされなければならないはずである。

晩年の普遍史論について、次のような理解を提示してきた。すなわち、1. 比較文化論的な意味で、無限に特殊であることによってそれぞれに普遍的である個別の歴史からなる普遍史、2. 実際に世界が一体化され統合された歴史としての普遍史（第3章第7節参照）。これらは、1904年当時のウェーバーの普遍史とは、著しい対照を示すものである。1904年当時のウェーバーの立場は西洋中心主義的な近代化目的論であった。上記の二つの「普遍史」を時系列に並べて理解しようとするならば、1904年の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の初稿のウェーバーでは、2の普遍史が全面的に展開されていたが、晩年の十年間のウェーバーは、1の普遍史の関心が加わり、事態が変化する。何よりも重要なのは、1と2の間の緊張関係がここに来て出現したことである。緊張関係はこれまでになかった複雑で緻密な考察をこの著者に強いることになったはずである。敢えて言えば、1920年の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、晩年にいたって対決するに至った二つの普遍史の間の緊張関係を象徴しているのである。ここに晩年のテキストが帯びている複雑な性質を理解する鍵が潜んでいるようにも思われる。

第3節 「実証主義」との関係

1890年代のマックス・ウェーバーの関心を理解するには、他方で歴史科学に対する自然科学の決定的な影響力を踏まえておかなければならない。そもそも十九世紀は「実証主義」という名前と呼ばれる思想そのものを誕生させた時代でもある。十八世紀の思想家たちを特徴づけていた半ば素人じみた、文士気取りの懐疑主義は、十九世紀の専門科学者の真摯な使命感に取って代わられる。十八世紀と二十世紀とは、知識人たちが置かれていた状況が異なっている。十八世紀の知識人はなによりも宮廷社会に所属した文人であり、対するウェーバーの時代の知識人は巨大な大学機構の分業体制に所属する専門家となっていた。この結果、劇作もすれば哲学も、自然科学についても論じるといった宮廷の知識人は、職業としての学問人、すなわち己の専門に精進する知識人へと変貌する。これは思想の社会史的な説明、あるいは知識社会学的な説明と呼ばれているものである。

ただし思想家の「社会的」諸条件を明らかにしようとする社会史的な手

法にも決定的な欠陥がある。社会史はそのような条件の下で、そして同じ社会的条件を共有する著者たちの中で、ヴォルテールやカントだけが、なぜ他の著者とは異なり、今日のわれわれの読書の対象となりうるような価値のある著書を書くことができ、「思想」を生み出すことができたのかということについては少しも教えてくれない。このことは、この研究で主題として扱っているマックス・ウェーバーについて考える際にもあてはまる。社会史的な説明は、心理学的な説明と同じく、ウェーバーのおかれていた諸条件をいろいろに提示して読者を説得しようとするが、決まって次のような逆の道筋の疑問には答えられない。すなわち収入や出身階層、交友関係、戦争や好不況、就職や昇進、家族構成、両親や兄弟、妻、あるいは同僚との関係、親族の精神病の有無、身体の発育状況などの社会的条件や心理的・生理的条件を満たしたならば、はたしてウェーバーの残した仕事は何度でも再現できるものなのかという疑問である。⁽³³⁾

もちろんこの疑問は古くから「実証主義」に対して投げかけられてきたものでもある。自然科学における実証主義は、実験を繰り返すに際して、自明の諸条件とみなしうる分析項目を捨象することによって成功してきた。例えば科学史が語るように、ルネサンス時代にガリレオが行った物体の落下の実験では、慣性の問題、地球の引力の地域的偏差や空気の抵抗、さらに今日ですら実験者の意志や実験に介在しうる障害——実験器具の不備や研究予算の不足による実験の中止や教会による研究成果の発表の妨害など——は捨象されている。自然科学の研究では当然のことである。しかし対象が思想や社会現象、とりわけ歴史的事象の場合には、敢えて言うならば、ガリレオが無意味なこととして無視する要素の方がむしろ重要になる。例えば、多くの歴史学者は経済学者の理論のもたらす帰結よりも、一介の相場師の妄想や天変地異のもたらした市価の変動や、一国の政治家の個人的判断による経済政策の帰結を優先しなければならない責務を負っている。この場合理論に現実を従属させようとすることは問題外である。

十九世紀の精神科学者、とりわけ新カント派の哲学者は精神科学と自然

(33) Arthur Mitzman, *The Iron Cage: An Historical Interpretation*, New York 1970.

科学の方法の違いを明確化しようとした。彼らが言おうとしたことは、要するに精神科学、そして歴史科学の方法の独自性である。ただし一面で精神科学と社会科学とは人間が学的考察の対象とするものの中から物理学的自然科学的方法によって認識しうる要素をどんどん切り取っていった残りの部分としての性質を持っている。このような観点に立つならば、精神科学と社会科学の対象が最初から複雑なのではなくて、人間が知りたいと考える対象の中で自然科学的な方法で論じることができない内容が、精神科学や社会科学として一括されているというべきであるといえよう。まさに残り物である。しかしそのような残余範疇としての精神科学や社会科学ははじめから出来損ないの自然科学として続けられていく必要はない。自然科学の未曾有の成功は、他方で完成された科学としての精神科学や社会科学、そして歴史科学を樹立しようとする志向を刺激してきた。

歴史主義や、歴史主義に結びついた新カント派の事業は、実証主義の残余範疇としての領域に独自の方法を与えるという課題を解決しようとするものであったということもできよう。これに対して実証主義は出来損ないの自然科学としての精神科学や社会科学を、自然科学に匹敵しうる「科学」として構成しようとしているということもできる。自然科学に対抗する独自性の主張か、それとも追従か、この二者択一が彼らの前に横たわっていた。追従は当時の人々にとって欠点の多い選択であった。欠点とは彼らが主要な関心事として共有していた諸問題、とりわけ「精神」や「生」や「個別性」「人格」といった概念が、死せる（「生」のない）物質的自然界の法則知の中で無意味なものとして放棄されてしまわざるをえないことであった。生のない物質界の法則と同様の法則で「精神」や「生」を把握できるのか否かが焦点となる。歴史主義や新カント派が実証主義を全面的に攻撃したのはこの点である。ただし歴史主義は自然科学の方法を排除し精神科学や社会科学を純粹化しようとすることに熱中するあまり、逆にあらゆることを歴史に還元しようとする。自然と歴史の間の、あれかこれか、二項対立的な問題設定は常に極端な結論の呼び水になりやすい。

実証主義（自然実証主義）と歴史主義両方の批判者として、エドムント・フッサールは『ロゴス』誌に発表した「厳密な学としての哲学」（1910）のなかで次のように書いている。

「自然主義とは、自然、すなわち精密な自然法則に従う、空間的時間的な存在の統一という意味での自然の発見の結果、現れてきたものである。自然科学がおりびただしい数の厳密な認識をつねに新たに基礎づけることによって、自然の統一という理念を一步一步実現してゆくにつれて、自然主義もまた次第に広がってゆく。これよりややのちに、これとまったく似通った形で『歴史の発見』、および新しい精神諸科学の建設の結果として、歴史主義が生まれ育ってくる。これらの諸科学を支配している習慣的な解釈のしかたに従って、自然科学者はすべてのものを自然とみなそうとし、精神科学者はすべてのものを精神あるいは歴史的象とみなそうとする。その結果、そのようにみなされないものを曲解しがちである。」⁽³⁴⁾

「すべてのものを精神とみなそうとする」精神科学者たちがいかなる議論を展開してきたのかは、既に議論してきたところでもある。「厳密な学としての精神科学」を志向したディルタイが行った「世界観(哲)学」の事業は、フッサールが念頭に置いているものでもある。次々と引き起こされる展開は、長期的にみれば、なにが「厳密」であるのかを、次々と書き換えていく過程であると思なすことができよう。

フッサールが「自然科学者」と呼ぶ人々も、同時期に大きな転換を経験する。ほぼ同じ頃にドイツで引き起こされたアルバート・アインシュタインの相対性理論とマックス・プランク、ヴェルナー・ハイゼンベルクの量子力学がもたらした大転換——いわゆる物理学革命——は、伝統的に行われてきた精神科学者による「自然科学」批判の、批判対象そのものを根底から変動させることになる。プランクが量子仮説を導入したのは1900年であり、アインシュタインが特殊相対性理論を発表したのは1905年である。さらに1927年にはハイゼンベルクの不確定性原理が出ている。これらの「大発見」は古代ギリシア以来の存在や運動に関する哲学的思考にすら根底からの修正を迫るものであった⁽³⁵⁾。パルメニデスの原理、すなわち「在るものは在る」は、アリストテレスの論理学の基礎でもあった。それに確固として動かない空間を結びつければユークリッドの幾何学となる。

(34) E. Husserl, Die Krise der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie, 1936 = 小池稔訳 『厳密な学としての哲学』(『世界の名著』51巻), 中央公論社1970年, 119-120頁。

(35) H. Cf. Russell, Outline of Philosophy, 1927, p. 86f.

ニュートンによって一つの頂点を迎えた物理学は、ロックやヒュームの経験論と合致して哲学的にも確固とした確信となり、さらに大陸においてヴォルテールという影響力絶大の宣伝普及者を得る。古典的な物理学と結びついた経験主義は、増大していく人間の知識を無条件に根拠づけているように思われた。その上に科学技術のもたらした飛躍的な富や軍事力の増大が重なる。ところが固定的な空間に実在物の絶対的な運動を想定してきた自然科学は、フッサールに批判されたとき既に転機をむかえていた。われわれが見慣れた物質の実在とそれが位置する空間に、「精神」の全てを還元しようとするのが伝統的な「自然主義」であるならば、「自然主義」そのものが足下を掘り崩されつつあったといえる。「相対主義」は自然科学に特権的に与えられてきた根拠付けを奪い去っていく。

これに対して精神科学はすでにはるか以前から歴史主義の興隆のためによく似た状況に置かれていた。フッサールの眼前にあったのは「双子の相対主義」とでも呼ぶべきものである。その兄貴分に当たるのは、いうまでもなく「歴史相対主義」である。全ての事象が、とりわけ人間の思考が全てにわたって歴史的な変動に不可分に結びつけられ、なにが正義でありなにが間違っているのかということが普遍妥当性を持たないならば、哲学の伝統的な領域である倫理学は普遍的な妥当性を主張することができなくなる。多種多様な価値観の歴史的な変遷と闘争で現下のところ生き残っているものが「合理的」であり「正当」であるにすぎないと考えれば、哲学的な考察は究極的には全て歴史学的考察に解消されていくだろう。むき出しの価値観の闘争状態が、専門的な歴史研究によって暴露された。同時期に帝国主義と植民地運動に伴って発展した民俗誌や人類学は闘争状態を空間的にも拡大してしまった。増大していく人間の知識は時間的にも空間的にも整序不能な様相を呈してくる。そこに付け加えられたのが弟分の相対主義、すなわち自然科学領域での相対主義であった。

双子の相対主義に更に人間の意識界の外側の領域が研究領域として付け加えられることになる。啓蒙主義が称揚した「良識（bon sens）」、そして「理性」は、人間の意識界の問題であった。ところが意識界の範囲を乗り越えて人間の無意識や夢、精神病、狂気の問題に考察が踏み込んでいくと、今度は「理性」をめぐるこれまでの思考そのものがあくまでも生理的、さ

らには文化的、社会的に出来上がった約束事でしかないことが見えてくるようになる。それは不動のニュートン空間が物理的に可能な唯一のものでなくて、他にも可能なうちの一つでしかないことを明らかにしたアインシュタインの業績と呼応する。前の章で既に触れたジクムント・フロイトが『夢判断』を発表したのは1900年であった。

人間が置かれている諸条件は、人間の知的な営為の中で、次第に不確実なもの、相対的なものになっていく。このような背景の下に人々が容認せざるをえなくなってきた出発点とは、すなわち長年にわたって続けられてきた人間の思考が、全てにわたって特定の規約や約束事に依存しているのであり、それらを乗り越えて真実性を主張することなどできないのだということである。議論の焦点は認識の内容ではなくて、認識を条件づける規約や約束事の方に移動しなければならなくなる。約束事を問題にする以上は、当の約束事を受け入れた人々の置かれていた人的、思想的、学問的諸条件も問われなければならなくなる。精神科学や社会科学がひたすら概念構成の問題に集中するようになり、概念と認識対象との間の関係に多くの言葉を費やし続けるようになったのはこのためである。人々は自分たちが所有する認識上の道具立ての性能に疑いを感じるようになり始めていた。

とりわけ自然科学において成果を収めてきた種々の法則知を精神科学や社会科学において認めるのか否かという問題は、十九世紀末以来の最大の争点の一つであった。ディルタイやヴィンデルバント、リッカート等の仕事は既に多くの議論をこの問題に対して積み上げてきていた。先に触れたフッサールによる自然主義批判の下地には、自然科学の勃興に対抗する精神科学の独自性の確保という先行者たちの課題があった。

フッサールに先立ってマックス・ウェーバーが1904年の「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」において次のような記述をするに至るには、以上のような背景があったわけである。

「……そして法則が『一般的 allgemein』であればあるほど、すなわち抽象的であればあるだけ、その法則は個性的な現象を因果的に帰属させようという欲望にたいして役立つことは少なくなる。したがってまた、間接的にいえば、一般法則は、一般的であればあるほどそれだけ、文化現象の意義の理解にとっても役立つところは少ないのである。」

「……精密自然科学にとっては、『法則』は普遍妥当的であればあるほど、重要であり価値が多いのだけれども、歴史的現象をその具体的な前提において認識しようとする、もっとも普遍的な法則は、その内容がもっともとぼしいがために、同時にもっとも価値が少なくなるのが、普通である。なんとなれば、ある類概念（Gattungsbegriff）の妥当性——その範囲——が広ければ広いだけ、それはなるだけ多くの現象の中で共通なものをふくむために、できるだけ抽象的なものとなり、したがって内容のとぼしいものとならなくてはならないから、その概念は具体的なありかたでの現実界からわれわれを遠ざけることがそれだけ多いものとなるからである。われわれの文化科学においては、普遍的なものの認識は、普遍的であること自体のために価値があるものではないのである。」⁽³⁶⁾

そして後年カール・ポパーが『歴史主義の貧困』でウェーバーのこの箇所に言及していることは象徴的である⁽³⁷⁾。ポパーが暴いて見せた歴史（法則）主義の仕掛けは、十九世紀の学問の本質的な部分をなしている。それは新カント派の用語を用いるならば、実証主義が掲げた法則定立学への志向と歴史主義の個性記述学への志向の間の妥協の産物であった。個性的で多様な歴史変動に法則があり、それを究明することで社会問題全般についての予言が可能になるという発想がここに登場する。それは歴史的変動の実証主義として十九世紀後半の歴史科学全体を支配した。ポパーが想定しているのが、ポパーが『開かれた世界とその敵』で「予言の大潮」という名で呼ぶヘーゲルからマルクスに至る歴史哲学的な歴史考察であることは事実である。

ただしここで重要なことは、この問題が、ポパーの論争的著作の内包する政治的意図を越える重大さをはらんでいることである。ポパーが明らかにして見せた問題は、ポパーが盛んに非難したヘーゲルやマルクスの追従者たちの歴史理解を超えて、十九世紀科学の本質を捉えているのである。この理解はもちろんポパーただ一人によって出来上がったものではない。先のフッサールの文章の用語を取り替えるならば、「歴史科学がおびたしい数の厳密な認識をつねに新たに基礎づけることによって、歴史的世界

(36) Weber, WL, S. 178, 179-180 = 出口訳 45 頁

(37) Karl Popper, The Poverty of Historicism = 久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』、中央公論社 1961 年、219 頁。

の統一という理念を一步一步実現してゆくにつれて、歴史主義もまた次第に広がってゆく」となる。これはポパーの考えと同一のものである。フッサールやポパー自身の本来の意図は度外視するとして、彼らは重要なことをすでに論じている。さらにウェーバーが「法則」の問題を主題化し、歴史科学の法則科学化を退けていたのも、もちろんポパーに先行していた。ポパーの議論は彼自身が著書の中で引用する以上に、はるかに多くの点で以前の論者の議論を引き継いでいる。

このように見ていくと、重要なのはウェーバーやフッサール、さらには後続者のポパーを個別的に理解することではなくて、むしろ彼らが共通して取り組んでいた課題を明らかにし、その上で彼らの独自の貢献を指摘することである。

われわれは重要な問題の多くを個別的なテキスト研究において見逃してきたようである。個々の著者のテキストだけを読んでいくと、突然の変身に突き当たることがある。ウェーバーの場合にこのことが極端であり、1895年のフライブルクの教授就任講演『国民国家と経済政策』に典型的に現れているような労働問題に熱心でナショナリストの歴史主義者、あるいは歴史実証主義者が突然変化し、「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」や『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の著者に変身する。それがさらに晩年の「社会学」の立場へと変貌していくのである。もっと簡単にいえば、ウェーバーはドイツ民族至上主義、西洋中心主義の経済学者、歴史家から、世界宗教の数千年の動きや近代社会共通の運命を考える普遍史家、社会学者へと転身しているようにみえるのである。

多くのウェーバー研究文献は、ウェーバー個人の伝記的事実に、このことの原因を求め、ウェーバーの精神疾患や家庭環境の変化の意義を強調してきた。例えば、妻のマリアンネ・ウェーバーが詳しく伝える父親との対決や、精神疾患とそこからの回復がウェーバーを「天才」にしたというわけである。ここに「天才」の業績にしばしば結びつけられてきたロマン主義的解釈の子孫を見出すことはたやすい。「天才」を可能にするのは常人では不可能な精神的緊張や破綻であり、その克服こそが「天才」の必須条件なのだといった種類の解釈である。ドイツロマン主義から継承された「個性」や「人格」、さらには「天才」への尊崇が、今度はウェーバー自身の

生活史にも当てはめられるわけである。

ところが、眼を一旦転じてウェーバーの時代の課題という問題に着目するならば、また別の像が見えてくる。それは同時代人との緊張関係の中で共通の課題に取り組んでいくウェーバーであり、フッサールでありジンメルである。彼らの前にあったのは、十九世紀の科学が陥っていた閉塞状況であった。彼らはそれを個別的にはすでになじみの言葉で表現していた。ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の最後のところで初稿以来書いている時代診断や、晩年のジンメルがしばしば口にした出口のない悲観主義は、決して彼らの独創ではない。専門分化した科学と「生」や「精神」の対立といった図式、「文明」の野蛮に対決する「文化」といった図式で、産業社会の進展、分業によって断片化され意味を喪失した「生」「精神」とその回復といった問題提起は、当時の言論界、文壇を通じての決まり文句であった。「自然科学」と「文化科学」の対立という問題意識も、それだけを取り出してみれば、新カント派の複雑な認識論から論理的な必然性に従って出てきたにすぎないように見える。しかし、そのような複雑な論理を読者として支持する人々が、著者たちと共有していた価値観の相互関係を考えるならば、別の理解が可能になる。彼らはどのような価値を著者として読者として求めていたのか。それは自然科学がもたらした旧来の伝統や古くからの価値観の破壊に対する抵抗であり、何もかもを要素に分解し、原因と結果、目的と手段の連鎖として考えようとする実証主義に対する批判であった。ディルタイの「精神科学（Geisteswissenschaften）」という概念が、ドイツの読書人にとってシラーやゲーテ、さらにはドイツロマン派の伝統をすぐにでも思い起こさせる「精神（Geist）」という言葉に冠していたことは忘れてはならない。彼らの後の世代に属するテオドール・アドルノが——ドイツ知識人にとって——「自分たち自身の過去の歴史的威力が全部乗り移ったかに見える一人の反対者」⁽³⁸⁾と呼んだオズヴァルト・シュペングラー（1880–1936）は、このことを体現していた。アドルノは「シュペングラーの企画を支えるアルキメ

(38) Theodor Wiesengrund Adorno, *Prismen: Kulturkritik und Gesellschaft*, 1955 = 渡辺祐邦・三原弟平訳『プリズメン——文化批判と社会』, 63 頁。

デスの点」)として次の一節を引用している。

「精神に対して存在するのは真理だが、生との連関において存在するのはただ事実のみである。歴史的考察、または私の言い方では相貌学的感得とは血の決定であり、過去と未来に拡張された人間知であり、人格、状況、事件、必然性だったもの、そこに在ったはずのものに対する生得の眼差しであって、単なる学問的批判やデータの知識ではない。」⁽³⁹⁾

アドルノの評価が妥当なものかどうかは判断しないとしても、シュペングラーの文章は確かに多くのことを語っている。「精神」と「真理」、「生」と「事実」、「歴史」、「血の決定」「人間知」「人格」……、「単なる学問的批判やデータの知識ではない」もの、等々の多くはすでにこの章で論じてきたものばかりである。もちろんこれらは誰もがこれらをシュペングラーの創作にかかる概念ではない。彼らは互いに多くの道具立てを共有していた。シュペングラーに明らかにみられる自然科学的な世界観に対する対抗心、あるいは嫌悪は、もちろん当時の「文化科学」「精神科学」に従事する人々の自明の共通項であった。

実際この時代のドイツ人にとって「精神」は、哲学者や宗教学者、芸術史家や、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の著者の専売品ではなかった。マックス・ウェーバーは今日ではしばしば経済秩序や社会体制の問題に「精神」の観点を導入した功績——あるいは罪業——を強調されてきた。しかしウェーバーが言うのとは別の「精神」を近代資本主義成立論に導入した同時代人もいた。1863年に生まれたヴェルナー・ゾンバルトである。ゾンバルトはウェーバーやエドガー・ヤッフエと共に『社会科学および社会政策アルヒーフ』を編集しながら、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神の関係に関しては、ウェーバーと真っ向から対立する見解を発表している。ゾンバルトにとってプロテスタンティズムの倫理とは、単純に言うならば、資本主義の成立を妨げる要因でしかなかった。これに対してゾンバルトが「近代経済人の精神史」において強調するのが、「恋愛と贅沢と資本主義」の関係であり、黄金や金銭への渴望であり、衒示

(39) Adorno, ebd. = 同訳書, 76-77頁。アドルノのシュペングラー引用は, Oswald Spengler, Der Untergang des Abendlandes: Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte, Bd. 1, S. 56.

的に消費する王侯貴族、「ブルジョワ」の生活態度であった。

「経済生活における精神とは何か？私がこれについて語ったとき、ある機知に富む人は、そもそも経済生活において精神などはないと述べた。たしかにこの意見はあやまっている。それは、この言葉を彼が語った意味においてとらえても、われわれがこの言葉にいろいろと付録をつけてとりつくろった意味においても、あやまっている。」⁽⁴⁰⁾

ゾンバルトが『ブルジョワ——近代経済人の精神史』（1913）の第一章「経済生活における精神」をこのように書き始めるとき、彼は「精神などない」はずの経済生活にまで「精神」を見出すことに、大きな魅力を感じていたはずである。もちろんゾンバルト流の「精神」とは、マックス・ウェーバーを語るときに必ず引き合いに出される「精神」とは別の性格をもつものである。

ただし大きく異なっているはずの両者の間にも共通点はある。それは「精神」を従来の精神科学とは異なった形式によって論じていこうとする立場であり、後の章でわれわれが論じる「社会学」という新事業である。「社会学」は彼らにとっては何よりもまず従来の精神科学、あるいは従来の歴史科学に対する批判的な検討を意味したのである。そして従来の精神科学に対する批判的な検討は同時に精神科学や文化科学のさまざまな側面への新しい試みを生み出すことにもなる⁽⁴¹⁾。

(40) Werner Sombart, *Der Bourgeois: Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, Berlin 1913 = 金森誠也訳『ブルジョワ——近代経済人の精神史』, 11 頁。

(41) われわれは当時の「心理学」が今日のそれとは異なっていることを先に強調してきた〔第1章第2節〕。ディルタイに端的に現れているように、当時の心理学は何よりも「精神」を扱う科学、すなわち「精神科学」であった。ジンメルやゾンバルトが「心理学」という言葉を口にし、マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』について論じた背景がここにある。ウェーバーのこの研究には、「資本主義の心理学」とも呼ぶべき性質がある。

第4節 芸術との関係

われわれはマックス・ウェーバーにいたるまでの「精神科学」や「文化科学」に従事していたドイツ知識人達の共通の課題を検討してきた。そこで登場してきた諸概念、とりわけ「精神」「文化」、さらには「生」「個別性」「人格」は十九世紀において成立したとされる一つ概念と非常に密接に関係しあったものとして理解されてきた。それは「芸術」である。この密接さがあまりにも印象深いものであったために、今日では、「精神」や「文化」や「生」が芸術やその関連領域の独占物であるように考えられがちである。さらに「社会学」の二十世紀における展開は、確かに「芸術」との距離を拡大させてきたといわなければならない。例えば、集合概念としての「社会」に集中していく場合には、おそらく「芸術」はあくまでも「芸術家」という職業に従事する人々の社会生活に考察の的を絞っていくほかはない。もしそうであるならば、そこで扱われるべき「芸術」は、芸術そのものの本質に意義を見出している多くの人々（芸術家）にとってほとんど関心を惹かない社会現象の一連の連なりでしかないことになる。さらに社会集団としての「芸術家」は規模からしても取り立てて重要な意義を持つようにも思われない。同様の事情は経済学と芸術の関係にもあてはまる。

ただし問題を世紀転換期ドイツの歴史科学、さらに新事業としての「社会学」に絞っていくならば事情は異なってくる。歴史科学、精神科学の新事業としての「社会学」は、間違いなく「芸術」と共通の対象を念頭に置いていたはずである。ここには、すでに科学そのものの歴史的な変動が顔を出している。文学や芸術は、自然科学に対決するものとして称揚された。今日では非常に遠距離にあるように思われる美術史（Kunstgeschichte）と「社会学」は、「精神」を媒介として近接関係にあり、互いに影響を与えあっていた⁽⁴²⁾。いうまでもなく「芸術」とは、「実証主義」へと歩んでいくその後の「社会学」が最初に手を切った旧友であった。ジンメルがレンブ

(42) 当時の芸術と社会学の密接な関連については、茨木竹二の示唆に多くのものを負っていることをここで感謝したい。茨木はハインリヒ・ヴェルフリンに代表されるドイツ造形芸術論の思惟が、同時代の文化科学全般を考える上でいかに重要であるのかということ、著者との会話で明らかにしてくれた。

ラントに関する名著を書き、マックス・ウェーバーが音楽社会学についてのまとまった草稿を書いていることは、このことの例証である。彼らにとってこれらの仕事は、決して余技でもなければ単なる個人的な趣味に起因するものでもない。

彼らにとって芸術は、精神科学に寄与すべきものであった。レンブラントの芸術と生涯に刻印された「精神」や「文化」は、レンブラントの「生」、そして「個別性」、さらにはこれらを総合する「人格」の証として、ゲオルク・ジンメルが称揚する。ウェーバーが音楽の「合理化」を論じたとき問題としたのは、芸術活動における人間の思惟の形式がいか「合理化」していくのかということであった。ウェーバーが遺稿「音楽の合理的社会学的基礎」で探求しているように、無限に可能な音響の変化の中から音楽にとって使用可能な音を選び出し、楽曲へと組み上げていく手続き⁽⁴³⁾は、ヨーロッパにおいては厳格に学理的、すなわち「合理的」な性格を帯びていく。これがルネサンス時代のポリフォニーからバロック時代を経て古典主義、ロマン主義へと大展開していくヨーロッパ音楽の根幹を形成した。世界のあらゆる民族に普遍的に見られる単純な舞曲や歌謡の水準を乗り越えロマン派の巨大交響曲のような大構造物を建設していくには、音響そのものの秩序づけに対する理論的基礎づけが不可欠であった。世界の多くの古典音楽が楽器の音色の超人的な洗練や奏者の偉大な即興性に主な関心を示したのに対し、ヨーロッパの音楽は理論的「合理化」と楽曲の構築力に集中する。ウェーバーがしばしば参照されてきた『宗教社会学論集』序言

(43) Weber, Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik, in: Wirtschaft und Gesellschaft, 4. Aufl., 1956, Anhang = 安藤英治他訳『音楽社会学』創文社1967年。ただしこのテキストは未完の「構想メモ」（安藤英治）として書かれたものであり、ウェーバーの死後発見され遺作『経済と社会』の巻末につけ加えられ公刊された。またテキストそのものの成立時期も1911年から12年頃と推定される他は不明である（同訳書に収録の安藤英治「マックス・ウェーバーと音楽」244頁以下）。このため全体の論文としての構成も不備であり、序論的な部分も結論も欠けており注記も付けられていない。ただしこのテキストの全体の意図する内容は、次にわれわれが本文中で引用するウェーバーの引用と驚くほど呼応しており、それがあたかも結論を成しているかのようである。

で次のように述べているのは重要である。

「芸術においても、事情は似ている。音楽を聴き分ける耳は、今日のわれわれヨーロッパ人よりも他の諸民族の方がむしろずっと見事に発達していたようであり、とにかく、われわれ以下ということはなかった。さらに、種々の多声音楽はひろく世界中に広がっていたし、多数の楽器の合奏とかディスカント唱法さえ西洋以外の地域にもあった。西洋の合理的な音程はのこらず、他の地域でも、計算されてよく知られていた。しかし、合理的なかたちで和声的に解釈されてきた半音階法と異名同音法、弦楽四重奏を中核とした管弦楽のアンサンブル組織をもつ管弦楽や、通奏低音や、記譜法（これによってはじめて近代における音楽作品の作曲と演奏が、したがって、そもそも作品が永続的な存在となることが可能となった）、ソナタ、シンフォニー、オペラ——もっとも標題音楽、描写音楽、和音変化、半音階法などはきわめてさまざまな音楽にも表現手段として見られた——そして、それらの手段として用いられるオルガン、ピアノ、ヴァイオリンなどすべての基本楽器、そういったものすべては西洋にしか存在しなかった。」⁽⁴⁴⁾

これは1920年に書かれたテキストであるが、1911年から12年頃に書かれ放置されたと考えられてる上記の遺稿「音楽の合理的社会的基礎」と見事に呼応し合っている。1911年から12年という時期は、奇しくもウェーバーが晩年の新たな関心に次第に移動していく時期と合致する。このことから晩年の十年間のウェーバーにとって音楽の「合理化」という問題が常に重要であったことが理解できる。ただしその関心は音楽に対する趣味的、あるいは感性的な愛好に止まるものではない。ここで重要なことは、音楽の「合理化」というテーマが、晩年のウェーバーの他領域の関心との間でどのように関連し合っているのかということである。

ヨーロッパにおいて古代以来の音楽の展開は、無限の事象の中から理論的手続きによって有限の秩序（体系）を組み立て、それを再び無限に展開していくという型の認識行為を明確に反映している。これはいうまでもなくヨーロッパ的思惟そのものを象徴している。ウェーバーが古代哲学者以来の音楽の哲学的意義を踏まえていたことは、否定しようがない。ウェーバーが探求したのは、ヨーロッパ的思惟の形式が音楽という個別領域においてどのように展開していったのかという問題である。もちろん彼の関心

(44) Weber, RS1, S. 2

は音楽だけに止まるものではない。音楽は他の芸術領域とともにヨーロッパ的思惟の一翼を成し、ウェーバーの名を不滅にした宗教的思惟、政治的思惟、経済的思惟に関する研究と、ここに向き合っているかのようである。

芸術は文化科学にとって第一に対象とされるべき地位を保持し続けていた。そこにおいて重要なことは、特定の学科の理論的、認識論的な基礎づけを純化していくことではなくて、人間の生の文化的諸連関を全体的に読み解いていくことであった。芸術とはそのような全体的連関の最も手近な素材となったはずである。また同時に芸術家が古代から取り組んできた認識上の努力は、文化科学研究に従事する人々が対象としての文化事象を認識する際の範例としての役割も果たしてきた。

文化科学が、一面では人間心理の解釈学（ディルタイ）を標榜し、また別の面では文化的事象の認識の基礎づけに集中し（ヴィンデルバント、リッカート）、また別の所では哲学の数学的基礎づけを経由して、間主観性（相互主観性）の現象学や生（活）世界の存在論へ向かっていき（フッサール）、さらにこれらに触発されながら人間の生と社会的相互関係の考察に焦点を合わせる（ジンメル）とき、人々は大きく共通した課題に取り組んでいることを意識していたはずである。もちろんマックス・ウェーバーもまたこれらの人々の名前の連なりの一環を成している。マックス・ウェーバーを世紀転換期の精神科学の文脈の中に置いて観察してみると、人はそこにもたらされる余りにも多様で雑多な構成要素に眩惑されるかもしれない。心理学あり、種々の互いに対立し合う哲学あり、世界観や人生観についての決断論ありといった状況である。そこにはもちろん芸術に関する考察も含まれる。しかしこれらの多様な対象・素材に対して取り組んでいくに際して、彼らが手中にもっていた道具立ては限られていた。簡単にいうならば、一方には新カント派の影響下における概念構成論の様々な変奏があり、他方には「生」や「精神」「世界観」をめぐる、多様であるようで実際にはよく似通った問題群が控えている。

以上のような精神科学の伝統がいかにドイツ的なものであったのかは、別の文脈に属する著者たちの評価に一瞥を与えれば分かる。とりわけウェーバーの事業をいかにして評価するのかという点に注意するならば明白である。例えばタルコット・パーソンズは、ウェーバーの最重要の貢献

を、「自然科学」と「文化科学」の対立が、「しよせんドイツの学界の伝統として成立してきた間違ったディレンマのもたらしたもの」でしかないことを示したことにあるとした⁽⁴⁵⁾。パーソンズの幾分強引な評言が、もちろん理論家としてのパーソンズの立場を反映していることは事実である。しばしば批判されるようにパーソンズは確かに自分の理論にとって役立つものしかウェーバーから採用していない。その反面でパーソンズはドイツ流「精神科学」とは全く異なった実証科学として新たな「社会学」を構想する。パーソンズにとって、新カント派やディルタイに代表される「自然科学」と「文化科学」の対立は、彼らが自分で勝手に作り出した対立に思い悩む不毛な思弁家の夢物語でしかなかった。ウェーバー自身が、パーソンズが考えるものとは必ずしも同じでないにせよ、十九世紀以来のドイツの学問的伝統からの離反を意図していたことも事実である。この過程で、社会科学と「芸術」の間の分離が決定づけられる。

先に論じたようにドイツを中心として隆盛を誇った歴史主義は十八世紀の思想を「啓蒙主義」として一括し、さらに「実証主義」と呼ばれる同時代の思潮と結びつけて批判の対象とした。ここに西欧、すなわちイギリスやフランスの学問的知識、文化的知識に対するドイツ独自の立場を確立しようとする気運が結びついていく。十九世紀後半から盛んにドイツで喧伝された西欧の「文明」に対するドイツの「文化」という有名な二項対立図式は、実証主義的な西欧に対決するドイツの文化科学、精神科学として人々の心を占めることになる。ドイツの文化科学、精神科学の支点となっていたのは、哲学と哲学的に意味づけられた「芸術」であった。

そもそもコントによって実証主義に最もふさわしい学問として定式化された「社会学」は、ドイツの状況下では最初から偏見の対象とされた。それは、正統的な学問に従事する研究者が手を触れてはならないものとみなされた。あえて手を出すのは、いうならば非正統的な研究者、専門研究に馴染まないディレッタント的な著者、似非科学 (Halbwissenschaft) に手

(45) Talcott Parsons, On the relation of the theory of action to Max Weber's »Verstehende Soziologie«, in: W. Schluchter (Hg.), Verhalten, Handeln und System, Frankfurt a. M. 1979, S. 152.

を染める者、あるいは後に当の社会学において「マージナルマン」と呼ばれることになる人々である。先に見てきた著者たちの論調は、もちろんこのような状況をふまえている。ドイツ社会学の創始者の一人として記憶されているゲオルク・ジンメルが、大学教員としての昇進からは疎外されていながらも、文芸・音楽・芸術論・美術評論から人生論、哲学的随想、専門的な哲学研究、他方で通俗的な文化論まで手がけた文壇の寵児であったことは決して偶然ではない。ジンメルはマックス・ウェーバーやハインリヒ・リッカート、ヴィルヘルム・ディルタイ、エドムント・フッサール等と学問的、思想的には多くの点で明らかに共通点をもちながら、彼らよりもはるかにディレッタント的な性格を印象づけていたことは確かである。文壇での華やかな活躍や、私講師の身分で二百人をはるかに超える聴講者の数など、ジンメルはすでに有名な著者としての地位を獲得していた⁽⁴⁶⁾。ただし先に触れたように、ユダヤ系の出自や文筆家としての声望に対する同僚の嫉妬など、ジンメルの昇進を妨げる要因は多くあった。

マックス・ウェーバーが「職業としての学問」の厳格な専門性を口にしたながらも、その一方で帝国主義的・ナショナリズム的政治評論の息の長い論客として、あるいはロシアの革命政権の行く末を言い当てる政治的な予言者として活動していたことは示唆的である。そもそもウェーバーのナショナリズムはヴォルフガング・モムゼンをはじめとした研究者たちが一致して指摘するように、前期とか後期といった区分に当てはまるものではない。ウェーバーのナショナリズムは生涯にわたって一貫して強烈でありつづけた⁽⁴⁷⁾。われわれはウェーバーの生涯における関心の移動に注目して

(46) 1894/95年のベルリン大学私講師ジンメルの冬学期の聴講者数は269人。

Werner Jung, Georg Simmel zur Einführung, 1990, S. 15f. 生前の名声はウェーバーよりもジンメルの方が上であった。

(47) この点がマックス・ウェーバーを純粋な理論的貢献者として評価する際の障害として指摘されてきた。しかし、パーソンズ以来の社会学理論の研究者たちが行ってきたようにウェーバーのナショナリズムを単なる逸脱として放置することも、あるいはナショナリズム（ナチズム）研究から出発した研究者たちがやってきたように、「ナショナリスト・ウェーバー」という像を際立たせることも、それほど実り多いことではない。むしろわれわれにとって重要なのは、「ナショナリズム」と判定される言説が、当時どのように理解されており、そ

きたが、同時に移動しない関心を否定してはならない。重要なことは、移動した関心と移動しない関心のどちらに意義を認めるのかということである。ここにモムゼンの関心とわれわれの関心の違いがある。モムゼンはウェーバーの生涯に一貫した「政治」の問題に着目するが、われわれにとっては次々と変化していく「学問」の方が重要なのである。

専門科学としての社会学の側からウェーバーを解釈する人々は、ウェーバーの「職業としての学問」と政治的な情熱やジャーナリスト的傾向、芸術的な関心の同居に常に困難を感じてきた。専門的な科学者としての任務と、状況によっては何にでも対応しなければならない政治家の任務とはどうしても矛盾する関係におかれているように思われる。また「芸術」に不可避に結びつけられた「解釈」や「意味」の諸問題は、多くの人々にとって「科学」としての社会学にそぐわないものであるように信じられてきた。実証主義のいう意味での「科学」は、研究者個人の解釈や意味付けで左右されるようなものであってはならない。しかもこの矛盾関係はウェーバーに関する研究の重大な論題として多く議論されてきた。

ただし、これらの解釈者が見落としている問題がある。それはここに論じてきたような著者たちが「社会学」によって果たしていた役割である。「職業としての社会学」は、当時のドイツの状況下では、国民経済学や歴史学とは異なって、ほとんど容認されていなかった。ジンメルやテニエスやゾンバルト、ウェーバーといった著者たちの共通課題は、「現実政治(Realpolitik)」との間で妥協したり、密かな共犯関係を結んだりすることよりも、「社会学」という新事業を社会的に容認させることであり、独自の領域を確保して、その学としての存在意義を確立することであった。

「社会学」が新興の学問として当時の諸科学の理論的素材を何でもかんでも手当たり次第に取り込んでいった様子は、それ自体として興味深い。歴史学、芸術学だけではなく、文献学、心理学、古代史、宗教学、宗教史、

れに対してウェーバーをはじめとした人々がどのように対応し合っていたのかを明らかにすることである。それにはわれわれがこの章で論じてきたドイツの精神科学、文化科学の基盤に対する人々のこだわりや愛着を強調しておかなければならない。それらは単純に図式化できるような類型的ナショナリズムというよりも、長期にわたる文化的な基本前提と深く関係している。

神学，文学論，歴史哲学，認識論，科学方法論，倫理学，国民経済学，法学，法制史，そして，実証主義，マルクス主義，反マルクス主義，政治的・経済的自由主義など，当時のほとんど考えつく限りのあらゆる学的知識が，彼らの視野に入り，彼らの貪欲な触手によって手繰り寄せられた。彼らはそれぞれに異なった関心から別々の問題に向かっていった。当時の彼らに共通するのは，歴史科学の新事業としての「社会学」という意識だけである。これは確かに十八世紀の哲学，十九世紀の歴史学に比すべき学的知識の統合現象であった。彼らはいつも決まって専門分化し見通しを失った学者・研究者の現状を憂えながら，他方で手当たり次第の素材を取り込んだ大著を次々と世に送り出していたのである。これは矛盾などではなくて新来者の常套手段であるにすぎない。

このように見ていくと，個人としてのマックス・ウェーバーが「現実政治」に対して強烈な志向を抱き，反対に「非政治的な」ジンメルがサロンの芸術的，美的世界の方に向かったことの違いは，それほど重要ではなくなってくる。同時代の正統的な専門科学者から見れば，両者とも同じく新しい事業に手を染めるディレクタントであったことに変わりはない。ウェーバー自身が書いているように，ウェーバーの宗教社会学は同時代の東洋学（オリエンタリズム）やキリスト教教理学の成果を利用することによって成り立っている。それらは決して一次資料（史料）に基づく独自の知見から成っているわけではない。この点で宗教社会学研究は，ウェーバーがプロイセン東部地域の労働者の生活状況を実地に調査した論文とは異なっている。宗教社会学は実証的な専門研究者の仕事であるというよりも，ドイツの学界に一般的に共有されていた精神科学，さらには歴史科学の諸問題を新しい手法で再把握したものであるというべきである。ウェーバーに関するこれまでの研究は，すでにウェーバーの宗教社会学の「出典」について多くを明らかにしてきた。例えば『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に盛り込まれた該博な教理上の知識が友人のエルンスト・トレルチの見解に多くを負っているという指摘⁽⁴⁸⁾は，ウェーバーがい

(48) グラフは次のように書いている。

『『プロテスタントの倫理』の原論文とこれらのテキスト [トレルチの学位論文『ヨハン・ゲルハルトとメランヒトンにおける理性と啓示』(1891)，

かにして知識を獲得したのかを明らかにするには有益である。しかし、それだけではウェーバーがなぜこのような研究に着手しなければならなかったのかという問いには答えることができない。これに対してウェーバーやトレルチをはじめとした当時の精神科学、歴史科学の共通の課題に目を転じるとき、われわれの前には彼らが共有し合っていた多くの問題が浮かび上がってくるのである。

第5章「社会学」という新事業

第1節 「社会学」という新事業

アルフレート・シュッツは1932年に『社会的世界の意味構成』の最初の章に次のように書いている。

「この社会的事実の世界そのものを先入見なしに把握すること、正しい論理的な概念作業においてこれを分類すること、そのようにして獲得された素材を正確な分析手段として彫琢すること、こうしたことこそまさに科学の名に値する、社会的世界のすべての研究の重要課題でなければならない。この真の社会科学の課題に関する洞察は、なによりもまず人間社会の形式学の創造という要

たくさんの書評、辞典論文『イギリスのモラリストたち』(1903)]とを比較すると、ウェーバーのトレルチへの少なくともひとつの依存関係が示されている。マックス・ウェーバーはトレルチに、関連する神学上の文献の大半の知識を負うており、それに依拠して禁欲的プロテスタンティズムに関する自分の研究を基礎づけている。引用回数の量がすでにこの依存性を明らかにしている。ウェーバーが利用した神学的専門書の大部分は、トレルチが自分の倫理学的な研究に利用し、かつ徹底的に吟味していたもの——しかもつねに同じ版で！——だった。こうして特定の中心的な引用文にいたるまで兩人の間には並行的な関係があったことが示されているが、それだけではない。それ以上にウェーバーが、——専門家でないからと保留をつけているにもかかわらず——特定の神学的文献について行っている解釈はトレルチの、これに対応する判断におどろくほど近いのだ。」(Friedrich Wilhelm Graf, *Friendship between Experts: Notes on Weber and Troeltsch*, in: Wolfgang J. Mommsen / Jürgen Osterhammel (eds.), *Max Weber and his Contemporaries* = 鈴木広, 米沢和彦, 嘉目克彦監訳『マックス・ウェーバーとその同時代人群像』, ミネルヴァ書房1994年, 221-2頁)。

請につながるものである。この問題を最初に理解し、その解決を試みたのは、疑いもなくジンメル功績であった。たしかにジンメルの方法上の根本姿勢は、たびたび混乱したり非体系的になったりしている。というのも手探り的な試行のなかで、彼は絶えず社会の本質に関する理論観を社会的諸領域の多様な個別現象によって確証しようと殊の外熱心に努めているからである。こうした個別的な分析においてジンメルは、しばしば後世に残る不朽の貢献を行ったのであるが、反面彼によって鑄造された根本概念のほとんどは、（『相互作用』という彼の社会学の鍵概念を含めて）批判的分析には堪えられないものである。とはいえ、あらゆる内容のある社会現象を諸個人の行動様式に還元し、そのような個々の行動様式の特異な社会的形式を記述によって把握するというジンメルの指導理念は、依然として用いられているし、有効であることが実証されている。

同様の中心思想にマックス・ウェーバーの『理解社会学』も方向付けられている。このことは、マックス・ウェーバーのすぐれた独創性に異議を唱えたり、あるいはさらに、彼のジンメルへの依存を主張することでは決してない。反対に、同時代の多種多様な思潮を総括しているウェーバーの著作は、その驚くべき天賦の才による全くの個人的な成果である。彼は、社会学が救済論ではなく科学として登場したかぎり、今日のドイツ社会学にその職分を示し、また社会学に自己の特異な課題の解決のために必要な論理＝方法上の道具を手渡したのである。同時代のドイツ社会学の最も重要な諸々の著作、たとえば、シェラー、ヴィーゼ、フライヤー、ザンダーの著作なども、ウェーバーの基礎作業なしには考えられない。」⁽¹⁾

われわれはこれまでマックス・ウェーバーの「変化」という観点の下に、歴史科学の新たな展開を観察してきた。変化の末にウェーバーが向かった立場を理解する際に鍵になるのは、「社会学」という名称で呼ばれる歴史科学の新事業である。それではシュッツの言う「職分を示し」「課題の解決のために必要な論理＝方法上の道具を手渡す」とは果たしてどのようなことなのだろうか。そもそも「人間社会の形式学の創造」とは一体何なのだろうか。

フランスの社会学者レイモンド・アロンは「社会学的思考」の出発点としてモンテスキューを顕彰した。アロンはモンテスキューとウェーバーを比較し、両者が歴史理解という目標と歴史の多様性、カオスという出発点

(1) Alfred Schütz, Sinnhafter Aufbau der sozialen Welt, Wien 1932 = 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』, 木鐸社 1981 年, 16 - 17 頁。

を共有しており、「無意味な事実を出発点として社会学者特有の論理的な秩序を導き出したいと望んでいた」と指摘している。これはアロンによれば「社会学者特有のもの」でなければならない⁽²⁾。しかし、モンテスキューにおいても議論の直接の対象は古代ローマ帝国や王侯と世襲貴族が支配する王国の歴史である。その歴史はモンテスキューが『ローマ人盛衰原因論』で書いているように、「偉大な人物」とそれを生み出した「ローマ人」を主な研究対象とする歴史である⁽³⁾。モンテスキューにとって重要なのはイギリスのエドワード・ギボンがそうであったように、ローマ帝国の衰退の原因を明らかにすることであった。そして同様の発想を同時代のヨーロッパ世界とその他に当てはめたのが、『法の精神』における比較文化論・比較文明論の一大事業である。これも「社会」という概念を主軸に据えているわけではない。

他方で社会科学ではモンテスキューは、いわゆる「三権分立論」の創唱者として意義を強調されてきた。それは諸宗派の乱立競合状態を平和の必須条件であるとしたヴォルテールの議論と同様に、それだけが切り離され、われわれが先に述べてきたのと同様に、ある種のスローガンのようなものとして流通させられてきた。ところがこの場合にも、彼らの課題として共有されてきた歴史哲学的、あるいは「社会学」成立以前の、メタ社会学的な問題に注目するならば、はるかに多様で豊かな内容が見えてくる。

(2) Raymond Aron, *Main Currents in Sociological Thought*, New York 1965, 北川隆吉, 平野秀秋, 佐藤守弘, 岩城完之, 安江孝司訳『社会学的思想の流れ』1, 法政大学出版局 1974 年, 17 頁。

(3) モンテスキューによれば「偉大な人物」とローマの繁栄は直接的な因果関係にあり、社会の成立期に制度を作るのは指導者であり、それに続いて制度が指導者をつくるのである。モンテスキューは書いている,

「ローマの繁栄の原因の一つは、その王たちがすべて偉大な人物であったことである。歴史の中で、これほどの政治家や名将たちが相次いで現れたことは他に例を見ない。

社会が成立するとき、制度を作るのは国家の指導者である。そして、次には、制度が指導者を作り出す。」(Charles Louis de Secondat Baron de la Brède et de Montesquieu, *Considération sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence*, 1734 = 『ローマ人盛衰原因論』田中治男・栗田伸子訳, 岩波文庫 1989 年, 15 頁)

先の章で論じてきた普遍史と歴史哲学は、「社会学」という新事業が、いかなる前史を持っているのかを示唆していた。ヴォルテールによって命名された「歴史哲学」は、今世紀の初頭に「社会学」として把握されていた諸問題の直接の先行者である。

過去に終結した事象を扱う歴史科学が、その時代ごとに大きな変動を経験していくという古くから指摘され続けてきたパラドックスは、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてその頂点に達する。ドイツだけに止まらずヨーロッパの歴史科学は、キリスト教紀元が偶然に定めた世紀の転換に、あたかも深い意味を賦与するかのように大きな変動を経験する。このころを境として次々と新しい領域が開拓されていく。あるものは全く新たに命名され、またあるものは前世紀にすでに名前を与えられていながら、それまでとは観点も方法も対象領域も全く一新することになる。新しい研究領域を切り開いていく活動は、しばしばその時代の最も優秀な頭脳を集めることになる。後の時代の知的営為を他者に先立っていち早く予言したり、確立したりする思索者は、彼らが克服した旧来の学問を遵守しようとした人々に比べて、後の時代の観点から見てしばしば優れているように思われるからである。ただし新しい事業には不可避免的に課題の不明瞭やある種のいかがわしさのようなものがつきまとうことになる。新たな事業が社会的に——つまり同時代の多くの人々の意識の中で——正当なものとして容認されるには、従来の知的営為に対して新しい事業が何を新たに提示し、それがいかに価値あるものであるのかを明らかにしなければならない。

「ここで取り扱うことになる社会学について語るには、現代においてなによりもまず次のことを確認しておかなければならない。すなわち人間とその環境を、単に動的で特定の様式に結びつけた観点を乗り越えて人が観察することである。人は、自分が見たものを存在の無数の準拠点から対照しはじめるのであり、分析するのであり、『社会学的に』描くのであり、そして何らかの新たなものを手に入れはじめるのである。ただし実際にここでいう意味で人が『社会学的に』考えはじめたと認めうるのは、せいぜい二十世紀の初頭になって、それも全く不明確な研究体制（Verfassung）を取るようになってからのことである。」⁽⁴⁾

(4) Alfred Weber, *Soziologie*: in: Golo Mann (Hg.), *Propyläen Weltgeschichte*, Bd.9, Berlin/Frankfurt a. M. 1960, S. 595

この文章はマックス・ウェーバーの弟アルフレート・ウェーバーが、ゴロー・マンの編集のもとに1960年にドイツで刊行された大部な世界史シリーズに執筆した「社会学」の章の冒頭にある一節である。アルフレートは厳格な論理構成を追究した兄とは異なって「歴史的生の全体」を対象としてロマン主義的な色彩の強い「文化社会学」を提唱した。この点でアルフレート・ウェーバーの仕事が、本当に「特定の様式に結びついた観点を乗り越え」たものであったのか否かは問題があるところである。ウェーバー兄弟の間にある相違は、同じ世代の研究者による「社会学」にすでに多様な考えが存在したことを示している。この世代のドイツの社会学者は、アルフレート・ウェーバーが書いているのと同様、「社会学」について語るときいつも決まって、対象と方法の不明確さ、不特定を、困惑した表情で書き出すことから始める。彼らはまるで手に負えない貰い子を受け入れた里親のように、この新しい学問の現状と今後を憂慮してみせるのである。ただし彼らにとってこの手の焼ける里子は、多くの情熱を傾けてまで育てるに値するのだと認識されていたようである。里子の本来の両親がいったい何ものであったのかは、この時代のドイツにあってはそれほど重要なことではなかった。その理由はこの子供が周知のように外国の生まれであり、当時のドイツ国内において非常に評判の芳しくない血筋を引いていることは、誰の目にも明らかだったからである⁽⁵⁾。彼らにとって大切な

(5) 状況は「社会学 sociologie」の故郷であるフランスでも同様であるといわなければならない。フランスにおける社会学の創始者の一人であり、マックス・ウェーバーの同時代人でもあるエミール・デュルケムは「現実を全く無視し、時には多少とも注意深く現実を検討はしたが、すべての人は、現実を知ることではなく、それを改革し、あるいは根本的に変革するということだけを目的としていた」従来のな学問を「術」と呼び、現実の分析を第一に志向する社会学との区別を強調した (Emile Durkheim, éd. A. Cuvillier, Montesquieu et Rousseau: précurseurs de la sociologie, Paris 1953 = 小関藤一郎・川喜多喬訳, 『モンテスキューとルソー』法政大学出版局 1975 年 8-9 頁)。しかし社会学がデュルケムのいう「術」を完全に乗り越えたわけではない。例えば「過去 30 年間に書かれた百ばかりの論文から 17 篇」をまとめて 1958 年に刊行したレヴィ・ストロースの『構造人類学』は、同年に生誕 100 年を迎えたデュルケムに捧げられているが、レヴィ・ストロースはこの論文集の冒頭におかれた「歴史学と人類学」において次のように書いている。

ことは、むしろこの血統正しくない貰い子に、適当な居所を与え、新たに世間的な認知を得させることであった。彼らにとって何よりもやらなければならないことは、輸入品であるこの「社会学」を十八・十九世紀以来のドイツ精神科学の伝統に何とか接合することであった。

マックス・ウェーバーを含めて世紀転換期の「精神科学」に従事していたドイツ知識人にとって、最大の新事業の一つは「社会学」という名称で呼ばれていた新しい学問の対象と問題と領域と方法を何とかして特定することであった。同時代のゲオルク・ジンメルが、『社会学』（1908）を「社会学の諸問題」という章ではじめているのも、『社会学の根本問題』（1917）の冒頭の章に「社会学の領域」という表題を付けたのも、このような状況

「この論文ではわれわれは社会学という用語は用いない。なにしろこの用語は今世紀のはじめに出現して以来、いまだデュルケムやシミアンの夢みたような社会科学の総体という一般的な意味を担うまでにいたっていないのだ。今日なおフランスも含めてヨーロッパ諸国で通用している意味では、それは社会生活の諸原理についての、また人間がこの問題に関してかつて抱いていた、また現に抱いている諸観念についての考察ということであり、これでは社会学は社会哲学に還元されるのであって、われわれの研究とは無縁のものであることにもなる。もしアングロ・サクソン諸国でそう考えられているように、社会学というものをきわめて複雑なタイプの社会の組織なり機能なりを対象とする実証的研究の総体と見るならば、社会学は民俗誌の一特殊部門であることになろう。しかも、まさにその対象が複雑なものであるだけに、方法上の観点からしてその考察がより大きな局地的価値をもつ民俗誌ほどには精確かつ豊富な結論に到達できるとはいえないであろう。」 Cluade Lévi-Strauss, *Anthropologie structurale*, 1958 = 荒川幾男他訳『構造人類学』みすず書房 1972 年、4 頁。

レヴィ・ストロースにとって「社会学」とはデュルケム——そして同時代のドイツ人たちと同じく——が夢みた総合社会科学ではなくて、社会哲学と、民俗誌の特殊領域の混在物でしかない。またフランスの古代史家のポール・ヴェーヌは、社会学がいまだに「政治哲学と貧しいひとの人間学」を含んでおり、それが現実の社会の事例研究や調査方法の研究と混同されて「社会学」と呼ばれていることを揶揄している。Paul Veyne, *L'Inventaire des différences*, Paris 1976, 大津真作訳『差異の目録』法政大学出版局 1983 年、25-6 頁。このようなフランスにおける「社会学」観の展開は、ここで主に扱っているドイツの展開と対比して理解されなければならない。

を反映している。「社会学」は、この時点では「問題」と「領域」すら未確定のままだったのである。

これらの著者が「社会学」という新事業をいかなるものと考えていたのかについて理解するために、大変に便利な文献がある。それはヴェルナー・ゾンバルトが叢書『哲学の原典ハンドブック (Quellenhandbücher der Philosophie)』の一冊として編集し序論を書いている『社会学』(1924)である。ここには当時の社会学界において「古典」となっている十九世紀の著者たちから同時代に至るまでの十六人の著者の「原典」が集められている。ここで登場している人名を編集順に挙げていくと、オーギュスト・コント、グスタフ・アドルフ・リントナー、ハーバート・スペンサー、アルベルト・シェフレ、フェルディナント・テニエス、ギュスターヴ・ル・ボン、ルドルフ・シュタムラー、ガブリエル・タルド、オットー・ギールケ、レスター・フランク・ウォード、クルト・ブライジヒ、ヴィルヘルム・ヴント、ゲオルク・ジンメル、オットマール・シュパン、マックス・シェーラー、そしてマックス・ウェーバーである⁽⁶⁾。少なくとも編集者ゾンバルトにとって、「社会学」における重要な著者が誰であったのかがこれらの人名から一目で分かる。

ここで注意しなければならないことはその内容の多様さである。これらのうちでコント、スペンサー、シェフレ、テニエス、タルド、ウォード、ジンメル、シュパン、ウェーバーは、今日でも「古典的な社会学者」——あるいは古い時代の社会学者——としての容認を受けているが、それ以外はしばしば他のカテゴリーに分類されている。社会心理学者のル・ボン、教育学者のリントナー、法哲学者シュタムラー、法学者のギールケ、歴史学者のブライジヒ、心理学者・哲学者のヴント、哲学者のシェーラー、これらの人名の背後にはドイツを中心とした領域横断的歴史科学の万華鏡のように多彩な業績群が広がっている。彼らは今日では「社会学」の古典的な著者としての容認を受けていない。ただしわれわれと当時の人の間の通念は完全に異なっていることも事実である。そもそも肝心の編集者のゾンバルトの仕事が今日でいう社会学に該当するのか否かも問題視できよう。

(6) Werner Sombart, *Soziologie*, 1924.

ゾンバルトによれば、

「広い意味で社会学とは、本書でしめされている考えによれば、人間の共同生活についての認識のすべてであり、また人間の文化、すなわち人間の歴史を社会性（Sozialität）という観点から考えるものであり、社会性とは他者の行為を調節したり他者の行為に影響を与えられたりする行為に基づいて成立している現象のことである。認識とは、過去に何が何であり、現在何であり、未来にどうなるかを確定することであり、また何がどうでなければならないのかという観点、ならびにすべての政治を排除するものである。」⁽⁷⁾

「人間の歴史を社会性（Sozialität）という観点から考えるもの」という理解が、今日の社会学とは大きく異なっていることはいうまでもない。これは今日では「歴史社会学」という一領域に限定されている理解である。他方でウェーバー、ゾンバルトそして同時代の「社会学」を率直に通読するならば、それがあくまでも彼らのいう「精神科学」としての歴史科学にお

(7) ゾンバルトはこの引用部分につづけて次のように書いている。

「上記の最も広い境界線のなかに、本質的に異なった二つの社会学がある。すなわち哲学的社会学と科学的社会学である。哲学的社会学とは歴史哲学と同じものである。この意味でPaul Barthによる社会学と歴史哲学の結合は妥当である（ただしそれ自体にとってだけのことだが）。この哲学的社会学には、すべての社会教説が含まれており、それらは経験の領域を踏み越えてしまう。このため「人間性の進歩原則」について、何かの文化現象の「本質」、「歴史を規定する諸要素」、「唯物論的」あるいはほかの「歴史観」あるいは類似の検証について、何らかの発言をする際には、メタ・歴史的な性格を帯びることになる。（ただし単なる作り事以上の意義をもち、当然その場合には科学的な社会学との間で調和する。）」Sombart, ebd., S. 6. ゾンバルトがあとに続けてこのような「哲学的社会学」に対抗する「狭義の社会学」と呼ぶものすなわち「科学的社会学」が一体いかなるものであるかはこの時代の哲学＝科学論の流れを知っている人々には自明の事柄であろう。ゾンバルトが主張する内容は、要するにディルタイが「厳密な学（＝科学）としての精神科学」、そしてフッサールが「厳密な学としての哲学」を主張したのに続く「厳密な学としての社会学」であった。「厳密さ」や「純粹さ」に対する熱狂は確かに世紀転換期のドイツの学問風土を席卷していた。われわれが既に論じてきたように、彼らが決まって主張したのが、概念構成の「厳密さ」であり「価値判断」の介在の問題である。このことはここで引用したゾンバルトの一節からも明らかであろう。それは決してウェーバーが『社会科学および社会政策の認識の「客観性」』においてはじめて言い出したことではない。

ける新たな事業として認識されていたことが分かる。「歴史」は彼らにとって疑うことのできない精神科学の対象であった。逆に言うならば、「精神科学」は「歴史」を解明することなくしてその存立意義を主張することができないのであった。そもそもこの時代のドイツ人にとっては「精神」について考えることは、自動的に精神の歴史的動態を考察することだったのである。

ただし「社会学」という新事業はドイツの学界では存在意義を長らく認められなかった。フェルディナント・テニエスが主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で語るところによれば、「周知の通り、また、特色ある事実として知られている通り、社会学はドイツの大学では存在の場所をもたないし、哲学のかたわらにすら存在の場所をもっていない。また、哲学の饗宴に加わることも、社会学には故意に禁じられている」⁽⁸⁾のである。

「社会学」という新事業がどのようにして成立しそれがどのような課題を与えられ、そしてどのような意図によって運営されていったのかについて考えていくには、それをとりまく諸条件を明らかにしなければならない。当時の人々にとって「社会学」とは、今日のような特定の学科ではなくて、独自の領域ももたなければ、方法についての共通の理解も定まらない新しい研究の総称であった。アルフレート・ウェーバーの引用にあったように、「社会学」とは、新しい観点であり、新しい比較対照法であり、分析方法であり、叙述方法であった。それは、それまでの精神科学のあり方から人間の認識を解放するものであり、そうであってのみはじめて十九世紀の巨大な学的認識の蓄積に対して己の存在意義を主張できるものなのであった。

われわれが主たる関心の対象としてきたことは、自ら精神科学者や歴史科学者を自認する人々がどのような現実感（リアリティ）を共有していたのかということであった。さらにいうならば、ウェーバーの同時代人が「精神科学」に従事する者として広範な容認を得るのに必要とした必要条

(8) Ferdinand Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, 1887 = 杉之原壽一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粋社会学の基本概念』上、6頁。

件が何であったのかということであった。確かに彼らは特定の諸問題を共有し、それらを自分なりに「独創的」に展開していくことによって、はじめて自立した「思想家」としての社会的な容認を得ていた。もしもそれが欠如していたならば、彼らの思考は時代にとって無意味なものとして放置されたはずである。

優先されるべきなのは、ウェーバーをはじめとした人々が当然の、あるいは自明の前提として取り組まなければならないと信じていた事柄が、どれだけ同時代の人々に共有されていたのかということの方である。そのようにしてはじめて彼らの固有の課題が明らかになるのであり、その後の人々、あるいはわれわれとの差異が浮かび上がってくる。彼らにとっての自明の前提とわれわれのそれとは異なっているのである。

相違点は「社会」観の変化の問題をわれわれに提示している。それは長期間にわたる歴史的変動ではなくて、歴史的に変動することのない人間集団の基本性質を把握していこうとする観点の成立である。言い換えれば、歴史主義が自明の前提としてきた社会の時間的变化ではなくて、時間の推移によって変わることのない社会の諸要素を、理論的にも記述においても厳密に構築していこうとする新しい立場が成立する。ここに「社会学」は歴史科学から微妙に距離を取り始める。新たな観点に基づく「厳密」な「科学」として「社会学」が成立するにあたって、世紀転換期ドイツの歴史主義的な社会学者たちは、はたしてどのような役割を果たしたのだろうか。

この問題に大きな示唆を与えてくれるのが、この章の冒頭に掲げたアルフレート・シュッツの引用である。1932年に刊行された『社会的世界の意味構成』を瞥見すればすぐに理解されるように、この力作は、徹頭徹尾新しい立場に立つ研究である。シュッツの研究は、前時代の「歴史」への志向や、依存を徹底して取り去り、ウェーバーを「歴史」から解放することを意図している。

シュッツの背景にあったのは、ウィーンの学風であり、この街は、ドイツ歴史学派国民経済学に対抗するオーストリア限界効用学派の経済学、歴史法学派に対抗する純粋法学、歴史哲学に対抗する論理実証主義で名高い「ウィーン学団」の本拠地であった。論理実証主義からは、後年『歴史主義の貧困』（1944）を世に問うカール・ポパーも出ている。1899年に生まれた

シュッツと1902年生まれのパパーが、同じ街に生をうけ、共通して「歴史」(あるいは「歴史[法則]主義」)からの解放を、別の角度から論じ、同じくユダヤ人としてドイツに併合される故国を離れて亡命者として活動の場を求め、同様に英語圏の学界に大きな影響力を行使するようになった平行関係は興味深い。少なくともパパーの自伝『終わりのなき探求』(1974)⁽⁹⁾から窺い知ることができるのは、パパーの思索の起動力の大きな部分が、ドイツナショナリズムと不可分に結びついたドイツ歴史主義に対する飽くなき攻撃心からなっているという事実である。

歴史的な背景からだけ彼らの「思想」や「学問」を演繹することは、それ自体として「歴史主義」として彼ら自身の非難を受ける可能性を秘めている。しかし、最小限言うことができるのは、彼らの思考が背景から独立してそれだけで組み立てられたものではないということである。彼らの背後には、ドイツナショナリズムによって出生地の知的伝統を押しつぶされたという事実が控えている。このことは今日では全く相容れることのない立場——現象学と科学哲学——として理解される傾向にある二人の人物の共通点として興味深い。九十年をこえる長命と生前の名声を享受したパパーとは異なって、1959年に没したシュッツには、パパーのように自伝を書く機会も時間もなかった。ただし1932年に出たシュッツ唯一の刊行著書が、ドイツ歴史主義とは異なった学の在り方を探求するものであったことは確かである。

ドイツ歴史主義と異なった学の在り方とは、先のシュッツの引用からも明らかである。それは厳密な論理的、方法的裏付けによる「まさに科学の名に値する、社会的世界のすべての研究」であった。同様のことはパパーの「批判的合理主義」にも間違いなく当てはまる。「歴史」が本当に「科学の名」に値しないのかどうかということは、この場合問題にする必要はない。検討されなければならないことは、彼らがそう信じていたという事実である。

そしてさらに興味深い事実は、この相反する二人のウィーン人が、両方

(9) Karl Popper, *Unended Quest*, 1974 (with Postscript and updated Edition, London 1992).

ともマックス・ウェーバーの仕事に画期的な意義を見出し、それぞれのやり方でウェーバーの科学論をさらに展開しようとしている事実である。われわれはマックス・ウェーバーにおける歴史科学の展開を見てきたが、ウェーバーの仕事には歴史科学の展開の結果としての「歴史主義」そのものの清算という方向づけも含まれていた。ウェーバー当人の意図がいかなるものであれ、ウェーバーの議論には歴史と「歴史主義の貧困」を指摘する手がかりが含まれていたのである。同じことは、シュッツの引用にも出てきたジンメルについても言える。この点が、ウェーバーやジンメルの同時代の歴史科学者であるゾンバルトやマイネッケ、トレルチといった人々との相違である。

このように議論を進めていくと、これまでの理論的な議論にしばしば登場してきた断片化され、テーゼやスローガンのようになった「理論」や「思想」の元来の文脈が次第に見えてくる。例えば、二つの人間集団類型：「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の対比、社会の実質的な内容を棚上げにする「形式社会学」、そして社会生活における行為者の「行為類型論」と三つの「支配類型論」、そして「合理性類型論」。現下の読書界を見渡すならば、これらの概念を打ち出した著者たちの著作よりもこれらの概念そのものの方がはるかに長い生命を保っているかのように見える。そして、単純化された議論は、彼らが念頭に置いていた研究対象としての歴史の変動とは無関係な理論へと加工されていく。「社会性」を足がかりとした「人間の歴史」は、「社会性」をめぐる純粹概念やそれらに基づく共時的行動科学へと変貌していく。その場合、多くの要素が切り捨てられていくことを忘れてはならない。

テニエスやジンメルやウェーバーが「生」や「精神」について非常に似通った議論を展開していたことは、多くの研究者の意識から除外されている。他方で、「生」や「精神」が専門研究の主題として取り上げられる場合には、単独の形でテニエスのいう「ゲマインシャフト的生 (Gemeinschafts-leben)」概念の意義や、「ジンメルにおける生」、あるいは「ウェーバーにおける精神」といった個別主題にまとめられてしまう。そして、これらはゲーテやヘーゲルやマルクスやニーチェのような周知の先行者と単純に結

びつけて論じられるのである。そこではあたかもゲーテとの運命的な出会いだけがウェーバーを「人格」の問題に駆り立てたかのようにであり、社会学史においては習慣的にジンメルに結びつけて論じられてきたニーチェが、実はウェーバーにも「痕跡」を残していることが突然「発見」されたりする。だが、例えばテニエスの名前に独占的に結びつけられてしまっている「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」の二項対立概念は、時間的にはかなり遅れるが、ウェーバーの『経済と社会』において独自の意味付けによって使用されている。テニエスを意識しながらもマックス・ウェーバーは書いている。

「この用語法はF. テニエスが彼の根本的な著作『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』において採用した〔両概念の〕区別を想起させるものである。しかしテニエスの目的にとってこの区別は、ここでのわれわれの目的に有用であるというよりは、とりもなおさず実質的に特殊な内容を与えられたものであった」⁽¹⁰⁾

テニエスにおいては「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」という概念にはじめから特定の価値判断を賦与された「内容 (Inhalt)」が結びつけられていた。伝統的な村落社会の共同体に見られる「ゲマインシャフト」の人的親密性と、産業社会がもたらした「ゲゼルシャフト」における人間疎外状態といった理解である。人は家族をはじめとした「信頼にみちた親密な水いらずの共同生活」である「ゲマインシャフト」を離れ、「見知らぬ国に行くような気持ちで」で「ゲゼルシャフト」に入っていく。「ゲマインシャフト」は「実在的有機体的な生命体であると考えられる」のに対し、「観念的機械的な形成物」⁽¹¹⁾ でしかない「ゲゼルシャフト」において「人々はそれぞれに一人ぼっちであって、自分以外のすべての人々に対しては緊張関係にある」⁽¹²⁾。テニエスが「純粹社会学の基本概念」という副題を掲げたこの本で導入した「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」に、当初から特定の内容を与えていたことは否定できない。更にいうならば、特定の内容とは間違いなくテニエスの個人的な「世界観」に奉仕するものであ

(10) Weber, WuG, S. 22.

(11) Tönnies, ebd. = 同訳書, 上, 34-35 頁。

(12) Tönnies, ebd. = 同訳書, 上, 91 頁。

る。これに対してウェーバーが意図するのは「もっとも純粋な諸類型」としてのそれらであった⁽¹³⁾。

テニエスから晩年のウェーバーに継承された用語法が、そのまま両者の単純な比較研究の手がかりになりうることはいうまでもない。しかし、ここで重要なことは無数に可能な同様の比較研究を新しく始めることではなくて、それらを通して彼らにおける問題の共有状況を理解することである。テニエスが「ゲマインシャフト的生」という概念を頻用したとき、テニエスが「ゲマインシャフト」という概念にどのような「内容」を賦与しようとしたのかということである。手がかりとなるのは、われわれが先の章で論じてきた「生」をめぐる問題の共有状況である。テニエスは「ゲマインシャフト的生」を口にするすることで、確かに実質的に「生」問題に彼なりの貢献を果たそうとしている。さらにいうならばテニエスにとって「ゲマインシャフト」とは「有機体」との類比で語られうる社会的実体なのである。「有機体」とは当時の人々にとって「生」と一体のものとして語られる概念であった。しかも「生」はジンメルがそうであったように、特定の価値を「内容」として含んでいる。晩年のウェーバーが言うように、テニエスの概念には「特殊な内容」が与えられており、それはそもそも「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」の二項対立概念にテニエスが結びつけて論じたものである。そしてウェーバーがやろうとしていることが、少なくともウェーバー自身にとってテニエスとは異なるのだと意識されていたことが重要になってくる。言い換えれば、ウェーバーはテニエスのターミノロジーを別物に変化させようとしている。それではどの点でウェーバーは別物にかえようとするのだろうか。それが「もっとも純粋な諸類型」というウェーバー流の主張である。両者の間には方法の相違が現れ出ているのである。それに従ってテニエスとウェーバーでは共有されている「生」問題自体にも大きな相違が生じてくることが当然予想されるであろう。すると字面の上の共通性よりも複雑な問題の共有と彼らの独自性が浮かび上がってくることが期待できるのである。

これに対して単純な学説史的整理は彼らの共有問題を縦割り状に分断し

(13) Weber, Ebd.

てしまう。この場合にはテニエスが、飽きることなく繰り返し祖述されてきた「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」の二項対立概念の創始者として、厳格な「純粋社会学」の創唱者の一人ということになる。テニエスの仕事が、当人が明言しているように、物理化学や哲学や生物学ではなくて「社会学的な考え」に基づこうとしている⁽¹⁴⁾ことは確かに事実である。「純粋社会学の基本概念」という副題を与えられたテニエスの主著は、この「社会学的な考え」を純粋化しようという意図を反映している。ここにも純粋で、厳密な学としての「社会学」という発想が現れている。しかしテニエスが「純粋社会学」と呼ぶものが、実際には今日のわれわれの観点から見てそのように見えないのも事実である。先の引用で、ウェーバーがテニエスが使用し始めた対概念を導入するにあたって書いているのは、この点である。そこにはウェーバーの考えでは、多くの「不純な」——ウェーバーの表現では「実質的に特殊な内容」——とみなすべき要素が介在している。その不純さは、ジンメルのもものとされる悲観主義的な「生の哲学」や、当のウェーバーに帰されている政治的な「決断論」と勝るとも劣らないものである⁽¹⁵⁾。

テニエスが「純粋社会学」と呼んだのは、一面ではテニエス自身の仕事を乗り越えて進展していったということができよう。「社会学」はコントが願っていたあらゆる「社会科学」の総合という理念と呼応するかのようになり、さらに「純粋」になろうとする道をたどっていくことになる。コントが信じた「実証主義」は法則知によって社会科学を統合する役割を「社会学」に与えようとした。そのためには当の法則知やそこで使用される概念は、あくまでも純粋でなければならない。ところが、コントの場合は肝心の「社会」概念が、ヘーゲルの歴史哲学の「国家」に勝るとも劣らないほど形

(14) Tönnies, ebd. = 同訳書, 上, 40 頁。

(15) 先の章で論じてきたように、彼らの間の相違は恐らく「生」をめぐる内容的な相違というよりも、むしろ「生」の問題を扱う場合の形式の違いであるように考えられる。例えば、先の本文中の引用にもあるように、ウェーバー自身がテニエスと自分とを差異化するのに際して、内容ではなくて形式の問題を挙げている。内容ではなくて形式が問題になっているからこそ、「ゲマインシャフト」や「ゲゼルシャフト」を純粋な類型として再構成する必要が出てくるのである。

而上学的，神学的で，不純であることが明らかになってきた⁽¹⁶⁾。コントの「社会学」が今日の観点からみてひどく雑多で強引で，なによりも不純な印象を与えるようになってしまったのはこのためである。その究極の形がコントのいう「人道教（Religion de l'humanité）」である。コントは「社会学」に個別科学としての厳密性を与えることも，また総合的な「社会理論」としての「純粹」さを与えることもせず，むしろ既存の宗教の代替物を建設しようとした。ここでは社会学者が，この新宗教における聖職者としての役割を期待されるにすぎない。

「純粹」化することが取りも直さず「科学（学問）」としての，あるいは理論としての普遍性，優秀性に結びつくという信仰は，今日でも共有されている。ウェーバーやジンメルが加担していた新カント派の認識論との同盟関係は，その後の哲学諸流派や行動科学による「社会学」の「純粹」化の端緒といえるものであった。ウェーバーからシュッツやポパーへの展開も，同様の傾向として理解できる。シュッツやポパーが育ったウィーンの知的環境には，経済学にも法学にも，哲学にも，「純粹」への飽くなき志向が充満していた。さらにシュッツが依拠するフッサールの「厳密な学としての哲学」の標榜は，「純粹」な哲学としての「現象学」の成立を宣言するものでもあった。まさに「純粹」に憑かれた人々である⁽¹⁷⁾。

(16) 「国家」と社会学のあいだの微妙な関係は，すでに「社会学」という名称が行き渡る以前から見られた。例えば，ドイツにおける社会学の最初期の創始者の一人と目されるローレンツ・シュタインは1850年の『社会の概念と運動法則』で，広く行き渡っている「国家」概念に比すべきものとして「社会」概念を大々的に展開しようとしていた。シュタインの理解では「社会」とは，「国家科学（Staatswissenschaft）」の一翼を担うものであり，「国家」と同じく有機体的な存在者としての「社会」を，「国家」を越える普遍的な存在として考えようとしていた。Lorenz Stein, *Der Begriff der Gesellschaft und die Gesetze ihrer Bewegung: Einleitung zur Geschichte der sozialen Bewegung Frankreichs seit 1789*, Leipzig 1850 = 森田勉訳『社会の概念と運動法則』，ミネルヴァ書房1991年，4-5頁。

(17) 「厳密さ」「純粹さ」に対する志向は，互いに対立し合う「科学」，さらには「社会学」を結ぶ共通点でもあった。われわれは先の章でウェーバーによる物理化学者オストヴァルト批判を見てきたが，オストヴァルトの研究自体が，ブリュッセルの「ソルヴェ研究所」（Institut de Sociologie）の事業の多大な影

この観点から見るとき、彼らの仕事が内包していた不純さは、偉大な共同事業の過渡的な現象と見なすこともできるかもしれない。「心理学」が、ディルタイが主唱したような世界観の解釈学のようなものや、性欲決定論のフロイト派を追放し、ゲシュタルト学派の抵抗を排して、極度に行動主義的な——あるいは「純粹」な——実験科学に変貌していったのと同様、「社会学」においても不純なものは順次取り去られるべきであるとされるようになった。「社会学」と「心理学」はまさに自然実証主義と歴史主義の間の闘技場であった。「心理学」と同じく、「社会学」の純粹化の過程は、十九世紀末以来の哲学の展開と手をたずさえて進行していく。ここに哲学と「社会学」の間の興味深い互惠関係がある。新しく登場した「社会学」は、哲学の手を借りて古い「社会学」の哲学的基盤を陳腐化する。その結果、例えば以前は嚴密な実証科学の象徴であったコントの「社会学」が、次の時代には怪しげな疑似科学の代表のように見なされるようになってしまう。

ところが興味深いことには、当初「社会学」の純粹化と同盟を結んでいた新カント派の哲学の主題そのものが、今度は不純なものとして取り去られることになる。歴史主義の認識論としての課題を前面に押し出していた新カント派哲学は、歴史主義の衰退と共に一気に不純なものになってしまった。いまや認識対象としての「歴史」そのものが科学（学問）にとって不純なものと見なされるようになる。「純粹な歴史科学」を標榜したディルタイの「心理学」が、今では「純粹」でもなければ「科学」でもなく「心理学」でもないのは示唆的である。哲学には、前の時代の哲学を第一の敵対者として排斥する傾向がある。ロマン主義が啓蒙主義の「理性」の一元論を攻撃し、「個別性」や「生」や「世界観」を正面に据えたように、分析哲学が、伝統的な哲学が熱心に取り組んできた「世界観」のような問題を「語ることのできないもの」(ヴィトゲンシュタイン)として斥けたように。

このように見ていくなれば、何が「純粹」であるのかということ自体が、

響下にあった。ベルギーの工業科学者エルネスト・ソルヴェは、炭酸ソーダの製法として有名な「ソルヴェ法」の発明者であるが、同時に自然実証主義による「社会学」の熱心な推進者でもあり、コント主義による「『嚴密な』社会学的方法」の主唱者でもあった(Weber, WL, S. 402)。

非常に歴史的な事象であることも分かってくる。そもそもそれぞれの時代の著者たちが特定の学問を「純粋」であると考えた場合、その学問やそれを構成する理論的概念的構成は、彼らの目的を達成するために最小限度の道具立てだけで成り立っている。言い換えると特定の学問的な目的を念頭に置いて研究に取り組んでいる人物にとって、目的に沿わない要素はすべて不純なものということになる。さらに考えていくなれば、テニエスが「純粋社会学」と呼んだものが、あくまでもテニエスの目的にとって必要最小限で、不必要なものを含まない「社会学」であったことが推測できる。この推測が当たっているならば、テニエスが論じ、今日のわれわれにとって不純となった内容も、本来的には不純ではなかったということになる。つまり「純粋」とは、テニエスにとってテニエス自身の所有に帰すべきもののなのである。そもそも、ウェーバーが「もっとも純粋な諸類型」を使用して展開した「社会学」が、あらゆる点から見て、とりわけ今日の観点から見て本当に「最も純粋」であったのか否かは簡単に断言できることではないはずである。

ここにウェーバーの仕事を今日の観点から「理論的」に再構成しようとする研究者が陥る落とし穴が口を開けている。われわれにとっての「理論」として十分に「純粋」であるはずの要素だけをウェーバーから抽出していくと、結果として非常に断片的で不純物に満ちた「ウェーバー（純粋）社会学」が出来上がってしまうのである。それは概ねウェーバーの著作そのものよりもはるかに平板で、無味乾燥なスローガン状の公準集のようなものに論者の主張で肉付けを施されてできあがっている。テニエスの「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の場合のような二項対立的な概念、ジンメルの場合には、前期の「形式社会学」と後期の「生の形而上学」⁽¹⁸⁾、

(18) このような研究史のあり方にたいする批判は、ジンメルを扱ったモノグラフにもあてはまる。鷹茂はジンメルの前期の「形式社会学」と後期の「生の形而上学」の関係についてこれまでの研究史が陥ってきた困難を鋭く指摘している。鷹によれば、1917年の『社会学の根本問題』は、これまで両方の領域の「意味不明の折衷的『臨時仕事』」とされてきた（鷹茂『ジンメルにおける人間の科学』木鐸社1995年、35頁）。それが「意味不明」になるのは、これまでのジンメル研究者立ちが、「形式社会学」と「生の形而上学」をあたかもスローガンのように扱ってきたからである。

ウェーバーの場合には、支配の「三類型」や「行為類型論」「合理化テーゼ」「世俗化・脱魔術化テーゼ」そして、「プロテスタンティズムの倫理テーゼ」などである。これらはさまざまな疑問を提示され⁽¹⁹⁾ながらも、今日まで「純粋」な社会学の概念として通用してきた。今日の「現実」を読み解くための手がかりとして大いに利用されていることも事実である。しかし、それらは本当に今日のわれわれにとって「純粋」なのだろうか。例えば、「プロテスタンティズムの倫理テーゼ」と「合理化テーゼ」を合体したものは、ヨーロッパ近代社会を論じる際には「純粋」であるかもしれない、しかし非ヨーロッパ社会、例えば日本社会を論じる際にも、果たして「純粋」なのだろうか。

ここまで議論を進めてくるとわれわれの課題である「マックス・ウェーバーにおける歴史科学の展開」が、具体的にいかなる諸要件を含んでいたのかが少しずつ明らかになってくる。われわれの課題はテニエスに比べてウェーバーが本当に「純粋」なのかどうかを決定することではない。二十世紀の科学論の成果が明らかにしているように、理論というものがいかに妥当なものであるのかということを計る基準は、要するにいかに「合理的」であるのかということであるよりも、いかに特定の目的に適合的であるのかということに依存する。それが本当ならば、理論がいかに「純粋」であるかということも、理論を扱う人々がいかなる目的を設定しているのかということに依存するはずである。このように考えていくなれば、むしろ重要なのはマックス・ウェーバーにおいてみられた歴史科学の展開が、どのような目的を志向しており、それがいかなる相互連関の下に成立しているのかということである。言い換えれば、当人が「純粋」であると信じていることを、そのままわれわれが「純粋」であると信じる必要はないのである。むしろ重要なことは、彼らが「純粋」という信念をめぐって作り出していた相互的な意識の方なのである。

(19) パーソンズが『社会的行為の理論』で行った議論を継承してきた社会学者たちの「ウェーバー理論」をめぐる議論は、それがウェーバーの批判的展開を標榜する場合には、すべてこれにあてはまる。

ここに改めて歴史的な契機を取り入れるならば、特定の形の「純粹」な科学を信奉していた人々と、別の形の「純粹」さを共有していた人々の間の時間的な変動が問題になる。そのことを明らかにしていくには、彼らのあいだの人間関係に関して若干観察しておくことも有効であろう。

われわれは先に1908年頃ウェーバーが書いたジンメル社会学に対する批判について触れてきたが、ウェーバーは丁度この時期、1907/8年にジンメルをハイデルベルク大学の第二哲学講座へ招聘するために活動している。第二哲学講座は1906年にクーノ・フィッシャーが辞職して以来空席になっており、ウェーバーはその第一番目のポストにリッカートを、第二番目のポストにジンメルを据えようと、ハイデルベルクの同僚のところを、いろいろ工作して歩いている。これに関してリッカートや妻マリアンネ、テニエス等に宛てた手紙がかなり残っている。とりわけ次のリッカート宛書簡（1907年5月18日）はジンメルの置かれていた状況を考える上で興味深い。

「私は昨日ヴィンデルバントのところに行って来ましたが、彼も状況を私と同じように見えています。ヴィンデルバントはあなたを間違いなく学部推挙するでしょう。そこではあなたについて異議を申し立てることは何もしませんし、あなたは恐らく受け入れられるでしょうから御心配にはおよびません。私がヴィンデルバントを訪ねたのは単に次のこと、すなわち二番目のポストにジンメルをつけることを彼に説得するためです。これは成功したかに見えます。[中略] 学部の内部ではもちろんたいへんきつい戦いを強いられます。反ユダヤ主義、個人的に大変影響力の強いトレルチの嫌悪、ヴント流の言語心理学に対する文献学者の憧れ（Meumann, ev. Külpe）その他がここでは彼の前に立ちまわっています。……」⁽²⁰⁾

先に触れた論壇の名声にもかかわらずジンメルが学界に受け入れられるには多くの困難があった。ジンメルと同時代の学界の関係を主題的に検討することは、本稿の課題ではないが、当時の学界において共有されていた学問観とジンメルという現象の関係はそれ自体として示唆するものが多いはずである。

人間関係についての考察を度外視して、学問そのものの在り方に問題を

(20) Max Weber Gesamtausgabe, Ab. 2, Bd. 5 (1906–1908), 1990, S. 309.

絞ると、ジンメルの仕事はそれまでの学問領域の間の関係を独自に乗り越えていくものであった。とりわけエルンスト・トレルチがジンメルに対して嫌悪を抱いていたという状況は興味深い。ウェーバーの年来の友人で『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の初稿では、全面的な共同作業を進めていたトレルチが、ジンメル招聘に頑強に抵抗していたというのはなぜなのだろうか。

彼らの間の個人的な関係を問うことをやめて、トレルチの仕事とジンメルの名前を当時すでに有名にしていた「社会学」を対比すれば、問題は彼らの間の学問観そのものの相違につながっていくはずである。もちろん学界の主導権は「個人的に大変影響力の強い」トレルチの側にあった。ところが晩年のウェーバーまでもが、「社会学」に向かっていってしまうのである。先に触れたように、ウェーバーは少なくとも外見の上ではジンメルの後を追う形で「社会学」に向かっている。トレルチと共同で研究していた1904年当時のウェーバーと、「社会学」に向かうウェーバーとの間に、どのような関心の移動があったのだろうか。この移動の意味はトレルチの側から考えると、ウェーバーの変貌として一層強調されるはずである。トレルチにとって一層皮肉なことに、共同研究の成果であった『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、当人によって改訂されて『宗教社会学論集』と銘打った論集に収録されて再刊されているのである。

トレルチは1920年7月20日の『フランクフルト新聞』に掲載されたマックス・ウェーバー追悼文で次のように書いていた。

「……哲学者のなかでマックス・ウェーバーの親密な友人であったのは、今日のドイツ哲学における最も先鋭な理論家のハインリッヒ・リッカートと、その弟子のエミール・ラスクであった。ジンメルも彼の近くにいた。ウェーバーはしばしば私から離れていく形で熱心に新カント派の方向に加担していったが、しかしこれはそれ自体として独自の意義をもった思考を導き出すものであった。それらはウェーバーの独自の鋭い研究によってだけではなくて、これらの友人たちによっても導き出されたものでもあった。」⁽²¹⁾

死者の業績を讃える追悼文という性格を考えるならば、トレルチの書き方

(21) Ernst Troeltsch, Max Weber, in: König/Winckelmann (Hg.), Max Weber zum Gedächtnis, 1963, S. 44.

にある程度の抑制が加えられているはずである。しかし、それでもなおかつ抑制された表現のなかに、「ジンメルも彼の近くにいた」ことに対するトレルチの感想がにじみ出している。先のリッカート宛のウェーバーの書簡とトレルチの追悼文を照合すれば、彼らの間の相互評価の在り方がある程度想像できよう。当然のことながら、われわれとは異なってトレルチは先のリッカート宛のウェーバーの私信を見ることはなかったはずである。同じハイデルベルクの町に住んでいたため、この頃のウェーバーとトレルチの間に書簡のやりとりはない。ただし、恐らくはトレルチの目に触れないところで、ウェーバーはトレルチのジンメルに対する嫌悪に当惑していた。しかもトレルチ自身もウェーバーの離反は十分に意識していたわけである。

実際にトレルチはマックス・ウェーバーとは異なった方向に議論を一貫して進めていくことになる。トレルチの念頭にあったのは、歴史相対主義をいかに脱するのかという問題であった。この問題関心は、確かにウェーバーにも生涯にわたって共有されていたものであるということが出来る。ところが、問題に対して与えた解決策が、両者の間では根本から異なっていく。トレルチは歴史主義が歴史相対主義に陥っていく運命を批判し、1922年の『歴史主義とその諸問題』では、「歴史主義の克服」を新たな絶対的価値の「再建」という形で遂行できるのだと主張している。結果として出てきたのは、ヨーロッパ文化の目的論的発展段階論であった。これをトレルチは「普遍史」と同一視する⁽²²⁾。目的論的発展段階論は、ジンメルとも晩年のウェーバーとも共有するところのない立場であると言わなければならない。当時からすでに「相対主義」として悪名高かったジンメルと、トレルチの間に合流点があるとは考えられない。また他方で、絶対的価値への志向を諦めた晩年のウェーバーには、改めてヨーロッパ中心の目的論的普遍史を建設する意図など有り得なかったはずである。トレルチが言うように、「マックス・ウェーバーはしばしば私から離れていく形で熱心に新

(22) 以上のトレルチに関する総括は佐々木博光の指摘に負っている。佐々木博光「歴史主義の徴候のなかの文化諸科学」、『人文学報』第81号、1998年、125-6頁。

カント派の方向に加担していった」のである。

再び人間関係の問題に立ち帰るならば、ウェーバーは先の手紙で、さらにハイデルベルク大学関係者に根強い「反ユダヤ主義」について言及している。この点からもジンメルの実業の社会的な位置付けを推測することはできよう。ただし、反ユダヤ主義という社会現象から学問研究を一元的に演繹するという安易な立論は避けるべきである。あえて知識社会学的な観点をある程度取り入れるならば、学界関係者の根強い反ユダヤ主義によって排除されていることによって、ユダヤ系の学者は従来の学的伝統に拘束されない自由な立場を作り出すことができたと考えることは可能であろう。とりわけ怪しげな新学問と見なされていた「社会学」においてユダヤ系の知識人がもたらした貢献の大きさは強調してもしすぎることはないほどである⁽²³⁾。自由に浮動するユダヤ系知識人は、新生面を求めて意欲的に新しい事業に向かっていく。とりわけ民族国家の樹立と世界強国への道を模索した十九世紀の歴史科学の実業が壁にぶつかった状況では、ヨーロッパ諸民族のナショナリズムとのあいだで独特の関係に置かれていたユダヤ人の活躍の場が拡大する。

先に科学の「純粋化」の志向について論じてきたが、怪しげな新学問と見なされていた「社会学」が「純粋」化への傾斜をいやが上にも強めていった状況は想像に難くない。「純粋」化の志向に対するユダヤ系知識人の貢献がいかなるものであったのかは、本稿の課題ではないけれども、それ自体として興味深い研究課題である。それに「社会学」の成立過程を関係づけるならば、さらに重要な問題が続々と現れ出てくるにちがいない。

ドイツ歴史主義が年来論じてきた「普遍史」の問題も、新たな歴史科学としての「社会学」によって違った展開を見せることになる。そこにはナショナリズムと微妙な関係を保ってきたユダヤ系知識人の貢献を見落とすことができないはずである。

(23) このことはジンメルの同時代人でフランスの「社会学」の展開に決定的な影響を果たしたエミール・デュルケムもまたユダヤ人であったという事実と呼応し合う。関連して、石塚省二「東欧の社会学」、『情況』、1999年4月号別冊、249頁以下参照。

第2節 厳密な歴史科学としての「社会学」⁽²⁴⁾

われわれは「社会学」という新事業をめぐる、マックス・ウェーバーの周辺をしばらく検討してきた。この問題はそれ自体としてほとんど無限ともいべき課題を含んでおり、個人としてもジンメル、シュッツ、テニエス、ゾンバルト、ポパー、トレルチ、など、マックス・ウェーバーに勝るとも劣らない魅力を持った人物が登場してきた。ただし、われわれの課題は「社会学」という新事業をめぐるウェーバーの新たな立場を明らかにすることにあった。

晩年のウェーバーの新たな立場は、ここまで検討してきた人々との相互的な関係から成立してきたものである。ルヨ・ブレンターノやシュモラーといった年長者、ゾンバルトやマイネッケ、トレルチといった同世代の人々から晩年のウェーバーが離れていく様子は、晩年の彼の立場の成立を考える上で非常に重要である。ゾンバルトやマイネッケ、トレルチがウェーバーに比すべきナショナリストとして記憶されており、しかもユダヤ系でないという事実は、学問的な論証の根拠とはならないにせよ、それ自体として示唆的である。ウェーバーのナショナリズムが晩年に至っても衰えることがなかったことは、第一次世界大戦期にウェーバーが新聞に書いた政治論文から明らかである。変わることはないナショナリストとしての相貌の一方で、次第に変わっていく関心がウェーバーの文章に現れてきていた。共同で研究活動を行っていたトレルチからウェーバーが離れていったことは非常に興味をそそる。しかも傍らにはジンメルの存在があった。

ウェーバーの立場の変化はジンメルの議論への対応にも現れている。先の章で触れた 1908 年執筆と思われるウェーバーの数頁の未完草稿「社会

(24) 「厳密な歴史科学としての『社会学』」という表現は、もちろんフッサールの「厳密な学としての哲学」をもじったものである。ウェーバーの「社会学」にフッサールの「厳密な学」と共通の思想が含まれているという指摘は、石塚省二に負っていることを記して謝辞としたい。ただし「厳密な歴史科学としての『社会学』」というのは、ここでの造語である。

学者としてのゲオルク・ジンメル」⁽²⁵⁾ は、ジンメルの独特の心理学的説明のせいでジンメルの「社会学」が不明瞭なものになっていることを指摘していた。1908年とは、ジンメルの大著『社会学』の刊行直後にあたる。当時のウェーバーが彼自身「心理学」に従事し、これをいわゆる「純粹」な学にしようと努力していたことはすでに第1章で指摘してきた通りである。厳密な論理というよりも直感的な着想に特徴づけられ、文学的、哲学的な色彩の濃いジンメルの「心理学」は、われわれの観点からも「純粹」とは呼べないものであろう。その一方で、ウェーバーはナショナリズムと歴史主義の結合物としての「普遍史」から離れていく。そして、半ばジンメルの先行業績に対抗する形で、「社会学」としての「普遍史」への道を模索していくのである。

再びこの章の冒頭に掲げたアルフレート・シュッツからの引用に戻れば、「ジンメルの功績」とは、「人間社会の形式学の創造という要請」を「最初に理解し、その解決を試みた」ことにあった。ジンメルの「社会学」が「形式」の学として構想されていることは、周知の事実である。ジンメルの有名な主要概念である「形式」は、直接的には新カント派の興隆に関連しており、カントの認識論哲学の考え方を踏襲している。アリストテレスにまで起源を辿りうる「形式」と「内容」の対概念は、カントから十九世紀後半の哲学上の議論、とりわけ新カント派の議論を経て、ジンメルに及んで歴史認識、さらには社会認識の問題に新たな探求の場を拡大するのである。逆に言えば、ジンメルは「形式」概念によってそれまでの歴史科学、社会科学の「内容」を大幅に変革しようとする野心を持っていたのである。もちろんこのことは伝統的な哲学、とりわけ歴史哲学とは異なった路線に入っていくことでもあった。

「形式」とは、ジンメルにとって、それまでの歴史科学が取り組んできた「内容」に変革を迫るものである。新カント派が年来主張してきたように、新たな「形式」が与えられるならば、それに従って別の「内容」が現れ出てくる。「内容」、すなわち具体的な事実は、「形式」に依存するものであり、

(25) Max Weber, Georg Simmel as sociologist, in: Georg Simmel Critical Assessments, London 1994, vol. 1.

その逆はないというのが、彼らの根本的な立場である。この場合の「形式」への問いとは、概念への厳密な問いに他ならない。概念への厳密な問いは、それまでの歴史科学が使用してきた概念を改めて根底から問い直すことを要求する。するとナショナリズムと不可分に結びついて発展してきた歴史科学の諸概念が視野に入ってくる。例えば、ナショナリズムが感覚的、情緒的に把握していた「国家」や「民族」は、厳密な概念批判に耐えることができない。これに代えてジンメルが『社会学』で使用するのが、「集団 (Gruppe)」であり、集団間の「闘争 (Streit)」である。ここではナショナリズムは溶解し、いうならば無国籍の抽象概念に再編成されている。「民族精神」あるいは「ドイツ精神」などという概念は、はじめから入り込む余地がないのである。今日の社会学理論の観点から見れば、しばしば単に先駆的なだけで欠点だらけと見られがちなジンメルの概念構成も、同時代の観点から見れば非常に意味深い独特の斬新さを誘っていたはずである。それは同時代に対する非常に大胆な対抗パラダイムの提示を狙っていたということができよう。シュッツが言っていた、「社会的事実の世界そのものを先入見なしに把握すること、正しい論理的な概念作業においてこれを分類すること」とは、必然的に前の時代の科学に対する根底からの批判を意味していた。この意味では、「社会学」は、厳密な歴史科学としての「社会学」という性格を担わされていたということもできる。

ジンメルは最初の著作『社会的分化論』(1890)で、早くも認識形式としての「社会」について系統的に論じており、これに続く、『歴史哲学の諸問題』(1892)では、歴史事象の認識形式についてカントとの関連で論じている⁽²⁶⁾。ここで今さら強調するまでもないように、ジンメルにおける「形式」概念は、これまでの専門的なジンメル研究で、すでに入念に論じられてきた。ただし、これまでの検討は社会学方法論と歴史論を切り離し、上記の初期の二著作を別個の領域の古典として理解しようとしてきた。理由は、従来のジンメル研究が、社会学や哲学、歴史論といった別個の領域の関心からジンメルのテキストを読んできたからである⁽²⁷⁾。ところが、今日では

(26) Georg Simmel Gesamtausgabe 2, S. 305ff.

(27) このようなジンメルにかんする先行研究の総括は、廳茂の次の研究を参照されたい。廳茂『ジンメルにおける人間の科学』、木鐸社 1995 年。

無関係であると思なされる傾向にある両著作を、ジンメルはほぼ同時期に構想、執筆しており、それぞれで共通して「形式」概念について入念な検討を加えているのもまた事実である。そもそもジンメルのいう「社会学」は、今日のそれよりもはるかに歴史科学に関係づけられており、またジンメルの歴史論は同時代の議論に比して、はるかに社会学的であるということもできる。

以上の事実にいかなる解釈を加えるにせよ、ジンメルが初期の著作で、歴史認識と社会認識にまたがった関心に基づいて研究を続けていたことは否定できない。このことは、すでに初期のジンメルにとって、歴史認識と社会認識の双方の領域が、一続きの課題として、何よりもまず取り組んでおかなければならない主要問題を含んでいたことを暗示している。ジンメルにとって両者は、別個の個別問題であるというよりも、むしろより包括的な関心の一環を成しているといわなければならない。さらに、後年の『社会学 社会化の諸形式』（1908）では、歴史的に成立してきた社会的な相互作用の諸形式について膨大な議論が展開されていく。このように歴史事象における「形式」の問題はジンメルの生涯を貫く基本的な道具立てとして繰り返し形を変え、対象をかえて登場する。

ジンメルは『社会的分化論』のなかで、社会現象の混み合った絡まり合いが、「形式」を通して観察することで、それぞれの「内的な連続性」を発見できることを主張していた。ジンメルによれば、「複雑な像の独自性を観察していると、ひとつの単位と他の単位との関係が単位内部で繰り返されていることがわかる」のであり、「形式的側面からのみ内容は高度な意識にもたらされうる」のである⁽²⁸⁾。換言すれば、「内容」に対する「高度な」認識は、「形式」を通してのみ獲得されるというのである。ジンメルのいう「高度な」認識を、新たな認識と言い換えることも可能であろう。新たな「形式」の発見とその「形式」の反復への視点は、これまでになかった新たな「内容」に目を向けさせることを可能にする。次々と新たな「内容」を見つけだしていくことが、新しく出発する科学にとって重要な任務であることはいうまでもない。ジンメルが提唱する新事業としての「社会学」が、

(28) Georg Simmel, Gesamtausgabe, 2, S. 115f.

まさに「形式社会学」と呼ばれる理由はここにある。

ただしジンメルの「社会学」に付けられた「形式社会学」という通称は、半ばそれだけが一人歩きし、「内容」を伴わない「空疎な」議論として、社会の産業化、近代化の「内容」を追い求める社会学者の批判対象とされてきた。また晩年にいたって「生」の意味内容を深遠な表情で語ったこの著者の、初期の「形式」への執着は、若年期のおかしな副産物のように見なされてきた。しかし、観点をかえて「内容」から「形式」へというジンメル自身が加担していた議論の流れを追っていくなれば、問題がそれほど簡単なものではないことがわかってくる。手短かにいうと、「形式社会学」はジンメル自身が熱心に推し進めていた「内容」から「形式」へという議論の流れを、「社会」という厳密な分析枠組（形式）によって実行する事業（「社会」という分析枠組で分析する学＝「社会学」）であった。

この場合重要なのは、「社会学」という新事業がいかなる具体的認識（内容）をもたらすのかということではなくて、ジンメルが全体として取り組んでいた認識形式の革新の方である。こうして考えていくと、しばしば別領域の問題とされてきた「生」や「感情」についてのジンメルの取り組みも別様に理解されよう。「生」や「感情」も「形式」というフィルターを通ることで、新たな「内容」として立ち現れてくる。「形式社会学」はあえて空疎であることによって、新たな内容をつかまえることを期待されるのである。

ジンメルの後でマックス・ウェーバーに立ち返ると、1910年までのウェーバーの「科学論」に関する有名な議論が一挙にわれわれの前に展開する。ジンメルが新カント派の流儀に従って「形式」に着目することで新たな歴史科学の在り方を開拓できると考えたことは既に述べた。それでは、ジンメルの「形式」に比すべきウェーバーの仕事は何なのだろうか。この問いに対する答えは、有名な理想型論（Idealtypus）の展開のなかにあるといわなければならない。ただしこの問題はこれまでの研究が驚くほど蓄積されており、とりわけ1904年の「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」でウェーバーが論じた「理論」そのものに関しては、これまでの研究ですでに検討がほぼ終わっているとみなすことができる。ただしそ

の「理論」が、どのような当人の思惑を反映しており、同時代の学的営為にどのような訴えかけを意図していたのか、さらにはいかなる人間関係を反映していたのか、という点についての研究は寡聞にして聞かないのも事実である。ここでの研究課題に問題を絞るならば、先行するジンメルの事業に対してウェーバーは、「理想型」によって、いかなる貢献を歴史科学に果たそうとしたのだろうか。

この問題がこれまで検討されてこなかった理由は、ウェーバーの「理想型」をめぐる議論が主に歴史科学とは切り離された領域で続けられてきたことにある。ここにはウェーバーの頃のドイツとは異なった歴史学と社会学の分離という新しい状況が関係している。歴史学においてウェーバーを議論する場合には、モムゼンの研究が典型的であるように、同時代のナショナリズムや自由主義との関係、さらにはドイツ歴史主義との関係が検討対象となり、社会学の場合にはパーソンズ以来長年にわたって続けられてきたように、ウェーバーが提示した基本概念や分析モデル自体の検討に力点が置かれる。両者は、いうならば平行関係に置かれたままで、いつまでも交わるところがない。このため驚くほどの量の研究文献が生み出されてきたにもかかわらず、ウェーバーの基本概念や分析モデルが、ナショナリズムと合体したドイツ歴史主義に対して担っていた批判的意図や、対抗パラダイムとしての意味は検討されないままに放置されてきたのである。このことはジンメルとウェーバーの共通の事業についても当てはまる。ジンメルの「形式社会学」やウェーバーの「理想型」的概念構成による「理解社会学」が、どのような議論から成り立っているのかという問題に関してはすでに多く語られすぎているくらいである。ところが、なぜそのような新事業が必要であったのかという問題には答えられていないのである。

一言でいえば、ウェーバーの「理想型」と、それを下敷きにした「理解社会学」はジンメルに対抗する「形式」の学の樹立を意図する事業であった。このことは当人の言明がどのようなものであるにせよ、学説史上の事実として否定できない。ウェーバーがいくら自分の独自性を主張したいと願っても、「形式」の問題を「社会学」に問おうとする時点で、すでにジンメルの先行業績に対抗せざるをえないという宿命にある。ジンメルの「社会学」の不明瞭な「心理学」を批判する草稿を書いたウェーバーは、ジン

メルよりもさらに厳密な学としての、歴史科学としての「社会学」を意図していたのではないだろうか。後の社会学はウェーバーの「社会学」に由来するさまざまな概念を所有し、それを当人の意図とは自由に使用することで新たな成果を上げてきたが、そのような発展が可能になるには、ウェーバー自身による相応の準備が必要だったのではないのだろうか。そこにはウェーバーの「社会学」が根本的にもっている概念への志向、つまり「形式」への志向があった。それが当人の意図とは切り離された展開を準備したのである。もちろんここで重要なのは、学説史の領域でしばしば繰り返されてきた「先陣争い」ではなくて、彼らの間で共有されていた時代的な課題である。

このように考えていくと、研究者にとって見慣れた「ウェーバーの理想型」が同時代に対する野心的な挑戦として再登場してくる。そもそも「理想型」論は厳密な概念構成として構想されている。社会科学方法論の歴史のなかでは、ウェーバーの「理想型」は、カール・メンガーとグスタフ・シュモラーの間のいわゆる「方法論争」を背景とし、それに対する解決策として提示されていると理解されている⁽²⁹⁾。シュモラーの「歴史」とメンガーの「理論」の間の、経済学の在り方そのものを問う論争は、延々と継続された。そして実質的にシュモラー門下と見なしうるウェーバー等の若手世代においても主要問題として議論されていた。われわれが先に触れてきたように、ウェーバーのシュモラーに対する態度の変化は、彼の新たな立場の樹立、表明と時期を同じくしている。1904年に提示された方法論論争の調停案は、その後シュモラーとの間の個人的な関係の変化、さらにはシュモラーの死亡による変化によって次第に色合いを変えていったのではなかろうか。ウェーバーは先に引用した1908年の手紙の中で、シュモラーに、「われわれの学問のなかに歴史的な思考の場を広げていただきました」ことを感謝していた。その同じ人物が、シュモラーとメンガーの間に「理想型」論を提示し、後には「価値自由」論によってシュモラーから離反していく。ウェーバーのシュモラーからの離反は、ちょうどトレルチからの離反とも時期的に一致している。この時期のウェーバーに一体何が起こっ

(29) 向井守『マックス・ウェーバーの科学論』、ミネルヴァ書房1997年、243頁。

たのだろうか。この問いに答えることができるのは、当人を除いてありえないことはいうまでもない。ただし、シュモラー傘下で将来を嘱望された若手歴史学派国民経済学者が、なぜジンメルと同列の社会学者になってしまったのか。プロイセン文部官僚の支配下で、官許の国民経済学に従事する教授が、なぜ怪しげな「社会学」に移動したのか。「理想型」の問題は、ウェーバー個人の人間関係の変化を追っていく場合にも、多くの背景を背負っているのである。

ウェーバーの「理想型」は、概念構成の「形式」として、従来の歴史科学が使用してきた曖昧な概念にかわるものとして論じられている。曖昧な概念には、曖昧な内容に対する恣意的な判断がつきまとう。この点では、ジンメルだけではなく、リッカートやフッサールと変わるところはない。「厳密な学」を目指す当時の人々の共通課題がここにある。そしてウェーバー本来の研究領域に限定すれば、従来の歴史科学の使用してきた概念は、ナショナリズムをはじめとした価値観を濃厚に帯びていた。ここには新カント派が用意した武器を用いて、ジンメルがいち早く挑戦し、ウェーバーがジンメルを批判しながらも、それをさらに仕上げる、といった過程が観察できる。このような過程のなかに、ウェーバー自身の議論の展開を読み取ることができるのも事実である。

1904年のウェーバーが「理想型」について議論したとき、主たる検討対象としていたのは「社会学」ではなかった。「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」には、そもそも「社会学」という用語すら見当たらないのである。この意味で、この「客観性」論文は著者の意図では「社会学」の論文ではない。当時のウェーバーが意図していたのは国民経済学であり、従来の歴史科学を批判することであって、「社会学」という新事業を確立することではない。

ウェーバーが意図したのは、従来の歴史科学に、より厳密な方法的——概念的——基盤を与えることであつた。この論文が『社会科学及び社会政策アルヒーフ』の方法論的綱領論文として書かれていることは、それ自体象徴的である。同じ雑誌に同時に発表されているのが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の初稿である。

先の章ですでに検討してきたように、1904年の初稿は晩年のウェーバー

の関心とはかなりずれた関心の下に書かれている。同じように、同時期の「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」は、後年の、社会学論文、例えば1913年の「理解社会学のカテゴリー」、1917年の「社会学・経済学における『価値自由』の意味」や遺稿『経済と社会』とは異なった関心に根ざしている。もちろん「理想型」や「価値自由」といった議論が、後年に至って無価値になったわけではない。実情は逆であり、「理想型」や「価値自由」は、ますますウェーバー自身の研究活動を拘束し、規定するようになる。われわれは「理想型」論を展開した同じウェーバーが、禁欲的プロテスタンティズムやカトリック、中国文明に対して、明らかな価値判断、加担や蔑視を示していたことを指摘してきた。それは、少なくとも今日の観点から見れば、同時期の「客観性」論文の主張と著しく対立しているようにみえることも強調してきた。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の初稿で使用された「資本主義の精神」なる概念は、本当に「理想型」なのだろうか。「資本主義の精神」は、ここではプロテスタント的西洋に、著しく特化し、事実上それ以外の宗教や文化を「近代」に不適合と断定するために使用されている。この概念（形式）には特定の対象（内容）しか当てはまらないのである。その証拠に、ウェーバーは改訂稿に至ってもヨーロッパ以外に「資本主義の精神」の存在を認定できていない。

理由は容易に想像できる。特定の「内容」しかもたない「形式」は、そもそも「形式」として意味を持たない。「形式」として意味を持たなければ、「理想型」としても無意味なはずである。固有名詞が多様な内容を比較する際に無意味であるのと同じである。さらにウェーバー当人を知る同時代の人々から見れば、彼には熱心な禁欲的プロテスタント教徒の家族があり、同様の人間関係に取り囲まれている。彼は福音主義協会の関係者であり、『キリスト教世界』や『救済』の定期的寄稿者であり、プロテスタント神学者のフリードリヒ・ナウマンやエルンスト・トレルチの友人兼共同研究者でもあった。このような背景を知り、なおかつ明らかに禁欲的プロテスタントに対する肩入れをしている初稿のテキストを読んだ批判者が、その点を突いた場合、はたしてそれが本当に「誤解」と呼べるのだろうか。

ただし後年のウェーバーは、——批判者たちの見解を受け入れたのか否

かは別として——以前の立場から移動していく。その過程で再び立ち現れてきたのが「理想型」の問題であった。厳密な歴史科学としての「社会学」への志向は、それ自体としてウェーバー自身の研究活動に対する批判的契機に結びついたのではなかろうか。その結果は、すでに指摘してきた、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の改訂稿での新たな関心の追加であった。禁欲的プロテスタンティズムの動向は、改訂稿の時点で、当人にとって中心的な研究課題ではなくなっていたことを思い出していただきたい。研究の準備段階も入れて二十年前の研究は、すでに当人にとって「古い論文」なのであった。これに対して、新たに浮上してきたのが世界宗教の類型論なのである。マックス・ウェーバー自身も恐らく意識していなかったはずの解釈を加えるならば、1904年の初稿のウェーバーの関心は、あくまでも禁欲的プロテスタントとそれ以外からなる二項対立でできていた。この二項対立においては、同じキリスト教のなかでのプロテスタントとカトリックの違いよりも、プロテスタントと、カトリックや、「化石化した精神」の中国を含めた非プロテスタント宗教すべてとの違いの方が重要であった。言い換えれば、ウェーバーにとって重要なのは禁欲的プロテスタントなのであった。禁欲的プロテスタント以外の宗教はどれも同じく「資本主義の精神」に無縁の前近代的な「魔術」でしかなかった。この意味で禁欲的プロテスタントは世界を魔術から解放するものであった。

ところが、後のウェーバーは一変し、禁欲的プロテスタントとそれ以外という二項対立を超えて、世界宗教がそれぞれに保持していた主に経済に対する志向の類型論的比較に入っていくのである。晩年のウェーバーにとって、それぞれの世界宗教は、それぞれに合理的な教義をもった独自の「経済倫理」をもっている。「合理的」とはそれぞれの宗教の立場から見た「合理性」を根拠としている。禁欲的プロテスタントから見て「非合理」な行為が、ヒンドゥー教から見て「合理的」である可能性を、ウェーバーは積極的に肯定しようとし始めるのである。

こうしてようやくウェーバーの概念が、当人の主張した「理想型」に近付いていく。例えば、「資本主義の精神」や「禁欲的プロテスタンティズム」は、ウェーバーと立場を共有しない人々にとっては、「理想型」と呼ぶことができるものではなかった。しかし、後年の「世界宗教」や「経済倫理」

さらには「カリスマ」「支配」「行為」といった概念は、確かに「理想型」、あるいは「形式」「類型」としての有効性をもっている。これらは特定の「内容」に結びつけられていないからである。ウェーバーは「カリスマ的支配」という概念を、特定の支配の在り方の優越性に結びつけて論じているわけではない。ウェーバーはさまざまな「行為」類型を提示したが、それらは特定の社会的行為を推奨していたわけでもない。「資本主義の精神」という名の下に「禁欲的プロテスタンティズム」の優越性について語っていた昔のウェーバーとは大きく変わっているのである。これは当人の意識とは別に、重要な変化であるということができよう。

晩年のウェーバーの立場は、互いに拮抗し合う種々の価値判断を帯びた立場を、「形式」として把握し、それらを「類型」として並列させることにあった。対立し合うそれぞれの立場は、「理想型」に加工され、時空を超えて「類型論」として比較される。この過程でそれぞれの概念は「実体」としての「内容」を奪われ、敢えて中身のない空虚な「形式」に変質させられる。それらのなかで、最も重要なのが「合理性」そのものの類型論であった。いわゆる「大陸合理論」の文脈のなかで、「合理性」はしばしばそれだけで自律した実体として、人間生活のあらゆる側面を規定する要件と見なされてきた。ところがウェーバーの晩年の議論では、この「合理性」そのものが「類型」として並列させられる。ウェーバーの「合理性類型論」の重要性は、まさにヨーロッパ近代の学問そのものの在り方にかかわっているのである。

第3節 合理性類型論の登場

マックス・ウェーバーの論じた「合理性」の問題をめぐっては、これまで多くの議論が展開されてきた⁽³⁰⁾。行為論との関連からウェーバーの合理

(30) ウェーバーの「合理性」問題の先行研究に関しては、あまりにも膨大なので次の文献で代表させることにする。年代順に挙げると、大塚久雄「魔術からの解放」『世界』12号、1946年、Reinhard Bendix, Max Weber: An Intellectual Portrait, Doubleday, 1960.(折原訳『マックス・ウェーバー』三一書房, 1988年)。安藤英治「マックス・ウェーバーにおける『合理性』への一断想」(『マックス・ウェーバー研究』未来社, 1965年に収録)。折原浩「インテレク

性概念を論じた文献だけでも、かなりの数を挙げることができる。目的合理的行為や価値合理的行為、そしてその他の行為類型はウェーバー以降の社会学理論の展開に決定的な意義を持ってきた。もちろん行為類型論にとどまらず、合理性理論はウェーバーの宗教社会学や支配社会学、都市社会学などを読み解く鍵としても強調されてきた。ただしこれまでの議論を観察していると、「合理性」概念そのものが実体的な形で取り扱われ、事実上の合理性実在論へと仕様替えされているように見える。とりわけ西洋近代の「合理性」や「合理化」と禁欲的プロテスタンティズムの関連を論じた議論は、事実上「合理主義」という実在論の文脈に合致している。例えば序論でわれわれが引用したハーバマスによるウェーバー理解がその典型的な例である。ところが、マックス・ウェーバーの場合には事情が異なる。

トゥアリスムスと『合理化』(『危機における人間と学問』未来社、1969年に収録)。菅野正「M. ウェーバーにおける近代社会の「合理性」について」『社会学評論』11巻4号84, 1971年。F. H. Tenbruck, Das Werk Max Webers, in: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie 27, 1975, S. 663ff.. W. Schluchter, Die Entwicklung des okzidentalen Rationalismus: Eine Analyse von Max Webers Gesellschaftsgeschichte, 1979 = 嘉目克彦訳『近代合理主義の成立: マックス・ウェーバーの西洋発展史の分析』未来社1987年, Stephen Kalberg, Max Webers Typen der Rationalität: Grundsteine für die Analyse von Rationalisierungs-Prozessen in der Geschichte, in: W. M. Sprondel/C. Seyfarth (Hg.), Max Weber und die Rationalisierung sozialen Handelns, Enke Verlag, 1981, S. 9–38. Rogers Brubaker, The Limits of Rationality: An Essay on the Social and Moral Thought of Max Weber, George Allen & Unwin, 1984. Randall Collins, Max Weber: A Skeleton Key, 1986. 寺田篤弘, 中西茂行訳『マックス・ウェーバーを解く』新泉社1988年。Karl-Heinz Nussler, Kausale Prozesse und sinnerfassende Vernunft: Max Webers philosophische Fundierung der Soziologie und der Kulturwissenschaften, Verlag Karl Alber, 1986. Alan Sica, Weber, Irrationality, and Social Order, University of California Press, 1988. Lietteke van Vucht Tijssen, Auf dem Weg zur Relativierung der Vernunft, Eine vergleichende Rekonstruktion der kultur- und wissenssoziologischen Auffassungen Max Schelers und Max Webers, Duncker & Humblot, 1989. Martin Albrow, Max Weber's Construction of Social Theory, St. Martin's Press, 1990.

ウェーバーは1904年以来「理想型」論によって概念の実体化を繰り返し拒否していたからである。しかも後年には「価値自由」論がこれに加わる⁽³¹⁾。ウェーバーの「合理性」という最も重要な概念が、もしも実体的＝非理想的な性格をもっているならば、ウェーバーの理想型論は決定的な自己矛盾に陥ることになるはずである。このような矛盾を回避するには、あるいは矛盾を特定するためには、ウェーバーの「合理性」概念が、ウェーバーの理想型論によってどのように規定されているのかを明らかにしなければならない。それには理想型論に基づく類型論という方法が、ウェーバーの合理性論にどのような意義を持っているのかを問いなおさなければならないのである。ここでの課題は、先行研究がウェーバーの合理性概念に与えてきた諸定義に、さらに別の定義を追加することや、別の定義に取り替えることではない。われわれはこれまでの研究とは異なって、合理性類型論の中身ではなくて、「合理性」が類型論として論じられていることの意義それ自体を問うことによって、合理性と合理主義をめぐる古くからの諸問題が、ウェーバーにおいてどのように展開したのかを検討する。

これまでの膨大な先行研究は、どのような立場に立つにせよ、ウェーバーの「合理性」概念をできるだけ明確化・一元化することに精力を注いできた。このような試みがなされてきた理由は、ウェーバー自身が「合理性」そのものを、一元的な概念規定の下に論じていないからである。とりわけ晩年のテキストでは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の初稿に見られたような、特定の「合理性」へ集束していくような議論は姿を見せなくなってしまう。「プロテスタント的近代」すなわち「合理性」といった議論の道筋が見えないのである。この結果、多くの研究はウェーバーのテキストに現れない合理性の一元的な把握を、何とか再現しようとしてきた。個々の「合理性」概念を、ウェーバーのテキストに沿っ

(31) これに対してハーバマスは、アドルノ等と共同によるウェーバーの科学論に対する批判によって出発していた。「実証主義論争」の争点はここにあった。初期の著作ですでに「認識批判の危機」を、ヘーゲルの存在論で乗り越えようとしたハーバマスにとって、ウェーバーの科学論は「認識批判の危機」の末期状態を示すにすぎない。J. Habermas, *Erkenntnis und Interesse*, Frankfurt a. M. 1968.

て再定義あるいは再構成しようとする試みも、ウェーバーの「合理性」概念に多層的な構造を読み取ろうとする試みも、この点で共通している。

同時にこれまでの研究ではウェーバーの「合理性」概念がいかに多様であるのかということが論じられてきた。それらが論じてきた議論を受け入れるならば、ウェーバーは多様な「合理性」類型論を構成しているということになる。ウェーバーには、多くの視点から分節化され、多次元に展開する「合理性」の諸類型がみられるのである。さらにこれまで「合理性」概念をめぐる展開されていた議論は、ウェーバーが提示した個々の「合理性」類型が持っている可能性をいかに引き出すのかという意図の下にあったといえることができるだろう。目的合理性をはじめとした個々の合理性類型に、様々な再定義を施そうとしてきた試みは、このような意図のもとに行われてきた。

ただしこれまでは、ウェーバーがなぜ「合理性」を多元的な類型論として構成しようとしたのか、ということについてほとんど検討されてこなかった。このことは従来の研究が、ウェーバーの「合理性」概念を研究しているのと同時に、また高度に合理主義的な立場からなされてきたということを示している。それらは合理主義による「合理性」論の研究であったといえよう。ここでいう「合理主義」とは、認識対象としての社会事象や歴史事象を一元的な「合理性」概念から理解できるという信念や立場を意味している。もちろんこれは伝統的な西洋合理主義の流れをくむものである。さらに言うならば、これまでの研究はウェーバーを合理主義のなかに押し止めようとしており、合理性類型論の意義を「合理性」の増強のように理解してきたのではないだろうか。

従来の理解の合理主義的な性格と、それらが陥っている困難は、次のように議論を展開するならばさらに明快になる。もしも通常われわれが知る合理主義が論じる意味での一元的な「合理性」そのものが、ウェーバーの中心的問題であるならば、ウェーバーは少なくとも「合理主義者」という名称で呼ばれることができるだろう。しかし、「社会学」に向かっていったウェーバーをこのような意味での「合理主義者」と呼ぶことには留保が必要なのではなかろうか。そもそも「合理性」についてしばしば議論することと、「合理主義者」であるということとは同じである必要はない。もしも

両者が必然的に同一ならば、ヨーロッパ思想史は古典ギリシア以来——子細に個々の思想家の所説を検討していけば例外はいくらでもあるにせよ——無数の合理主義者と合理性理論に満たされてきたことになる。その結果、合理性理論をウェーバー独自の貢献として特筆する必要など始めからなくなってしまうのである。つまり肝心の「合理性理論」はウェーバーの独創ではないということになる⁽³²⁾。

ここに大きなジレンマが生じている。またこれまでの研究はウェーバーの「合理性」の多元性や多層性や互いに矛盾し合う性格を強調しておきながら、他方でウェーバーの「合理性」概念の決定的な重要性をも強調している。それどころか「合理性」そのものがウェーバーの歴史分析、社会分析の要にあるとさえ主張されてきたのである。しかし、「目的合理性」と「価値合理性」の間の関係のように、互いに矛盾する「合理性」を、社会分析の中核に据える「合理主義者」というのはすでに形容矛盾なのではなかろうか。これらのジレンマを克服してまでウェーバーの独自の貢献として「合理性」理論を強調するからには、ウェーバーの「合理性」理論がどのような独自性を持っていたのかを明らかにしなければならない。ところが、これまでの「合理性」理論＝ウェーバーの中心テーマという図式と、それに触発されたウェーバーの「合理性」概念をめぐる研究は、この問題を論じてこなかったのである。あたかも自明の問題は問う必要がないかのようである。

他方ウェーバーの「合理性」概念の多元性や多様性を、ウェーバー自身の西洋合理性に対する「アンビヴァレントな態度」に還元して理解しようとしてきた立場の研究をここで検討しておかなければならない⁽³³⁾。これは「合理性」という名で呼ばれてきた観念を再考し、「合理性」の持つ善悪（功

(32) 例えばブルバカーもこの点を指摘しているが、ウェーバーの使う「合理性」という用語法上の不注意を強調するのみで、このジレンマを解決しようとはしない。Cf. Brubaker, *The Limits of Rationality*, 1984, p. 2.

(33) 最近では例えば、Brubaker, *The Limits of Rationality*, 1984, p. 3. さらに折原や Th. アドルノ、J. ハーバーマスによる「ウェーバー没意味化論」という理解もこの立場にたっている。これらは「疎外・物象化論」をウェーバーの中心テーマとして強調する。

罪) 両面の作用 (あるいはむしろ「合理性」の破壊的な作用) に注目する観点をウェーバーのテキストに読み取ろうとする立場である。この立場は一面では確かに説得力をもった解釈を可能にしている。晩年の『職業としての学問』にみられるウェーバーの悲観的な態度は、この解釈に大きな説得力を与えている。そしてこの立場に立って上記のジレンマを解決する際には、カントやヘーゲルや十九世紀の合理主義的な実証主義達には見られなかったこの「アンビヴァレントな態度」に、ウェーバーの独自性が読み取られてきた。従来の楽観的な合理主義に対する「悲観的な合理主義者ウェーバー」という差異化がここで行われる。

ところがこの解釈もまた困難をかかえている。この解釈はウェーバーが「合理性」に対して「アンビヴァレントな態度」を取っているという事実と、ウェーバーが「合理性」論を多元的に論じているという事実の因果関係を、説得力ある仕方で説明できていないのである。われわれは「合理性」に対するまさに「アンビヴァレントな態度」を取っていた思想家として『啓蒙の弁証法』(初版 1944) の著者であるアドルノやホルクハイマーを知っている。そもそもアドルノやホルクハイマーはこのような型の解釈を可能にするために決定的な貢献をした人々であった。周知のように彼らの「合理性」概念は、ウェーバーのように多元的でも多層的でもない。「合理性」に対して「アンビヴァレントな態度」を取るということと、「合理性」が多元的な概念であると論じることとは、必然的な因果関係にあるわけではないのである。むしろ逆に「合理性」の持つ善悪(功罪)両面の作用や、「合理性」が人間性にもたらした破壊的な作用を強調するならば、「合理性」は一元的な概念である方がはるかに都合がよいはずである。『啓蒙の弁証法』の議論が大きな説得力を持つのは、一元的な概念としての「合理性」に、われわれが逃れることのできない破壊的作用を指摘したからであった。「合理性」が善悪(功罪)両面の作用をもたらしたことを強調する際に、「合理性」それ自体が多元的な概念であると想定されるならば、議論の焦点は分散し、肯定され推奨されるべき「合理性」と、否定され排除されるべき「合理性」の区別の方に議論の重点が移動してしまうことになる。西洋の伝統的な思想が信じてきた「合理性」の神話や啓蒙の神話に疑いを投げ掛けるならば、神話それ自体をわざわざ多元化してしまうことは不利であ

る。「良い神話」と「悪い神話」の分別を最初に強いるような神話批判は、神話批判ではなくてむしろ特定の「悪い神話」批判であるといわなければならない。

これまでの研究は晩年のウェーバーが論じた個々の「合理性」概念の明確化や細分化、「合理性」類型間の序列化に向けられていた。無数の人々が強調してきたように、「目的合理性」が、高位の「合理性」としての地位を与えられ、それ以外の「合理性」に消極的な地位が振り分けられたのはこのためであった。さらにウェーバーの「合理性」批判も、この「目的合理性」へ向けられたと考えられてきた。もしもこのような議論をそのまま受け入れるならば、晩年の社会学者ウェーバーは「合理性」を批判していながら、同時に当の批判対象を分散させるという困難な作業を行っていたことになる。これに対する救済策として仮にウェーバーの「合理性」批判を、「目的合理性」への批判へ限定して理解するならば、上記の批判対象の分散という事態は一応避けられるだろう。つまりウェーバーが西洋近代の病理をもたらした原因は「目的合理性」であると特定していたという仮定である。ところが今度は、「目的合理性」以外の「合理性」類型をウェーバーが論じた理由を説明しにくくなる。この仮定に従うならば、例えば「価値合理性」は「目的合理性」に対立するものとして、「目的合理性」が批判される分だけ賞賛されることになるにちがいない。しかしウェーバーの議論に「価値合理性」への賞賛を読み取ることは難しい。その上、この仮定では、ウェーバーが同時に「非合理性」の問題を熱心に論じていたことを説明することができない。伝統的な「合理主義」の議論では、「合理性」以外の要素を「非合理性」として把握してきた。つまりウェーバーが「目的合理性」以外の「合理性」を「非合理性」と呼ばなかった理由が説明できないのである。

ここまでの議論を簡単にまとめるならば、従来の研究が行ってきたウェーバー「合理性」理論の理解にとって、ウェーバーには不要な要素が多すぎるのである。「合理性」に対するウェーバーの「アンビヴァレントな態度」は事実であるとしても、そこからだけではウェーバーの「合理性」多元論、あるいは「合理性」類型論の性質は上手く説明できないのである。この問題を解く鍵は、「合理性」をめぐる展開していったウェーバーの議

論そのものに時間の層を読み取っていくことなのではないだろうか。

それではウェーバーの「合理性」論を特徴づける「合理性類型論」とはいかなるものなのだろうか。合理性類型論を考える際に何よりも重要になるのが、晩年のウェーバーを特徴づける「類型論」という方法の性格である。類型論は個々の類型の中では多様な対象を特定の相の下に単純化し類型化する。これまでの研究の多くが、ウェーバーの提示した様々な「合理性」、すなわち「目的合理性」や「価値合理性」「整合合理性」「形式合理性」「実質合理性」等々を個々に検討し、なんとか一貫した明確な定義に捉え直そうとしてきたのは、「合理性」類型論のこの側面を強調してきたからである。古代エジプトから、中国の伝統社会、中世ヨーロッパにいたるまでの諸文化が内包した様々な「合理性」は、「価値合理性」や「目的合理性」、あるいはいくつかの「非合理性」に当てはめられて理解されてきた。その根拠は 1904 年のウェーバー自身の判断にあった。化石化した中国文明が「非合理的」であることは当時のウェーバーにとっては当然であったのかもしれない。無限に多様な「合理性」は比較的少数の類型の下に整理されて理解される。これは多様性を方法的に単純化する作業であった。さらに言葉を付け加えるならば、これまでの研究は事象の多様性を、ウェーバーの打ち出した類型になんとか破綻なく当てはめて単純化していこうとする立場で一貫してきたといえるだろう。

しかし類型論にはもう一つ重要な側面があることを見落としてはならない。それは、類型論という方法が、個々の類型の意義を互いに相対化するという側面である。厳密な意味での類型論は、大きな概念——例えばここでいう「合理性」——を分割し、分割された諸類型の中にさらに分割された小類型を構成することによって成り立つ。そして分割された類型は少なくとも方法的には同等の価値を持つのである。つまりこの側面において類型論は大きな概念を、多様な分析枠組みへと分割していくという機能を持っているのである。方法としての類型論を検討する場合、以上二つの側面のどちらを強調するかによって大きく異なってくる。

伝統的な一元的「合理性」論からウェーバーの合理性類型論への移行を考えるならば、類型論の二番目の側面の方が意義を持ってくることはいうまでもない。この側面からウェーバーの合理性類型論を捉え直すならば、

はたしてどのような理解が得られるのだろうか。するとウェーバーが提示した「目的合理性」や「価値合理性」「整合合理性」「形式合理性」「実質合理性」等の合理性類型や、あるいはネガ・ポジの関係で対立する様々な「非合理性」概念⁽³⁴⁾が、方法的には互いに平等な意義を持ち、同時に相対的な意義しか持ちえないということが明らかになってくる。類型論のこの側面に注目すると「目的合理性」の突出や、それ以外の合理性への蔑視という観点が、少なくとも方法的には不可能になってくる。それらはあくまでも対等に位置づけられた個々の類型としての意義を固定されており、個々の類型は互いに絶対的な位置を主張するものではない。それらの類型を、まさに類型論的に対等に並べていくなれば、それらを序列化して理解するよりも、はるかに理解しやすいのではなかろうか。いうまでもなくこの類型論には非合理性の諸類型も入ってくる。例えばウェーバーは『社会学の基礎概念』で、合理性と非合理性について次のように書いている。

「合理的と非合理的とを問わず、あらゆる場合を通じて、社会学は、現実から遠ざかりながら、しかも、或る歴史現象がどこまで社会学的概念の或るものに近似しているかを示すことによって現象に整理を施す、そういう方法で、現実の認識に役立つものである。⁽³⁵⁾

ここでウェーバーのいう「社会学」とはここで論じてきた類型論のことである。類型論はわれわれのいう第一の側面で現実から遠ざかる単純化を行い現実を整理する。同時に第二の側面では、「合理性」だけではなく非合理性をも含めたあらゆる場合を想定することで現実を多様に捉えようとするのである⁽³⁶⁾。さらにわれわれはウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の1920年の改訂によって初めて登場した注記で次のように書いていることに注目すべきである。

(34) 例えば Weber, WL S. 433 には「目的非合理的な zweckirrational」 という表現が出てくる。

(35) Max Weber, WuG, S. 10 = 清水訳『社会学の根本概念』岩波書店、1972年、32頁。

(36) ウェーバーの非合理性問題は、前に挙げた Alan Sica, Weber, Irrationality, and Social Order, 1988 に集中的に論じられている。さらに、Brubaker, The Limits of Rationality, 1984, p. 49 を参照。

「『非合理的』というのは、それ自体で常にそうなのではなくて、むしろ特定の『合理的な』観点からそう言われるにすぎない。非宗教的な人々にとって宗教的な人々は、快楽主義者にとって禁欲的な生活態度は『非合理的』となるのであるが、それらの究極の価値からはかるならば、それぞれに一つの『合理化』なのである。この論文が何らかの寄与を果たしうるものであるとするならば、ただ、一見一義的に見える『合理的』という概念を、その多面性において捉えたことである。」⁽³⁷⁾

これは間違いなく 1904 年ではなくて、1920 年のウェーバーの立場である。さらに同年の『宗教社会学論集』の序言では、

「そして上記の事例のすべての場合に、問題となるのは明らかに西洋の文化の一つの特殊に形づくられた『合理主義』である。後ほどの議論で繰り返し明らかにするように、今やこの語から最高度に異なったことが理解できるのである。」⁽³⁸⁾

他方『儒教と道教』末尾に置かれた「結論、儒教とピューリタニズム」では、

「以上に述べてきたことをわれわれ西洋人の視点に関連させるには、もしかするとつぎのようにしてみるのがもっとも目的にかなっているかもしれない。それは、われわれが、儒教的合理主義——というのも、こうした名称が儒教にはふさわしいからだ——と、プロテスタンティズムの合理主義というわれわれ西洋人には地理的にまた歴史的にももっとも近い合理主義との関係を明らかにしてみることである。」⁽³⁹⁾

これらは書かれている内容からだけでも、ウェーバーの立場の変化と、宗教社会学研究の目的を、ウェーバー自身が明確にしている極めて重要な部分であることが明らかである。この時期のウェーバーにおいて、「目的合理性」が高度で、それ以外の合理性が劣るといった合理性の等級付けは、そもそも意図されていないのである。彼の関心は、「合理性」の序列化ではなくて、それらを足がかりにした歴史的事象のさらなる理解なのである。

ウェーバーの合理性論は、類型論であると古くから論じられてきた。しかしわれわれが見てきた類型論の二つ目の側面に則して考えるとき、以上

(37) Weber, RSI, S. 35 Anm. 1.

(38) Weber, RSI, S. 11.

(39) Weber, RSI, S. 512 = 木全訳『儒教と道教』創文社、1971 年、377 頁。

の文章の引用は更に大きな意義を持つことになる。「プロテスタンティズムの倫理」研究の変化を、ウェーバーの合理性類型論の展開として解釈することもできよう。西洋合理主義そのものの立場から他の文化を見ていたウェーバーと、そのような立場を一旦棚上げにしたウェーバーの違いである。このことはウェーバーのこの著作が持っていた意義を改めて考えるならばはっきりする。合理主義的な社会思想によって「非合理性」に押し込められてきた宗教の意義を、独自の合理性として再認識したことは、広く認められたウェーバーの業績であった。いうまでもなく、ウェーバーはこの研究で特定の宗教の「合理性」をことさら賞賛しているわけでも、経済的合理性の肩を持っているわけでも、西洋合理主義の偉業を褒め称えているわけでもない。プロテスタントの合理性を唯一の正しい合理性として特定しようとしているわけでもない。合理性や非合理性の序列化は始めから意図されていないのである。これは多様な「合理性」を互いに相対化する類型論によって初めて方法的に可能になる研究であった。晩年のウェーバー独自の境地がここにある。

このように見ていくと、1913年の『理解社会学のカテゴリー』という論文の、合理性類型論に対する意義も明らかになってくるように思われる。この論文はウェーバーが構想した合理性類型論のコード・ブックのような役割を果たしているのである。もちろん類型論のコード・ブックとしての性格は『経済と社会』の「社会学の基礎概念」の方がより強いといわなければならないだろう。ウェーバーが「社会学の基礎概念」の冒頭で次のように書いている理由は以上から明らかである。

「以下に述べる序論的な概念規定は、なければ困るし、あれば必ず抽象的な非現実的なものになってしまう。といっても、私の方法が新しいなどと主張するつもりは毛頭ない。むしろ、同じ問題を論ずる場合、すべての経験的社会学で現に言われていることを、せめて、もっと目的に適った、もう少し正確な、当然、それだけペダンティックになりがちな言葉で言いあらわそうと考えているに過ぎない。明らかに見慣れない新しい言葉を用いるのも、そのためである。」⁽⁴⁰⁾

ウェーバーは自分の用いる合理性類型論にどのような類型が登場し、それ

(40) Weber, WuG, S. 1 = 清水訳7頁。

らがどのような概念を中心にして構想されているのかということを、この「序論的な概念規定」で明らかにしようとしたのである。そして『経済と社会』はまさに多くの神々が互いに対等の立場で闘争する類型論によって展開されている。例えば『経済と社会』に収録された「法社会学」では、

「ところで、一つの法は、法思考の展開がどのような合理化の方向をたどるかに応じて、きわめてさまざまな意味で『合理的』でありうる。」⁽⁴¹⁾

と書いている。「合理性」同士の対立はここでは法における論理的合理性と実質的な合理性の間の対立として論じられている⁽⁴²⁾。他方『宗教社会学』の章では、まさに「さまざまな意味で『合理的』」な行為が無数に論じられている。さらに『支配の社会学』の章で登場する「カリスマ的支配」という類型ですらまた一つの「合理性」として捉えられる。ウェーバーは「カリスマ的支配」類型を、直接には「非合理性」として理解する⁽⁴³⁾。ところが合理性と非合理性の両面にわたる合理性類型論として、ウェーバーの『経済と社会』を理解するならば、「カリスマ的支配」の「非合理性」もまた、支配における合理性類型論の重要な一類型として理解しうることが明らかになる。別の観点から見ると、カリスマの支配も一つの「合理性」なのである。この結果、『経済と社会』は実に膨大な合理性類型論によって構成された歴史社会学、そしてさらに全く新たな普遍史となる。われわれはすでに「普遍史」の問題と歴史主義の関係について多くの言葉を費やしてきたが、それを踏まえるならば、ウェーバーの「類型論」の革新力の大きさは理解できよう。目的論として、あるいは西洋近代を中心として、絶大な求心力を保持してきた「普遍史」や「歴史哲学」は、ここに類型論として再編成される。まさに「神々の闘争」と呼ぶべき世界である。

それでは、ウェーバーが合理性を論じるための方法として類型論を選んだのはなぜなのだろうか。この問いに答えることは、晩年のウェーバーの学問それ自体の性格を問うことになるだろう。われわれが知っている西洋の合理主義的な社会思想は、一元的な「合理性」への信頼によって形成されて

(41) Weber, WuG, S. 395 = 世良訳『法社会学』創文社, 1974年, 102頁。

(42) Weber, WuG, S. 555 = 世良訳『支配の社会学』I 創文社, 1960年, 48頁。

(43) Weber, WuG, S. 397 = 世良訳『法社会学』, 105頁。

きたものである。ルネサンス以来の合理主義は理性（合理性）によって「世界」が認識されうるという確信に基づいてきた。根底にあるのは認識行為（学問）における合理性と、「世界」そのものの合理性の同一性という確信である。この確信の根拠は、「合理性」そのものが一貫して単一のものであり、自律する実体として何ものにも依存しないという信念である。この信念なくして「合理主義」はありえない。われわれはウェーバーの合理性概念をめぐる研究が、合理主義的な解釈に結びついてきたことを指摘してきた。先に引用した『社会学の基礎概念』を更に読み進んでいくと、ウェーバーが彼の方法について次のように念入りに断っているのに出会う。

「以上のような意味においてのみ、また、以上のような方法上の便宜という理由によってのみ、理解社会学の方法は合理主義的なのである。しかし、もちろん、この方法は、社会学上の合理主義的偏見などと解すべきものではなく、ただ方法上の手段と解すべきもので、生に対する理性の現実的優位の信仰などと勝手に解釈されては困る。なぜなら、目的の合理的考慮がどこまで実際の行為を現実規定しているかについては、何一つ言うつもりはないからである。といっても、見境なく合理主義的解釈が行われる危険のあることを否定するわけではない。遺憾ながら、そういう危険の存在は、すべての経験の示すところである。」⁽⁴⁴⁾

いうまでもなくウェーバーにとっても学問の研究はそれ自体で合理的なものでなければならない。このことは恐らく生涯にわたって一貫していたはずである。しかも晩年のウェーバーは学問が扱う対象それぞれが持つ独自の合理性と、学問の「方法上の手段」の合理性とが同じものであるという信念を放棄している。伝統的な意味での「合理主義」とウェーバーの決定的な相違点はここにある。

少なくとも経験的な社会学研究において、ウェーバーは自分が伝統的な意味での「合理主義者」、あるいは「生命に対する理性の現実的優位の信仰」を持つ者と誤解されることを拒絶している。さらに先の「プロテスタンティズムの倫理」改訂稿からの引用にあるように、晩年のウェーバーは「合理性」を多元的な概念であると考えていた。そして社会科学研究の領域では、多くの類型が相対化され並列される方法、すなわち類型論を用いて

(44) Weber, WuG, S. 3 = 清水訳, 12 頁。

「合理性」を論じたのである。それでは研究対象を互いに相対化するような方法を、ウェーバーがあえて合理性に対して採用した理由を問わなければならない。

すると、ここに従来の「合理性」概念の支配の相対化というウェーバーの関心が明らかになってくる。上記の引用にあるように、ウェーバーは、自分の学問に「合理主義的な偏見」が読みとられることを警戒していた。ウェーバー自身が「合理主義者」であったのか否かという問いを一旦棚上げにするとしても、少なくともこの部分でこの人が「合理主義的な偏見」の持ち主であると解されることを拒否していたことは事実として認めなければならない。このことはウェーバーを少なくとも言葉の通常の意味で「合理主義者」として理解することを困難にする。さらにウェーバーは「合理性」を類型としてならべることで、合理性に基づくさまざまな「合理主義」を互いに争いあう対立項であるとした。しかも個々の合理性が持っている「意味」は、ウェーバーによれば「合理的」であるということに対して通常の意味での「合理主義者」が考えるような「意味」ではない。個々の合理性の「意味」とは、「概念的に構成された純粹類型において、類型として考えられた単数あるいは複数の行為者が主観的に考えている意味。客観的に正しい意味とか、形而上学的に解明された真なる意味とかいうことではない」⁽⁴⁵⁾のである。さらにウェーバーにとって「合理性」は、否定されるべき対象ではないとしても、相対化され、従来の独裁的な地位——客観的な正しさとか、形而上学的に解明された真理性——を剥奪される対象なのである。

「合理性」と合理主義が保持してきた絶対的な地位は、ウェーバーによって遂に相対化されるのである⁽⁴⁶⁾。M・アルブローは、「カントが合理性の純粹哲学を発展させ、合理性を歴史化したヘーゲルが合理性に重大な変更を加えた。マルクスは合理性を政治化した。ウェーバーの貢献は合理性を社会学化したことにある。それは合理性を経験科学の方法と問題の両面に定

(45) Weber, WuG, S.1f = 清水訳, 9頁。

(46) Vucht Tijssen, Auf dem Weg zur Relativierung der Vernunft, 1989, S. 15.

着させることであった」⁽⁴⁷⁾と書いている。アルブロウの文章を言い換えるならば、ウェーバーの仕事の独自性は「合理性」を哲学や政治の問題としてではなくて、厳密な経験科学の問題として扱うことにある。さらに議論を展開するならば、経験科学の方法における合理性と、諸問題におけるそれぞれの合理性とはここに区別されるのである。

合理的な方法としての経験科学は、その出発点であるはずの「合理性」にまで自己言及していく。まさにブーメラン効果である。経験科学の対象として合理性を扱う場合の「合理的な」方法としてウェーバーが選んだものは、類型論であった。厳密な歴史科学としての社会学を可能にするのは、ウェーバーにとって類型論なのである。そこでは一元的な合理性の独裁は不可能である。既にウェーバーは『R. シュタムラーの唯物史観の「克服」』（1907）で、

「諸事実を一つの具体的な連関へ整序することも、諸事実から『法則性』を抽出することも、明らかに両者ともその都度特殊な『視点』の下で行なわれるのがつねである。実際、ほとんどの専門科学相互間の分業はそのうえに成り立っている。だがまさしくそれゆえに、一つの「絶対的」視点というものは経験的諸学科の全体にとっては全然問題となりえないのである。（中略）また、普通いわれるところの『精神諸科学』は、『視点』が多数あることおよびその相違によってこそ特徴づけられるのであり、このような視点にしたがって現実を考察するのである。」⁽⁴⁸⁾

と書いていた。以上の議論を逆に言えば、「一つの『絶対的』視点」を「経験的諸学科の全体」から追放しようとするウェーバーにとって、「合理性」の問題は、どうしても手を付けなければならない不可避の対象であった。まさに「一見一義的にみえる『合理的』という概念」は晩年の彼にとって「多種多様な意義」をもっているのである。これは同時代に対する重大な挑戦を含んでいた。「合理性」の通念に挑戦し、それを多元的な類型論に解きほぐしていく、それがウェーバーの新しい事業なのである。

ここまで議論を進めてくると、先に提示した問題に答えることができる

(47) Albrow, Max Weber's Construction of Social Theory, 1990, p. 4.

(48) Weber, WL, 303 = 松井訳 『R. シュタムラーの唯物史観の「克服」』（『ウェーバー社会科学論集』河出書房新社 1982 年），113 - 114 頁。

ようになる。これまでのウェーバー合理性論研究が陥ってきたジレンマを先に指摘してきた。それはウェーバーをはじめから「合理主義者」と断定することによって生じたジレンマであった。ところが、肝心のウェーバーの議論には単に「合理主義者」とは呼べない独自の展開がみられたのである。ウェーバーの業績の中核に合理主義的な合理性理論があるならば、ウェーバーはルネサンス以来の合理主義者が行ってきた仕事と実質的には何も変わらないことをやっていたにすぎない。ところがここまで論じてきたウェーバーの「合理性類型論」に関心に移すならば、晩年のウェーバーの仕事が一挙に重要性を帯びてくる。

この理解に立つならば、晩年に向かっていくウェーバーは少なくとも伝統的な意味での「合理主義」以外の立場に立って、従来の合理主義が行ってきた研究とは別の次元に議論を進めたのだということが想像できる。ただしそれは、半ば反射的に想起される「非合理主義」と呼ばれてきた立場ではない。「非合理主義」が合理主義を積極的に否定し、合理主義が否定してきた要素を強調するのに対して、ウェーバーは「合理性」それ自体の多元的性格を合理性類型論によって明らかにしようとしたのである。「非合理主義」が合理主義の単純な裏返しや逆転を出発点としているのに対して、合理性類型論は人間が「主観的に考えて合理的であると考えられる場合」そのものの類型を考察する。「カリスマ」の問題が「非合理性」という一つの合理性類型であるのと同じく、「非合理主義」もまた一つの「合理主義」類型であることは再度強調するまでもない。ウェーバーは「カリスマ」崇拝者であることも、官僚制に代表される「合理主義」信奉者であることも、研究の次元では拒否するのである。「合理主義」と「非合理主義」はここで研究者の世界観であることをやめて、純然たる研究対象となった。これはフッサールが開始した現象学の発想と共通するものである。そして「近代合理主義」をめぐる「合理主義」と「非合理主義」の対立も経験科学的な検討の対象とされるにいたる。研究方法の合理性やあるいは客観性が、はたしてウェーバーが考えたように可能なものなのかどうかは問題があるところである。それでもなお特定の意味での一元的な合理主義だけを合理性とみなす合理主義という世界観をになった研究者と、ウェーバーの間の距離はすでに明らかである。

この結果、「合理主義」と呼ばれたものの非合理的性格や、「非合理主義」と呼ばれたものの独自の「合理性」が、それまでよりも摩擦少なく、遥かになめらかに議論できるようになる。合理主義者の議論では、合理主義自体がもたらした意図せざる非合理的帰結が、あたかも沈痛な「運命」であるかのように論じられる。「合理主義」の成果であるはずの産業社会と官僚制が、ナチズムに代表される「非合理主義」を助長してしまった、これはルカーチやアドルノの基本的立場をなすパラドックスである。1904年のウェーバーの立場も基本的にはそのように理解できるはずである。当時のウェーバーの眼前には、産業社会化の矛盾を一身に背負わされた労働者の姿があった。これに対して、晩年のウェーバーの場合、そのような問題意識は弱められている。この時点のウェーバーにとって、「合理性」とはあくまでも当事者の「価値」意識の問題であって、普遍妥当的で実体的な「合理性」などは問題になっていないのである。この結果、上記のパラドックスも異なる種類の当事者の意識の間の対立へと解消してしまう。理由がいかなるものであるにせよ、晩年のウェーバーは以前とは異なった関心（と無関心）に移動していく。そもそもこのような関心の変化は、当人にも十分に把握できていたかどうか判断することができない。

これが晩年にウェーバーが向かった「社会学」の立場である。この「社会学」は近代合理主義の伝統からも、さらには歴史主義や歴史哲学の伝統からも距離をとった独自の位置であるといわなければならない。このように考えていくことによって、よく知られた「ウェーバー理論」、すなわち先に引用したシュッツやハーバマスという理論体系に別様の解釈、言うならば思想史的な解釈を与えることができるのである。

例えば自明のこととして受け入れられてきたウェーバーの「合理性」や「類型論」、種々の行為類型論、支配類型論は、それらを晩年のウェーバーの立場として、それ以前の当人の立場から区別し、比較対照することで新たな理解の可能性を呼び込むことが可能になる。これらはこれまでしばしばばらばらの部品として、解釈者の「理論」の補強物として使用されてきた。合理性類型論は「類型論」として意義を問われるよりも、より精密な合理性概念の増加として、それまでの「合理主義」の補強材として扱われてきた。社会学で展開されてきたさまざまな「行為論」はその代表である。

また支配類型論は、より望ましい「支配」(統治)を弁別するための手段として利用されてきた。「カリスマ支配」と「官僚支配」の間の優劣を論じる政治学の議論はその典型である。それらはそれぞれに独自の意義を持っている。しかし共通して「類型論」そのものの性質を棚上げにして議論を進めているのである。晩年の類型論者ウェーバーにとって、それぞれの類型の内容は、あくまでも併記されるべき対象であって、特別に肩入れするべき「価値判断」ではないのである。

あえて曖昧な言い方を許されるならば、ここにウェーバーの「社会学」に独特の一種乾いた肌合いのようなものが現れてくる。乾いた肌合いとは、事象に対する醒めた態度と言い換えることもできる。それはウェーバーの同時代人がウェーバーに期待した性格とは別の相貌であるといわなければならない。ヤスパースやトレルチは、ウェーバーを追悼する文章で、燃えたぎる熱い政治家としてのマックス・ウェーバーを称揚したが、晩年のウェーバーの「社会学」にそのような熱は感じられない。われわれが先に見てきたトレルチの文章が暗示しているように、晩年のウェーバーは別の関心に移動してしまったのである。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の共同研究者であったトレルチとの学問的離別は、専門家トレルチからのディレクタント理論家ウェーバーの離反と捉えることができる。同時にそれは神学者トレルチと宗教社会学者ウェーバーの距離化としてもとらえることができる。晩年のウェーバーが向かっていく方向には、「世俗化」、あるいは「世界の脱魔術化 (Entzauberung der Welt)」が控えている。われわれは『プロテスタンティズムの倫理』論文の異同を検討した第2章で、1920年の同論文のテキストが、「合理性」の類型論と直接的につながる補足を含んでいることを指摘してきた。1904年に禁欲的プロテスタンティズムの普遍史的意義を強調したウェーバーは、生涯の最後の十年間に禁欲的プロテスタンティズムそのものが呪力を喪失していく過程を論じるようになる。1904年のウェーバーにとって「禁欲的プロテスタンティズム」こそは「合理的」宗教の最たるものであった。この過程はまさに「合理性」の相対化、「脱魔術化」である。それはウェーバー自身の「世俗化」「脱魔術化」の過程であったとみなすことができる。普遍史的な問題としての「世界の脱魔術化」は、ウェー

バーによれば特定の社会秩序の体系（システム）から特定の新たな体系への進歩や前進などではなくて、普遍的な主知化と、さまざまな意味での「合理化」同士の間の闘争の帰結でしかない。特定の「合理化」が勝利し、それ以外の「合理性」を追い落とし、「非合理」へと追い込んでいく過程が、ウェーバーの「普遍史」として浮上してくるのである。それが当人にとって痛みを伴うものであったのか否かということは、この場合どうでもよいことである。「厳密な歴史科学としての社会学」は、伝統的な歴史主義の諸前提を侵食し、それまでになかった学的探求に道を開くことになったのである。

ここではトレルチが毛嫌いしたジンメルへのウェーバーの接近という観点から晩年のウェーバーを論じてきた。晩年のウェーバーが到着した「合理性類型論」は、近代合理主義の前提を掘り崩していくという点で、かつてウェーバーが批判したフロイトの仕事と共通の意義を持っていたと言えるはずである。フロイトが合理主義的近代人の日常生活の背後に「無意識」や「エロス」の介在を指摘した一方で、ウェーバーは近代人が信じて疑わなかった「合理性」を、互いに対立し合うこともありうる「類型」として類別した。しかも合理性類型論の傍らにあるのは、周知のように「支配」の問題であり、「支配」という関係を維持していこうとする人間の「合理化」への欲求であった。支配者は己の「支配」を、正当な手続きによるもの（合法的支配）や、長年にわたる継続（伝統的支配）や、かけがえのない特別な恩寵によるもの（カリスマ的支配）として被支配者に印象づけること（合理化すること）に熱中してきた。ウェーバーが明らかにしたのは、「近代合理主義」が「合理的」なものとしてひたすら弁護してきた現実の「支配」関係であったということもできよう。しかし、ウェーバーが提示した問題ははるかに広範な対象を包含している。晩年に向かっていくウェーバーの議論はフロイトがある種独断的な手法で取り組んだ事業に、厳密な概念批判によって自分自身の過去の仕事をも掘り崩す形で取り組んでいたと考えることができるのである。当事者の意図がどのようなものであるにせよ、彼らが共通して取り組んでいた事業が結果としてもたらしたものは重大な変革であった。なぜならば、人間がそれによって学的に思考する基盤そのものを、彼らは問い直そうとしはじめたからである。

われわれはこの章でマックス・ウェーバーが研究対象としての合理性と研究そのものの合理性を区別していたことを指摘してきた。もちろんこの判断は当人の明確な発言に基づいているわけではない。ウェーバー自身の書いたテキストを照合した結果、事実としてそうなっているだけである。つまり一方で厳密な、合理的な研究方法を模索しておきながら、他方では合理的でありうることの多元性を強調している。しかし、そんなことがほんとうに可能なのだろうか。もちろんこの研究でやってきたように、両方のウェーバーを矛盾としてではなくて、変化として捉えることも不可能ではない。二十世紀初頭に方法論論文を書いていた頃のウェーバーと、晩年の合理性類型論者ウェーバーとは変化しているのだと考えればよいのである。ところが、問題が「合理性」であるかぎりにおいては状況は困難になる。この問題は学問的な議論そのものの基盤に関係しているからである。晩年のテキストを読んでも、ウェーバーはやはり合理性類型論を合理的に論じうると考えているようにしか思われない。

合理性の多元性を研究する研究者（ウェーバー）の方法の合理性は一元的なままなのである。ウェーバーはここで重大な分岐点に立っていた。一方の道は多元的な合理性を多元的な合理性によって扱う方向、すなわちポスト・モダニズムの果てしない原野につながっている。もう一つの道は近代合理主義を再興する論理を何とかして取り戻そうとする人々の世界である。後者の例としてカール・ポパーやユルゲン・ハーバマスといった名前を挙げれば十分であろう。肝心のウェーバー自身はこの分岐点に行き着いたまま没したのかもしれない。ポスト・モダニズムに向かうにはウェーバーはあまりにも近代主義者であったし、近代の再興を探求するには懐疑的でありすぎた。ここに一つの思考様式の極点と終焉が暗示されているのかもしれない。

結 論

マックス・ウェーバーという人物の動きを観察していくことで、われわれは同時に十九世紀の終末から二十世紀の前半にかけての歴史科学の動態に直面してきた。ここで掲げた「歴史科学」とは、それ自体としては抽象

的な概念でしかなく、目で見たり、手で触れたりできる実体ではない。具体的な事例を取り扱うことに出発した歴史科学も、学問としての位置付けには抽象的な概念の手助けを必要とする。ところが、抽象的な概念の世界に一旦入っていくと、今度は他の領域の学問と共通の地平で学問としての有効性を問われることになる。気鋭の若手社会研究家として出発したマックス・ウェーバーが、特定の地域や、特定の人々についての研究からはみ出して、ヨーロッパ古代社会の問題に向かい、それどころか非ヨーロッパ世界の普遍史的比較研究にまで考察の幅を広げる。従来の歴史主義が陥りつつあった困難や、同時代の人々による旧来の歴史科学への批判が、その過程で視野に入ってくる。結果は理解しやすい。具体的な人物や集団が具体的に何をした、その結果具体的にどんな現象が起こったのか、といった問題から、抽象的な社会単位が抽象的な社会変動を経験し、抽象的な帰結を迎えるといった理論問題への移行に、いやでも直面せざるをえなくなる。「社会学」という新事業の開始には、普遍史をめぐる旧来の事業の困難な状態が先行していた。

これまでの研究の蓄積に対して、この研究が有意義な貢献を行うことができるとするならば、それはマックス・ウェーバーの思考の変化そのものを明らかにすることにあつた。従来の研究は、生涯にわたるウェーバーの「真意」を明らかにしようとする暗黙の前提に従ってきた。これは不自然な約束事であった。そもそも、死後八十年を経てもその独創性を賞賛され続けているような人物が、その生涯の最も多産な時期に、二十年間にもわたって同一不変の「真意」を保ち続けていた、と考えることは不自然である。「独創性」という言葉を字義通りに受け取るならば、当初の立場や特定研究者集団の見解を死守していく頑迷さよりも、関心の赴くままに自由に研究領域を広げ、立場を変えていく柔軟さの方が、はるかに相応しいのではなかろうか。

これに対して、多段階の「変化」を考察に入れるならば、理解がはるかに容易になるのではずである。先にみてきたように、マックス・ウェーバーの初期のテキストに触れる人々は、何とかして後年の方法論や政治論、近代論のテキストの「萌芽」を見つけだそうとしてきた。例えば、ヴォルフガング・モムゼンをはじめとする人々は、初期の労働問題研究に、後

年の政治論や社会民主党との関係へのつながりを読み取ろうとした。さらに、安藤英治などは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の厳密な検討によって、論争を経てもなお当初の意図を守り通したウェーバーの強固な論点を明らかにしようとした。もちろん、これらの先行研究を全面的に否定することなどはできない。これらの観点から考察する場合にも、十分と思われる根拠があるからである。これに対して、この研究にとって重要なのは、先行する研究とは違った観点からこの人の動きを観察することにあった。

この過程で重視してきたのが、ウェーバーの「二度目の変化」という視点である⁽¹⁾。それは特定の日付を期して起こった変化を指摘することではなくて、マックス・ウェーバーが善世紀末に発病した病気から再起した時点より最晩年までの間に、もう一度の変化を想定しようとするものであった。

第1節 孤独な軌道修正

変化の結果生じてきた晩年のウェーバーの歴史科学は、同様の問題に取り組んでいるような外貌を保っておりながら、別の観点から観ると著しく異なっている。それは自らの育ってきた文化環境が共有してきた「価値判断」と袂を分かち、新たな観点を導入し、同時に別の特定の文化に対しても心情的な共感を持たない立場である。ウェーバーの手にあるのは、「理想型」として構成された「概念」であり、それは特定の概念に対する価値判断を含んでいるわけではない、とされる。少なくとも、1904年以降のウェーバーは価値自由な理想型を掲げ、他者の研究を声高に批判し、その反面で己の仕事に対しても密かな修正を続けていく。その過程で多数の敵

(1) 折原浩もまた二度目の変化を視野に入れている。折原の場合も、第一回目の変化は、精神疾患をはさんだ1904年以前に起こっているとする。ただし二度目の変化は、1913年頃に「理解社会学のカテゴリー」論文を『ロゴス』誌に発表することによってであるとする。折原は三つの時期を、「歴史家時代」「社会学への接近時代——歴史と理論的方法的統合を求めて」「限定的社会学時代——包括的文化史への展望のもとに」と呼ぶ。折原浩「マックス・ウェーバー(1864-1920)における歴史と社会学」(報告原稿、未発表)

対者や批判対象が登場し、新しい問題や関心がつけ加えられる。晩年のウェーバーのテキストでは、多様な問題が、互いに比較されることを第一の目的として比較される。ウェーバーは西洋中心主義者の見解から距離を置く一方で、厳格な類型論を手にはアジア宗教の諸類型に向かっていく。

それは乾いた比較文化論である。ウェーバーはもはや中国人を蔑視しているわけではない。他文化に対する蔑視そのものが、すべてではないにせよ、次第に関心から出ていこうとしているのである。宗教的情熱や社会的正義感に駆り立てられて労働問題を研究し、ピューリタンの宗教倫理と近代化の「親和性」を熱心に論じていた頃のウェーバーと、1911年ごろから『経済と社会』の伶俐な概念構成を延々と書き連ねていくウェーバーの違いはどこからきたのだろうか。もちろん当人はこのことを公言するわけでも、手紙のような私的な場で告白しているわけでもない。しかし、その原因をどこに帰するにせよ、二人のマックス・ウェーバーの違いは驚くほどである。

この相違を、第一次世界大戦に帰することは簡単である。同時代人によって、しばしば「熱狂に始まり絶望に終わった」と表現される同大戦に、徹底した愛国者ウェーバーも教職を離れ、前線ではないにせよ従軍した。この大戦はこの人物にとっても大きな転機となったはずである。しかも、ウェーバーはヴェルサイユ講和会議やワイマール憲法起草にも参与している。誰もを巻き込んだ開戦の熱狂は、敗戦の絶望へと変わっていく。シュテファン・ツヴァイクが『昨日の世界』（1944）で印象的な筆致で描いて見せたように、1914年以前のヨーロッパ世界が、1918年以降には全く別物になってしまったからである。そこからマックス・ウェーバーの変化を説明することは難しくない。また、おそらく誰もそれを否定することはできないであろう。時代は、オズヴァルト・シュペングラーが『西洋の没落』で、西洋中心の普遍史の破産を嘆いた頃と一致する。しかし、このような説明はすべてを説明し尽くすと同時に、何も説明していない。大戦は個人の動態を説明するには、あまりにも巨大な事件だからである。

ここに、還元主義的な時代背景論の落とし穴がある。それでは、なぜウェーバーがシュペングラーと同じ議論をしなかったのか。さらには、シュペングラーを含めた同時代の歴史科学が、それでもなお西洋中心主義

的な前提に固執している反面で、ウェーバーがなぜ比較文化論的な普遍史に向かったのか。このように問いを連鎖させていくと、次第にウェーバーという歴史科学者が行った独自の貢献が際立ってくる。そもそも『経済と社会』の醒めた概念構成の中で、古い方の部分（現行版の第二部）は、すでに第一次世界大戦以前に成立しているのである。つまり、ウェーバーの場合同時期の変化を戦争だけに帰することには、無理があるといわなければならないのである。

マックス・ウェーバーの変化は、恐らく孤独な苦闘の連続として理解することができるだろう。一方に、旧来の権威者に対する柔順な適応と、その反面の苛烈な攻撃があり、他方に、過去の自分の仕事に対する反省がある。ウェーバーは以前の自分の誤りを公言するような人物ではなかった。このため、後の読者の前に確固としたテキストとして存在するのは、己の一貫性を獅子吼するマックス・ウェーバーである。当人が自信をもった表情で請け合う一貫性から、後の解釈者はなかなか自由になることができない。ところが、本人の主張を生かそうとすればするほど、「マックス・ウェーバー論」は難解な解釈に向かわざるをえなくなる。しかし、ここで明らかにしてきたように、自信満々といった表情で発言するウェーバーのテキストが、時間を経るにつれて大幅な変化をみせるのもまた事実である。密かな、あるいは妻にすらの確には把握できない孤独な軌道修正がここにあった。

それを世紀転換期の歴史科学の苦闘と重ね合わせて理解しようとするとは、あるいはマックス・ウェーバーという人格に対する過度な尊重なのかもしれない。この孤独な人物は同時代の常識との間で微妙なやり取りをしながら、たえず動いていた。この動きがマックス・ウェーバーにおける歴史科学の展開を考える上でのわれわれの出発点であると同時に終着点でもある。それはこの人物をめぐる一つの循環過程でもあった。

第2節 職業としての学問ということ

本稿の考察を終えるに当たって、再度言及しておかなければならないテキストがある。晩年の二つの講演、『職業としての学問』（1917/1919）と『職業としての政治』（1919）のことである。われわれの考察はマックス・

ウェーバーの変化を中心にして進行してきた。変化をはさんで二人のウェーバーに引き裂かれる形になっていたのが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』であった。晩年の二講演は、まさしく二度目の変化を経た晩年のウェーバーの立場を物語っているはずである。

栄光に満ちたヨーロッパ文明がこれまでにない挫折を経験し、同時にウェーバーが若いときから表明してきたドイツ・ナショナリズムの信念も手痛い打撃を受けた。教壇では「職業としての学問」の分別を失ったにわか預言者が絶叫し、巷には「職業としての政治」に相応しい責任倫理とは無縁の武器を手にした「革命家」の心情倫理が充満していた。第一次世界大戦直後の状況では、ウェーバーが熱心に探求した厳密な科学など、ほとんど無意味にしてしまうような現実生活の嵐が吹き荒れていたのである。若手国民経済学者としてナショナリズム的主張を振りかざしていたマックス・ウェーバーも、五十代の壮年期に入っていた。ただし、この人物の生涯は1920年に突然終わる。

後に残されたのは、『経済と社会』と名づけられた膨大な未完の遺稿である。すでに言及してきたこのテキストは、まさにわれわれが論じてきたマックス・ウェーバーの二度目の変化、あるいは移行の時期に、間隔を置いて成立したものである(1911-13, 1918-20)⁽²⁾。とりわけ最後期のテキストはウェーバーの最終的な立場を示しているはずである。妻マリアンネと編集者ヨハネス・ヴィンケルマンの手でかなり恣意的な形の編集を施されて刊行されてきたこの膨大な遺稿をいかにして編集し直すのかという問題は、今日でもなお議論されている⁽³⁾。進行中のマックス・ウェーバー全

(2) Johannes Winckelmann, Vorwort zur vierten Auflage, in: Max Weber, WuG, 5. Aufl, Tübingen 1972, S. XXV.

(3) この問題に集中的に取り組んできたのが折原浩である。膨大な遺稿『経済と社会』は、妻のマリアンネとヴィンケルマンの手を経て編集されてきた。編集の過程で便宜的に行われた全体の約二割を占める概念編 (Soziologische Kategorienlehre) と八割強の応用編 (Die Wirtschaft und die gesellschaftliche Ordnungen und Machete) からなる「二部構成」は、結果として読者に編集者の恣意に沿った読み方を強要してきた。つまり第一部の立場の応用が第二部であるというわけである。ところが遺稿の執筆順序から言えば、実は第一部の方が後になり、上記のような「二部構成」関係は著者によって意図され

集の当該巻の刊行は、その一つの結論となることを期待されている。

ところが肝心の『経済と社会』そのものは、同時期のほかのテキストに比して集中的な検討を経てきたとは言いがたい。しかも母国語として読むことができるドイツ語圏の研究者ですら、この巨大なテキストの大半の部分を事実上放置してきた。この本の大部分を成す延々と続いていく概念規定とその説明は、外見の上でいま一つ魅力に乏しいところがある。しかし、目を転じて二度目の移行期間そのものを示すテキストとして検討するならば、別様の関心がわいてくることになる。なぜウェーバーはこれほど巨大な概念規定を構想する必要に直面したのか。

われわれが見てきたように、実地研究の国民経済学者は、宗教生活の在り方を研究する過程で次第に普遍史的な諸問題に関心を移動させ、さらに今度は巨大な類型論に行き着く。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の新旧テキストの異同に見られた緊張をふまえて『経済と社会』の膨大な概念規定に目を転じると、移行後のウェーバーの特性が際立ってくる。例えば、『プロテスタンティズムの倫理』で見え隠れしていた特定の宗教への肩入れは、『経済と社会』の中の『宗教社会学』（『宗教的共同体関係の諸類型』）では完全に取り去られる。その冒頭では次のように書いている。

「われわれは宗教の『本質』ではなくて、特定の種類の共同体的行為の諸条件や諸作用について論じるのである。……」⁽⁴⁾

ここで「宗教」は、人々を特殊な（経済）行為へと導く倫理的な力ではなくて、人々を動員して特定の行為・行動に向かわせていく一つの作用因になっている。作用因はこの場合他のものでいくらかでも代替可能である。人間にとってかけがえのないものとしての信仰は、「共同体行為」の、他にいくらかでも考えうる作用因の一類型となる。これは『プロテスタンティズムの倫理』の初稿とは明らかに異なった立場である。特定の行為、すなわち

ていない。折原の表現を借りれば、未完のトルソに不釣り合いな頭を据え付ける過ちが続けられてきたのである（折原浩『ウェーバー「経済と社会」の再構成——トルソの頭』、東京大学出版会1996年）。

(4) Weber, WuG, S. 245.

「共同体行為」とは、この時期のウェーバーにとって、主に「支配（Herrschaft）」であった。『経済と社会』の多くの頁が「支配」に費やされていることは注目すべき事実である。あえて言えば、この遺稿は徹頭徹尾「支配の類型学」として構想されている。支配にとって、その作用因は「宗教」でも、合法的な「行政」でも、カリスマ的な非合理的帰依でも、伝統的な世襲・血縁による秩序でも、支配を達成する要因として等価である。他方でウェーバーは『経済と社会』の執筆と同時期の1917年に公刊された論文「社会学・経済学における『価値自由』の意味」で次のように書いていた。

「……さらに、特定の倫理的ないし宗教的な信念の事実上の存在が経済生活に及ぼした因果的な影響を研究し、場合によってはこの影響を大きく見積もることがあるとしても、だからといって、研究者がその倫理的ないし宗教的信念を、それが因果的にたぶんきわめて強力に作用したという理由から、自分もこれを共有しなければならぬとか、共有しないまでも「価値多い」とみなすくらいはしなければならぬとか、そういうことにはよもやなるまい。逆もまた真なり。ある倫理的ないし宗教的な現象のもつ高い価値を肯定することは、そうした価値の実現がもたらした——またはもたらすであろう——意想外の決壊に対してまで、その価値の肯定と同じくらい賛辞を呈さねばならぬというということを少しも意味しない。」⁽⁵⁾

晩年のマックス・ウェーバーが行き着いた立場は、何よりもまず『職業としての学問』が物語っている。この頃のウェーバーにとっては、「学問」も、「宗教」がそうであるのと同じく、それ自体としてかけがえのないものではなくなくなってしまっている。姉妹編の『職業としての政治』が支配する人々の責任（倫理）について語っていたとするならば、『職業としての学問』は個別化された「専門家（Fachman）」⁽⁶⁾として社会秩序の中で支配されていく人間の生き方について語る。「学問自体のため」⁽⁷⁾に学問に携わるのは、とりもなおさず特定の領域だけに知識を持った人間となることである。ウェーバー自身が、そのような専門家としての生き方に一貫していたのかどうかは、もちろん疑わしい。事実を離れてあえて解釈を加えるならば、晩年にいたるウェーバーの事業は、専門家としての運命に抗して続けられ

(5) Weber, WL, S. 502 = 中村訳 314 頁。

(6) Weber, WL, S. 592.

(7) Weber, WL, S. 593.

ていたと言えるのかもしれない。

このことが最も明らかなのは、『職業としての学問』の芸術と学問とを対比する有名な部分である。

「さて、学問上の仕事と芸術家のそれとは、右の点〔承前：世俗的な利害を排して献身的に仕事に打ち込むこと〕では共通な条件のもとにおかれているわけであるが、それにひきかえ、両者がまったくちがったさだめをもっているところが一つある。それは、学問上の仕事にはたえず進歩がともなう、という事実である。これに反して、芸術の領域では、そういう意味での進歩というものはない。……」⁽⁸⁾

芸術は進歩しないという事実に対して、学問の宿命は常に進歩していかなければならないことにある。学問はどこまでいっても未完成であり、職業としてそれに従事する人々はやがて超えられるべき仕事に延々と従事していかなければならない。

レオナルド・ダ・ビンチに象徴されるような、ルネサンス時代にみられた万能の完全人という理想は、近代の「専門人」という現実に取り替えられる。ここに、われわれが検討してきた伝統的歴史主義の挫折を重ね合わせることができよう。偉大な個人の人格への礼賛が、偉大とは言えない生き方によってしか実現できなくなる。支配者の生涯を調べる事業が、実は巨大な体制の中で支配されることを意味し始める。近代人にとって昔の全き人間への通路は、宗教や芸術という回路だけである。芸術の世界で一旦実現された「完全な人間」は、もはや古くならないし、進歩する必要もない。晩年のウェーバーは宗教の社会的作用について論じたが、宗教の「本質」はこれとは異なって、学問的な分析の範囲の外にある。宗教家は本質の点で専門家である必要がない。宗教家や芸術家とは違って、専門分化していく学問人の生は、常に断片であり、後からやってくる進歩によって次第に色褪せ、無意味化していく。無限に進歩していく学問の傍らで、人間には生きられる時間が限られている。自然科学に代表される専門科学がますます発達していく他方で、それらに対抗するもの、とりわけ芸術の独自性が表面に出てくるのである。

(8) Weber, WL, S. 592 = 出口勇蔵訳『宗教・社会論集』、河出書房 1968 年、370 頁。

第3節 展開していく歴史科学

この研究では歴史科学を、「人間の生活と社会の動態を時間の流れという系で理解しようとする科学」と規定してきた。それぞれの歴史科学に共通の関心は、動態の結果生じてきた時間的な差異に対していかなる意味付けを与えるのかということにあった。われわれの研究はマックス・ウェーバーによる歴史科学の展開と同時に、ウェーバー自身の歴史科学的研究をも意図してきた。すなわちそれは、ウェーバー自身が、どのような対象を選択し、どのような方法を用い、どのような意味付けを与えたのかということそのものの動態を観察することであった。しかも、その動態がこの人物自身によって開始された歴史科学の展開をも意味したのである。問題になっている二重の展開は、合わせ鏡のように何重にも重なり合った循環関係を成しており、誰が何時、何をしたという形での把握を困難にする。

ただし、この循環の中から出てきたマックス・ウェーバー自身の事業は、否定することのできない重大な刻印を歴史科学の展開に残すことになった。その中で最大のものは、恐らく「社会学」という新事業を歴史科学の展開の中にしっかりと位置付けたことにあるだろう。われわれはこの人が残した「社会学」から、高度に抽象的な「社会理論」に向かうこともできるのと同じように、それまでになかった斬新な「歴史学」に向かうこともできる。「岐路」という言葉を用いることが許されるならば、これは大都市の中央部に据えられたロータリーのような岐路である。ロータリーは循環しながらそれぞれの道につながっている。

われわれはマックス・ウェーバーの事業を通して十八・十九世紀から今世紀、二十世紀の最初の数十年に至るまでの歴史科学の動きを観察してきた。もちろんマックス・ウェーバーという特定の人格の、いうならば「針穴」を通して広大な視界の一片を切り取ったものであるに過ぎない。同じく針穴として、カメラのレンズが、恣意的に対象を切り取り、特定の被写体に焦点を合わせ、それ以外をぼやけた映像として放置するように、われわれの視点も大半の、ほとんど「すべて」ともいうべき問題を放り出してきた。そもそも新しく刊行されつつある『マックス・ウェーバー全集』ですら、完結して横に並べれば十メートルに及ぶ分量を誇ることになるはず

である。「歴史科学」というレンズの信憑性がどの程度であるのかは容易に想像できよう。

ただし最後にここまで行ってきた研究の感慨のようなものを書かせていただければ、「今世紀」——二十世紀——の最後に至った今、この世紀の初頭に生きていた人々の驚くべき創造力には、今さらながら感嘆させられる他はない。シュモラーとメンガーの間で苦闘することから始まったウェーバーの研究生活は、マルクスの余りにも偉大な遺産と格闘し、トレルチやナウマン、リッカートといった盟友を得て進展、フロイトとの対決を経て、ジンメルが始めた「社会学」という新事業に新規参入してさらに新しい展開を迎える。傍らにはフッサール、マイネッケがおり、後にはマンハイム、ルカーチ、シュッツ、ポパーが続いていく。まさに綺羅星のごとき人員を動員した大事業である。二十世紀後半の社会科学の展開は、全面的にこれらの人々の遺産を基にして成り立っている。ドイツ観念論、マルクス主義、歴史主義、実証主義、それに続く「社会学」「現象学」、そして知識社会学。われわれの時代は「偉大さ」という概念を放逐する方向に向かっているが、ここには確かにかけがえのない「偉大さ」の痕跡が現れている。

統一的な原理から事象を把握しようとするのと、事象の多様性や豊かさそのものを理解することとの対立が、実証主義と歴史主義の対立の根幹であるならば、マックス・ウェーバーの仕事は、これらの偉大な人格同士の間での熱い対立を、安易に調停し折衷することではなくて、対立そのものの多様性を感じ得ることにあつた。その過程で現れ出てきたウェーバー自身の変動や移動は、当人の意図とは別に、結果として彼が生きた時代の豊かさを誇示することとなった。「類型論」という方策は、結果として多様性の窓口として機能する。ウェーバーの考え出した方法が、その後の展開でどのような成果をもたらすにせよ、彼が変化していく過程で取り組んだ時代の豊かさは、われわれの前に残されたテキストにはっきりと刻印されているのである。

われわれは序論で、「形式」と「内容」の間の循環関係について言及してきたが、晩年のウェーバーの「形式」としての類型論は、「内容」としての「合理性」や「倫理」の多元化、相対化、類型化を必然的にもたらしていた。

しかも「内容」としての多元化, 相対化, 類型化は, 時間の経過にともなって, ウェーバーの方法をますます類型論に一元化していく。ウェーバー自身も確かに循環しているのである。

エピローグ：一つの思考様式の極点と終焉

歴史学派国民経済学から社会学へと向かっていくマックス・ウェーバーの歴史科学は, 自らの中の循環を繰り返しながら, 出発点からの設定を極限まで推し進めていく。出発点にあった設定とは, 近代主義的主体への信念そのもののことである。ウェーバーの研究生活における歴史学派国民経済学から社会学への動きは, 同時に近代主義的な主体としての研究者のあり方を克明に物語っていた。

「社会学」という名前の新事業が, 広範な歴史科学の領野から登場し, 多くの野心的取り組みに乗り出していく様子は, 二十世紀の学問史に特筆されるべき事件である。社会学は前世紀に哲学, とりわけ歴史哲学が占めた位置を継承し, あらゆる問題をすべて包括しようとする事業として始まった。十九世紀中盤のオーギュスト・コントは, 現実的で実用的で法則的な実証科学としての「社会学」を, 命名, 提唱し, 社会学をあらゆる学問の包括者として位置付けようとした。「社会学」に従事する社会学者は, すべての知を統御する特権者としての地位を約束されているはずであった。

ただし, フランスのコント社会学とウェーバーのそれとは大幅に異なった印象を与える。コントが掲げた「実証科学」としての社会学は, あらゆる研究対象が同一の方法によって研究できるし, そうすべきであるという信念に基づいている。ここに物理学に代表されるような自然科学と人間の社会を対象とする科学との間の相違は否定される。これに対して, 二十世紀初頭にドイツで開始された「社会学」は, 自然科学と歴史科学との相違に出発していた。さらにいえば, 「社会学」という新事業は, われわれがすでに繰り返し論じてきたように, ドイツでは歴史科学(歴史主義的科学)

の新事業として始まっている。新しい事業が開始されることは、旧来の事業が、途端に途絶するというわけではないにせよ、徐々に人々の関心から遠ざかっていくことを暗示する。

この過程は、マックス・ウェーバー自身の動きの中にも見て取れる。われわれはこの研究の冒頭に、「ウェーバーの方法をウェーバー自身の言説に当てはめること」を最大の課題として掲げてきた。それはここまでのわれわれの議論を踏まえていうならば、ウェーバーはウェーバーをいかに「理解」するのかと、言い換えても差し支えない。理解社会学はどうやってウェーバーという現象を理解するのか。『理解社会学のカテゴリー』(1913)は、

「人間の（「外的」あるいは「内的」）行動（Verhalten）は、あらゆる出来事と同じように、その経過のうちに連関や規則性を示す。しかし少なくとも完全な意味で人間の行動のみに固有なのは、そこに、その経緯が理解できるかたちで解明しうるような連関や規則性があることである。解明（Deutung）によって得られた人間の行動の「理解（Verstandnis）」は、さしあたり、極めてさまざまな大きさと質をもった特有の「明証性（Evidenz）」を備えている。しかしある解明がこの明証性を特に高度に備えているからといって、そのこと自体は、まだその解明の経験的な妥当性を少しも証明するものではない。というのも、外的な経緯や結末において同一の行動が、極めて異なった動機の布置連関（Konstellationen）から生み出されることもありうるのであって、それらの中で理解の明証性が最も高いものが、つねに現実にも作用していたとは限らないからである。むしろ、いかに明証的な解明といえども、それが妥当性を伴う「理解による説明（verständliche Erklärung）」といえるためには、当の連関の「理解」はさらに、他の場合でも常に用いられる因果帰属という方法によってつねにできるだけコントロールされねばならない。」⁽¹⁾

それでは、同じ「人間」であるマックス・ウェーバー自身の「外的、内的行動」は、その経過のうちにいかなる「連関や規則性」を示すのだろうか。ウェーバーの行動はどのように解明され、理解され、いかなる特有の明証性を備えているのだろうか。この歴史科学者の行動がいかなる独自の布置連関によって、他者の行動と「外的な経緯や結末において同一の行動」で

(1) Weber, WL, S. 427f., 海老原明夫・中野敏男訳『理解社会学のカテゴリー』, 未来社 1990 年 9-10 頁

ありながらも、独自の意味を持ち、それはいかにして「理解による説明」を与えられるのか。ウェーバーの行動の「理解」を常に因果帰属という方法によってコントロールするには、どうしたらよいのか。自分が「社会学」に取り組んでいると明言し始めた記念碑的論文で書いていることを、自分自身に当てはめることを、果たしてウェーバーは考えていたのだろうか。

ここに重要な問題が出てくる。研究対象を一方向的に研究し、説明したり理解したりする研究者の主体、すなわち近代主義的主体とは、いったいいかなるものなのかという問題である。コントが自明視した近代的主体の特権が、別の形再度で登場するのである。周知のようにウェーバーは独立した主体の「行為」を、「社会学」の出発点に据えた。独立した主体とは、当然の事ながら研究者の主体でもなければならない。この意味で、ウェーバーの「社会学」は、研究者と対象との、それぞれに独立した主体間の理解関係の学であるといえる。これは特定の主体が他者の行為の「意味」を思索し、「理解」しようとする現場を暗示する。特定の人物による特定の行為は、果たしていかなる意味を持っていたと理解できるのか……。コントにおいては独立した特権的研究者と対象としての「社会」が対置されていたが、ウェーバーにおいては研究者の主体と研究対象の主体とが事実上対等に対置される。いうまでもなく、この視点自体は、われわれが検討してきた古典的な種類の歴史主義による人物中心史、伝記研究の視点と変わるところがないものである。ウェーバーの、ある種の古風な性質をここに見出すことは簡単である⁽²⁾。しかし、この人は古風な視点を古風な方法に閉

(2) ここにマックス・ウェーバーとゲオルク・ジンメルとの分岐点があることを忘れてはならない。ウェーバーは生涯変わることなく近代主義的主体の統一性（研究者の主体と研究対象となる主体の両方の統一性）を支持した。これに対してジンメルはすでに初期の『歴史哲学の諸問題』（1892）において、歴史的な主体の統一性という信念を「一つの根深い誤謬」と呼んでいる。ジンメルによれば、歴史哲学にとって最重要の課題の一つは、多元的な性質を持った歴史上の主体間の「相互関係（Wechselwirkung）」を明らかにすることである。Simmel, Die Probleme der Geschichtsphilosophie, in: Georg Simmel Gesamtausgabe, Bd. 2, Frankfurt a. M. 1989, S. 335ff.. もちろん「相互関係」とはジンメル社会学の最大のキーワードでもある。ジンメルの仕事の根幹には、ウェーバーに代表される人々がこだわりつづけた近代主義的主体の統一性や自立性を相対化しようとする発想がある。

じ込めることはしなかった。古い性質を保持しながらも、自分の事業そのものの動態が自分の立場自体を掘り崩していく過程を、むしろ観察すべきである。それは苦渋に満ちた模索を示唆する。

古い性質とは、もちろん、一人ですべてを操作する近代的主体という思考様式のことである。それは、十九世紀の「天才」物語が雄弁に語るように、傑出した人物を中心とした歴史観や社会観のことであった。これは、ウェーバー自身の人生観でもあり、またこれまでウェーバーを論じてきた研究者の自己同化・自己投入の過程であったはずである。近代主義的主体のさらなる昂進をウェーバーが念じ、後年の解釈者がそれに自己同化する。その結果ウェーバーをめぐる議論は近代主義者、近代主義的主体を推進する人々の真情吐露の場を提供してきた。

すべてを一人で操作する近代的主体という思考様式は、厳密な科学的前提ではなくて、あくまでも哲学的——宗教的、あるいはプロテスタント的——な信念である。これは反証されることもなければ、無効を宣言されることもない。ところが、信念は学問的な領域に適用されるときにも、論理的帰結に向かって前進していこうとする傾向をもっている。真摯な探求者ほどこの傾向が強い。しかも、万能の主体とはそれ自体として矛盾を孕んでいる。それを乗り越えるのは、他者の存在を拒否する極端な独我論だけである。はじめから実現不可能な「万能の主体」は、他者との関係において挫折する。複数の主体間の関係とは、まさに社会学の問題である。哲学的信念としての「主体」は、不可避に「社会」と直面せざるをえない。「社会学」という新事業をはじめたのは、近代主義的な主体である。このことは始祖コントの言説からも明白である。しかし、社会学は、個々の主体の自律性よりも「社会」という集合表象を科学的に価値が高い分析枠組みであると考えた。その結果社会学必然的に社会学者自身の主体をも相対化する。個々の社会学者の研究活動もまた社会現象である。それならば、社会学者の言説は当人が属する社会集団——研究者集団、大学、研究所——の相互関係によって変動していく現象であり、当人の主体が及ぼす作用（個人の自由）は、ごくごく微細な一変数に格下げされなければならないはずである。もしもそうならば、近代主義的主体の居場所はどこに確保できるのだろうか。

ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において問題にしたのは、近代的主体という一つの思考様式の精神史的、宗教的起源を探訪することではなかったのだろうか。哲学的、宗教的な性質を帯びた近代主義的主体という信念は、実証科学の対象として検討されるよりも、宗教史、あるいは宗教社会学的な検討の対象としてふさわしいのかもしれない。われわれがこの研究で問題にしてきたのは、「プロテスタンティズムの倫理」を論じるウェーバー自身の立場が、ウェーバーの方法論による批判に耐えられるのかということでもあった。時代の批判者としてのウェーバーは、自己言及させることで微妙な色合いの変化を含んだ動態として見えてきた。過程の中で浮上してきたのは、近代的主体の動きを観察するウェーバー自身の主体の動きであった。ウェーバー自身が、まさに近代的主体という理念に同化していたのである。一面では、意地の悪い揚げ足取りに見える方法も、しばらくの間続けていくと、重大な問題の所在に直面することになった。ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の動きには、近代主義的主体による近代主義的主体の成立への自己言及という、一種得がたい思考過程が随伴していたのである。それは鏡に映った自分の姿にジレンマを感じ驚嘆する過程と呼べるだろう。

ウェーバーが、自分もまた同化する形で探求した近代的主体は、ウェーバー自身の苦闘のなかで、当人も意図しなかった形で限界に突き当たってしまったのではなかったのだろうか。しかも、それを当人も解決することができなかったのではないか。この問題は、もちろんマックス・ウェーバーという個人を研究してきたわれわれの課題をはるかに超えるものである。個人の名前のもとに完結すべき問題と、個人を超えた問題とがここで衝突してしまう。しかし、この問題には単に放置してしまうことができないほどの重要性がある。肝心の衝突点はどこにあるのだろうか。

われわれが問題にするべき衝突点は、歴史科学の展開と一つの思考様式の終焉にある。近代主義的主体という発想がデカルトの名に帰せられる哲学的潮流を祖としながら、自然科学に芸術に社会科学に決定的な役割を果たしてきたことは否定することができない。「考える私」と「私の身体」とが区別できる存在であり、「私の身体」を含めた対象世界が、「考える私」の主体によって一方的にコントロール（支配）できるという近代主義的主

体への信念は、今日でも終焉を迎えるどころか、ますます大きな影響力を行使しつづけているように見える。

たとえば、実験室の科学者を範例とする近代主義的主体のあり方は、患者の肉体をコントロールしようとする医者にも、より性能の良い自動車を設計する技術者にも、無生物の素材（マテリアル）に生命を吹き込む芸術家——近代芸術のキーワードの一つは、神にも比すべき自律的創造者としての「天才」である——にも、理想社会の建設に向けて奉仕する革命家にも、経済成長をなんとか維持しようとする経済学者、経済官僚にも、子供の社会適応を促進しようとする教育者にも、囚人の社会復帰を成し遂げたい刑務官にも、そして、時代背景に起因する逆境に抗して独自の信仰を貫く宗教改革者にも、同様に共有されている。そして、大きな成果を挙げてきたし、将来も挙げつづけるはずである。

しかし近代主義的主体への信念は、ごくごく単純な論理的困難を内包している。すなわち、同様に自律的な主体、一方的に他者をコントロール（支配）する特権を持った主体が、複数存在していて、互いの利害が対立する事態に陥った場合には、どうしたらよいのかという困難である。ここに「権力」や「支配」の問題、さらには複数の主体が相互に関係し合う「社会」の問題が出現する。とりわけ晩年にいたっても近代主義的主体への信念を保持しようとしたマックス・ウェーバーの場合には、極端な形での解決が迫られる。人口に膾炙した「方法論的個人主義」の守護神として、ウェーバーはどうしても主体と主体との間の「支配」に言及せざるをえない。それが奇麗ごとではない人間の苦悩を科学として描き出す作業であるとしても、他者の主体を従属させることで己の意志を貫徹する主体のあり方——「支配」——を、論じるほかはないのである。もちろん「支配」は、「闘争」という契機を避けることができない。近代主義を守る神々は、どうしても闘争しなければならないのである。晩年に成立した遺稿『経済と社会』の最も多くの頁を占めているのが「支配」の問題であったことは重要であり、その意義を一層強調されるべきである。

さらにいうならば、「社会学」という新事業そのものの思想史上の意義——より正確には歴史科学の展開における意義——は、近代主義的な主体という信念そのものの形而上学的、当事者の意図とは別に、神話的性格を

暴き出したことにあるのかもしれない。特権的な主体に終始する世界観や歴史観に全面的な信頼を寄せているのならば、そもそも「社会学」などという新事業は無用の長物であるにすぎないはずである。このような当たり前のことをあえて強調しなければならないのは、ウェーバーの「社会学」が、「社会学」として特殊な性格をもっていたからである。

マックス・ウェーバーが、「個人」の行為に出発する社会学の個人主義的な方法（人口に膾炙した「方法論的個人主義」）を主唱したことは、常識であって、いまさら強調するまでもない。しかし、ひるがえってウェーバーがこのような方法を主唱せざるをえなかった理由がいかなるものだったのかは、真剣に問われてきたとは言いがたい。この研究でわれわれが常に念頭においてきたように、特定の人物による特定の言説を解釈する場合、当人が積極的に主張しようとした含意と、当人が主張せざるをえなかった含意とは、区別する必要がある。ウェーバーが「方法論的個人主義」を意図的に主張したとき、当人の念頭には、近代主義的な主体への意図的な加担があったはずである。ただし、われわれにとって興味深いのは、ウェーバーがそうせざるをえなかった状況の方である。

そもそも近代主義的な主体の意義を称揚したいだけならば、なぜ主体の作用を超えた「社会」を強調する社会学などという事業に、個人に出発することに固執するウェーバーが肩入れしなければならないのだろうか。近代主義的な独立主体のあり方を問題にするだけならば、古くからの歴史主義を再度展開させるか、あるいは同時代の哲学者とともに超越論的現象学や実存主義を探求すればよいはずである。歴史学派の国民経済学者が、なんでわざわざ「社会学」という新事業に手を貸さなければならなくなったのか。そもそも、ウェーバーについてしばしば教科書的に言及される「社会学における方法論的個人主義」というのは、一種の形容矛盾なのである。同時代のデュルケムのように個人の意図を超えた「社会」そのものから出発しないで、なぜそれが他ならぬ「社会学」なのか。これらの問いは、常識的に語られている通念を多少念入りに突き合わせてみれば、すぐにでも出てくる疑問ばかりである。ところが、多くの人々が問おうとしなかったのである。そこにはウェーバーの権威があった。

さらに周知の議論の中に分け入っていくならば、主体の行為を特徴付け

る「目的合理的行為」は、目的のために対象を最も合理的な方法によって操作することを指していたはずである。そうではない行為、つまり行為の結果を視野に入れない「価値合理的行為」や、過去からの反復を主眼とする「伝統的行為」、行為者の衝動のみに依拠する「感情的行為」は、近代主義的主体にとっても不可欠ではあるが、価値の低い行為類型と見なされなければならない。優れた近代主義的主体というものがあるとして、それを特徴付けるのは、間違いもなく、一貫した計算可能性に裏付けられた「目的合理人」としての存在である。目的合理人は自分の行為が目的に対して果たしうる効果を常に計算し、目的に対する合理性を念頭に行為する。

それは、同時に神の前に一人立つプロテスタントの理想でもある。「プロテスタント的近代」という概念でしばしば表現されるのは、宗教的倫理と近代社会の関係を結びつける一連の議論のことである。ウェーバーに代表される同時代の議論に出発した近代化論は、すでに多くの知見を積み上げてきた。研究の末尾にきてそれらについて詳しく論評することは、それほど意味のあることではない。ただし、われわれが序論で論じてきたことに立ちかえって、ごく単純化して分類するならば、どれも「ウェーバーの本意」の探求か、あるいは「ウェーバー理論」の援用に集中してきた。これこそがウェーバー近代論の真髄である、とする議論は、緻密な文献考証、膨大な引用によって大きな成果を挙げてきた。

ただしそこには弱点も隠されていた。書かれたテキストに著者の本意を探ろうとする方法は、比喩的にいうならば、離れたところに住む恋人からの手紙を読む態度に似ている。恋人の真意はいったいどこにあるのか。ただし、ここには困難が伴う。そもそも客観的で不動の真意などというものが、恋愛生活において自然なのだろうか。恋文を受け取った者の盲目的な愛情が、疑いを埋め合わせるとしても、それは愛情の発露であって、科学ではない。心変わりしていく恋人の心の動きは、その時その時で、やはり「真意」だったのではないのか。

しかし、視点を変えて、なぜウェーバーはよく知られている一連の議論をしたのか、あるいは、せざるをえなかったのか。これについては、ほとんど手がつけられてこなかった。さらに一連の議論の動態にウェーバー自身の方法——理解社会学——を当てはめる作業は、行われていない。その

理由は、ウェーバーの議論が孕んでいる危うい性格が、どうしても見えてきてしまうからではないだろうか。

われわれが暗示的に述べてきた問題を、最後には明確に述べなければならない。それはウェーバー自身が歴史科学、そして社会学における近代主義的主体の危機そのものを体現していたという状況のことである⁽³⁾。ウェーバーの困難は己が守り通そうとした信念を、自分自身の探求が掘り崩していく状況にあった。自分が信じる立場を追い求めていくと、実はそれが自滅の途であることが見えてくる。責任倫理に燃え、目的合理的な行為を冷徹に遂行する主体が、自分自身を含んだ「社会」を研究しようとするとき、個人の意図を超えた問題が一層重要になってきてしまう。

晩年のマックス・ウェーバーはそれを「官僚制」の問題や「社会主義」の問題と関係付けて集中的に論じた。官僚制支配とは顔の見えない多数の人員からなる組織が、近代主義的な主体に求められるべき理念を次第に喪失していく事態である。それをウェーバーは独特のペシミズムで受け止めた⁽⁴⁾。ペシミズムがどこからくるのかは、あえて強調するまでもない。失なわれていく個人の自由は、近代主義者が一貫して守り通そうとしてきたものである。しかも深刻なことには、理想を実現しようとするほど理想は崩れていってしまう。例えば、官僚制は高度に近代（主義）的な現象である。責任倫理を自覚した主体が、目的合理的な行為をするために作ったのが官僚制である。このことは伝統的に受け継がれてきた「官僚」の理想像を考えればすぐに分かる。自分の仕事に責任と誇りを感じている官僚

(3) 同様の問題は以下の拙稿で検討したのでそちらを参照されたい。犬飼裕一「理性、近代、世界史と円環——自己言及の連鎖と主体——」、『岐阜経済大学論集』、第33巻第3号、123-155頁。

(4) 佐藤慶幸『官僚制の社会学』、文眞堂1991年、234頁以下。ウェーバーに出発した官僚制研究を、佐藤は組織論的立場と権力論的立場の二種類に分類する。組織論的立場とは、近代社会の組織一般の特徴を究明しようとする傾向の研究を指しており、権力論的な立場は、国家権力の肥大化と人間の自由喪失を主な研究対象とする。前者はウェーバーの科学（としての社会分析の手法）を継承し、後者は批判的な視点を受け継いでいる。これに対して佐藤は、「官僚制はその頂点に官僚的ならざる要素をつねにもっている」（同書234頁）ことを強調する。それは合法的な手続きを借りた恣意的な権力の構造である。

の中で、自らの日常の業務に、顔のない権力や組織的な無責任を積極的に容認する人物などほとんどいない。誰もが責任倫理を掲げ、目的合理性を志向しながら、結果としてそれらを掘り崩していく。方法論的個人主義は必然的に個人の資質を問題とせざるをえないが、どこにも特定の悪者のいない悪事が視野に入ってくる。

問題は行政に携わる官僚だけに限定できない。官僚制の最大の批判者が実は官僚自身であること、「役所仕事」の最大の被害者が役人であることは見落としてはならない。行政の研究者はしばしば行政が陥る官僚制の弊害に注意を促すが、視線を自分たち自身に転じれば、そこには同様の組織によって研究に従事する研究者の官僚制が見えてくる。ここに晩年のウェーバーが直面した苦悩が出現する。一方で責任倫理や目的合理性を追求せよという要請があり、他方で責任倫理や目的合理性の結果として出てきた官僚制の弊害を克服せよという要請がある。同じことは組織によって研究に従事している研究者にもあてはまる。いうならば社会全体を巻き込んだ巨大なダブルバインドが、自由を志向するすべての近代主義的主体を拘束しているのである。

われわれは古典的な歴史科学が陥ってきたジレンマを観察してきた。それは偉大な個人の主体を中心に据えて研究にいそしむ歴史科学者の、偉大とはいえない研究生活に関係していた。偉大な主体の業績を科学として研究していくには、どうしても細かな実証を積み重ねていく組織が不可欠である。偉大な主体を追求する同時代の歴史哲学の動向に対して拒絶反応を示しながら、別の解決策を提示できない事態がそこにあった。科学としての歴史科学を採求する人々が、文字通り没个性的で責任倫理を志向しないならば、問題はどこにもない。しかし、彼らもまた哲学的信念としての近代主義的主体の理想を追求していたのである。ジレンマは深刻であった。そこを突いたのがマックス・ウェーバー自身である。

ここに個人に出発する古典的歴史科学と集団に出発すべき新興社会学の間の緊張関係があり、両者の間で「個人に出発する社会学」を掲げたウェーバーの動きが観察できるのである。展開していく歴史科学は、ウェーバーの陥った困難をそのまま相続していくことになる。二十世紀初頭から主にドイツ語圏を中心として「危機」とその克服を主題とした重要

な著作が刊行されてきた。ウェーバーと同世代のフッサールによる『厳密な学としての哲学』『西欧諸科学の危機と超越論的現象学』、続く世代に属するマルチン・ハイデガーの『存在と時間』、カール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』、そしてゲオルク・ルカーチの『歴史と階級意識』などは、どれも時代的な「危機意識」を背後に抱えている⁽⁵⁾。フッサールとその後継者たちに反響する「超越論的自我」への情熱は、科学的分析による自己言及を排除した「存在」への探求に向かう。そこにはいかなる形にせよ独立した主体を守り通そうとする決意が現れていた。原動力となるのは「危機意識」である。しかし、「危機意識」は近代主義的な主体というイデオロギーへの洞察を誘発することにもなり、さらにモノとして対象化された人間の隷属状態への省察へもつながっていく。すべてを一人で支配する主体への信念は、危機に陥り、危機感是人々の想像力を触発する。彼らを個別的に検討するだけでは見えてこない問題の連なりがここに出現し、学説史を超えた問題につながっていくのである。

文 献

Abel, Theodore, *Systematic Sociology in Germany: A Critical Analysis of Some Attempts to Establish Sociology as an Independent Science*, New York 1929

Abramowski, Günter, *Das Geschichtsbild Max Webers: Universalgeschichte am Leitfaden des okzidentalen Rationalisierungsprozesses*, Stuttgart = 松代和郎訳『マックス・ウェーバー入門 西洋の合理化過程を手引とする世界史』創文社 1983 年

(5) 石塚省二はルカーチを中心としてこれらの著者たちの思考を結ぶ環として「危機意識」の介在を強調する。危機とは第一次世界大戦に代表される西欧社会の挫折によってもたらされたものであり、彼らが属する伝統的エリート社会の没落に関連するものである。石塚省二『社会哲学の原像——ルカーチと〈知〉の世紀末——』、世界書院 1987 年、267 頁以下他参照。

- Adorno, Theodor Wiesengrund, Prismen: Kulturkritik und Gesellschaft, 1955 = 渡辺祐邦・三原弟平訳『プリズメン——文化批判と社会』筑摩書房 1996年
- Adorno, Theodor W./ Ralf Darendorf/ Harald Pilot u. a., Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie, Frankfurt a. M. 1972
- Albert, Hans, Theorie und Praxis: Max Weber und das Problem der Wertfreiheit und der Rationalität, in: Hans Albert/ Ernst Topitsch (Hg.), Werturteilsfreiheit, Darmstadt 1979
- Albert, Hans, Kritische Vernunft und menschliche Praxis, Stuttgart 1984
- Albrow, Martin, Die Rezeption des Weberschen Werks in der britischen Soziologie, in: Weiß 1989
- Albrow, Martin, Max Weber's Construction of Social Theory, New York 1990
- Anter, Andreas, Max Webers Theorie des modernen Staates: Herkunft, Struktur und Bedeutung, Berlin 1995
- Antoni, Carlo, Vom Historismus zur Soziologie, 1950 = 譜井鉄男訳『歴史主義から社会学へ』未来社 1959年
- Aron, Raymond, Introduction à la philosophie de l'histoire, Paris 1938, 1986
- Aron, Raymond, Main Currents in Sociological Thought, 1965 = 北川隆吉, 平野秀秋, 佐藤守弘, 岩城完之, 安江孝司訳『社会学的思考の流れ1・2』法政大学出版局 1974年
- Augstein, Rudolf / Karl Dietrich Bracher/ Martin Broszat u. a., Historikerstreit: Der Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung, München/ Zürich 1987
- Bader, Veit-Michael, Max Webers Begriff der Legitimität. Versuch einer systematisch-kritischen Rekonstruktion, in: Weiß 1989
- Barracough, Geoffrey, Main Trends of Research in the Social and Human Sciences, Part 2, Volume 1, Chapter III: History, 1978 = 松村赳, 金七紀男訳『歴史学の現在』岩波書店 1985年
- Baumgarten, Eduard, Max Weber Werk und Person, Tübingen 1964
- Beetham, David, Max Weber and the Theory of Modern Politics, 1974 = 住谷一彦他訳『マックス・ウェーバーと近代政治理論』未来社 1988年
- Bellah, P. N., Tokugawa Religion, 1957 = 堀一郎・池田昭訳『日本の近代化と宗教倫理——日本近世宗教論』未来社 1962年
- Bellamy, Richard, Liberalism and Modern Society: An Historical Argument, Cambridge 1992
- Bendix, Reinhardt / Günter Roth, Scholarship and Partisanship: Essays on Max Weber, 1982 = 柳父圀近訳『学問と党派性 / マックス・ウェーバー

論考』みすず書房 1975 年

Bendix, Reinhardt, Freiheit und historische Schicksal: Heidelberger Max Weber Vorlesungen, 1982 = 森岡弘通訳『歴史社会学の方法——自由と歴史的運命』木鐸社 1989 年

Bendix, Reinhardt, Max Weber: An Intellectual Portrait, 1962 = 折原浩訳『マックス・ウェーバーその学問的一肖像』未来社 1987 年

Berlin, Isaiah, Vico and Herder: Two Studies in the History of Ideas = 小池訳『ヴィーコとヘルダー 理念の歴史: 二つの試論』みすず書房 1976 年

Berthold, Werner, Die Konzeption der Weltgeschichte bei Hegel und Ranke, in: W. J. Mommsen 1988

Bickel, Cornelius, Ferdinand Tönnies' Weg in die Soziologie, in: Rammstedt 1988

Blanke, Horst Walter, Typen und Funktionen der Historiographiegeschichtsschreibung: Eine Bilanz und ein Forschungsprogramm, in: Küttler / Rüsen / Schulin 1993

Borkenau, Franz, Der Übergang vom Feudalen zum bürgerlichen Weltbild: Studien zur Geschichte der Manufakturperiode, 1934 = 水田洋他訳『封建的世界像から市民的世界像へ』みすず書房 1965 年

Bouretz, Pierre, Les promesses du monde: philosophie de Max Weber, Paris 1996

Brentano, Lujo, Die Anfänge des modernen Kapitalismus, München 1906

Brentano, Lujo, Versuch einer Theorie der Bedürfnisse: Sitzungsberichte der königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften. Philosophische-philologische und historische Klasse, Jg. 1908, Abh. 10, München 1908

Brentano, Lujo, Die Entwicklung der Wertlehre, Sitzungsberichte der königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften. Philosophische-philologische und historische Klasse, Jg. 1908, Abh. 3, München 1908

Brentano, Lujo, Prof. Max Weber (Nekrologe), Münchener Neueste Nachrichten vom 16. Juni 1920, in: René König / Johannes Winckelmann 1963

Breuer, Josef / Sigmund Freud, Studien über Hysterie, 1895 = 懸田克躬・小此木啓吾訳『ヒステリー研究』（『フロイト著作集』7）人文書院 1974 年

Brubaker, Rogers, The Limits of Rationality: An Essay on the Social and Moral Thought of Max Weber, London 1984

Bruch, Rüdiger Vom, Historiographiegeschichte als Sozialgeschichte: Geschichtswissenschaft und Gesellschaftswissenschaft, in: Küttler/

Rüsen/ Schulin 1993

Burckhardt, Jacob, Jacob Burckhardt Gesammelte Werke, 10 Bde., Basel/
Stuttgart 1978

Collins, Randall, Max Weber: A Skelton Key, 1986 = 寺田篤弘・中西茂行訳
『マックス・ウェーバーを解く』新泉社 1988

Colliot-Thélère, Catherine, Max Weber et l'histoire, Paris 1990

Dahme, Heinz-Jürgen, Der Verlust des Fortschrittsglaubens und die Verwiss-
enschaftlichung der Soziologie: Ein Vergleich von Georg Simmel,
Ferdinand Tönnies und Max Weber, in: Rammstedt 1988

Deichsel, Alexander, Das Soziale in der Wechselwirkung: Ferdinand Tönnies
und Georg Simmel als lebendiger Klassiker, in: Rammstedt 1988

Deininger, Jürgen, Eduard Meyer und Max Weber, in: William M. Calder III/
Alexander Demandt (Hg.), Eduard Meyer: Leben und Leistung
eines Universalhistorikers, Leiden/New York 1990

Diderot, Denis, Supplément au Voyage de Bouganville, 1772 = 『ブーガンヴィ
ル航海記補遺』中川久定訳 (『世界の名著』29 巻) 中央公論社 1970 年

Diesener, Gerald (Hg.), Karl Lamprecht weiterdenken: Universal- und Kultur-
geschichte heute, Leipzig 1993

Dilcher, Gerhard, Max Webers Stadt und die historische Stadtforschung der
Mediävistik, in: Historische Zeitschrift Bd. 267, Heft 1, 1998

Dilthey, Wilhelm, Leben Schleiermachers, 1870, in: Wilhelm Diltheys Gesam-
melte Schriften, Bd. 13 u. 14, Göttingen 1985

Dilthey, Wilhelm, Das Geschichtliche Bewußtsein und die Weltanschauung,
in: Wilhelm Diltheys Gesammelte Schriften, Bd. 8, Leipzig/ Berlin
1931

Dilthey, Wilhelm, Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in
den metaphysischen Systemen, in: Wilhelm Diltheys Gesammelte
Schriften, Bd. 8, 1931, Leipzig/ Berlin 1931

Döbert, Rainer, Max Webers Handlungstheorie und die Ebenen des Rationa-
litätskomplexes, in: Weiß 1989

Dörr, Felicitas, Die Kunst als Gegenstand der Kulturanalyse im Werk Georg
Simmels, Berlin 1993

Durkheim, Emile, Montesquieu et Rousseau: précurseurs de la sociologie,
Paris 1953 = 小関藤一郎・川喜多喬訳『モンテスキューとルソー』法政
大学出版局 1975 年

Eberl, Matthias, Die Legitimität der Moderne: Kulturkritik und Herrschafts-
konzeption bei Max Weber und bei Carl Schmitt, Marburg 1994

Eckermann, Johann Peter, Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines

Lebens, Berlin/ Weimar 1987

Eisermann, Gottfried, Max Weber und die Nationalökonomie, Marburg 1933

Eliæson, Sven, The Utility of the Classics: The Estate of Weber unsettled, in:
Jahrbuch für Soziologie-Geschichte 1993, Opladen 1995

Elias, Norbert, Was ist Soziologie, 1970 = 徳安彰訳『社会学とは何か』法政大学
出版局 1994 年

Elias, Norbert, Über den Prozeß der Zivilisation, 1976 = 赤井慧璽, 波田節夫他
訳『文明化の過程』法政大学出版局 1977 / 78 年

Elias, Norbert, Die Höfische Gesellschaft, 1983 (1969) = 波田節夫他訳『宮廷社
会』法政大学出版局 1981 年

Elias, Norbert, Studien über die Deutschen: Machtkämpfe und Habitusent-
wicklung im 19. und 20. Jahrhundert, 1989 = 青木隆嘉訳『ドイツ人論
文明化と暴力』法政大学出版局 1996 年

Elias, Norbert, Engagement und Distanzierung, 1990 = 波田節夫他訳『参加と
距離化』法政大学出版局 1991 年

Ferrarotti, Franc, Max Weber and the Destiny of Reason, New York 1982

Fischer, Fritz, Griff nach der Weltmacht: Die Kriegszielpolitik des kaiserli-
chen Deutschland 1914/18, Düsseldorf 1967 (1.Aufl.1961)

Fischer, Fritz, Krieg der Illusionen: Die deutsche Politik von 1911-1914,
Düsseldorf 1970

Freud, Sigmund, Triebe und Tribschicksale, 1915 = 中山元訳「欲動とその運
命」(『S・フロイト自我論集』) 筑摩書房 1996 年

Freud, Sigmund, Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, 1916-
1918 = 懸田克躬訳『精神分析学入門』中央公論社 1972 年

Freund, Julien, Sociologie de Max Weber, Paris 1966

Frisby, David, The ambiguity of modernity: Georg Simmel and Max Weber,
in: Wlofgang J. Mommsen / Jürgen Osterhammel 1987

Frisby, David P., Soziologie und Moderne: Ferdinand Tönnies, Georg Simmel
und Max Weber, in: Rammstedt 1988

Frisby, David ed., Georg Simmel Critical Assessments, London 1994

Gadamer, Hans-Georg, Wahrheit und Methode, in: Hans-Georg Gadamer
Gesammelte Werke, Bd. 1 u. 2, Tübingen 1975

Gadamer, Hans-Georg, Von hier und heute geht eine neue Epoche der Welt-
geschichte aus, in: Akten des 5. Internatinalen Kant-Kongress 1981,
T. II, 1982

Gerhards, Jürgen, Affektuelles Handeln: Der Stellenwert von Emotionen in
der Soziologie Max Webers, in: Weiß 1989

Germer, Andrea, Wissenschaft und Leben: Max Webers Antwort auf eine

- Frage Friedrich Nietzsches, Göttingen 1994
- Giddens, Anthony, Sociology, 1989 (1993) = 松尾精文他訳『社会学』而立書房, 改訂新版 1992 年
- Graf, Friedrich Wilhelm, Friendship between Experts: Notes on Weber and Troeltsch, in: Wolfgang J. Mommsen / Jürgen Osterhammel 1987
- Habermas, Jürgen, Erkenntnis und Interesse, Frankfurt a. M. 1968
- Habermas, Jürgen, Zur Logik der Wissenschaften, Frankfurt a. M. 1985
- Habermas, Jürgen, Theorie des kommunikativen Handelns, 4. Aufl. Frankfurt a. M. 1987
- Haferkamp, Hans, »Individualismus« und »Uniformierung« —Über eine Paradoxie in Max Webers Theorie der gesellschaftlichen Entwicklung, in: Weiß 1989
- Hardtwig, Wolfgang / Harm-Hinrich Brandt, Deutschlands Weg in die Moderne: Politik, Gesellschaft und Kultur im 19. Jahrhundert, München 1993
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, Grundlinien der Philosophie des Rechts, in: Georg Wilhelm Friedrich Hegel Werke 7, Frankfurt a. M. 1970
- Helle, Horst Jürgen, Dilthey's „Verstehen“ Sociology, Philosophy of Culture, and Ethics, in: Peter Koslowski Berlin 1995
- Herder, Johann G., Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, in: Herders Werke in fünf Bänden, Bd. 4 Berlin/ Weimar 1982
- Hinrichs, Carl, Einleitung des Herausgebers, in: Friedrich Meinecke Werke, Bd. 4, München 1959
- Hirschhorn, Monique, Max Weber et la sociologie française, Paris 1988
- Holton, Robert J./ Bryan S. Turner, Max Weber on Economy and Society, London 1989
- Horkheimer, Max / Theodor W. Adorno, Dialektik der Aufklärung, in: Theodor W. Adorno Gesammelte Schriften Bd.3, Frankfurt a. M. 1981
- Hughes, H. Stuart, Consciousness and Society: The Reconstruction of European Social Thought 1890–1930, 1958 = 生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房 1970 年
- Husserl, Edmund, Philosophie als strenge Wissenschaft, in: Logos Bd. 1, 1910–1911 = 小池稔訳『厳密な学としての哲学』(『世界の名著 51 卷) 中央公論社 1970 年
- Husserl, Edmund, Cartesianische Meditationen: eine Einleitung in die Phänomenologie, 1950 (1931) = 船橋弘訳『デカルト的省察』(『世界の名著 51 卷) 中央公論社 1970 年
- Husserl, Edmund, Die Krise der europäischen Wissenschaften und die trans-

- zendentale Phänomonologie, 1936 = 細谷恒夫, 木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社 1995 年
- Ibaraki, Takeji, Probleme der Rezeption des soziologischen Werks von Max Weber in Japan unter besonderer Berücksichtigung der Interpretation der Gesellschaftstheorie »Ma(r)x Webers« in der »marxistischen Bürgerschafts-Schule«, in: Weiß 1989
- Iggers, Georg G., Geschichtswissenschaft im 20. Jahrhundert: Ein kritische Überblick im internationalen Zusammenhang, Göttingen 1993
- Iggers, Georg G., Das Programm einer Strukturgeschichte des historischen Denkens, in: Küttler/ Rüsen/ Schulin 1993
- Jankélévitch, Vladimir, Premières et Dernières Pages, 1994 = 合田正人訳『最初と最後のページ』みすず書房 1996 年
- Jaspers, Karl, Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, München 1949
- Jaspers, Karl, Über Bedingungen und Möglichkeiten eines neuen Humanismus, Stuttgart 1962
- Jones, Ernest (edited and abridged by Lionel Trilling and Steven Marcus), The Life and Work of Sigmund Freud, 1961 = 竹友安彦・藤井治彦訳『フロイトの生涯』紀伊國屋書店 1969 年
- Jung, Werner, Georg Simmel zur Einführung, Hamburg 1990
- Kaegi, Werner, Europäische Horizonte im Denken Jakob Burckhardts, 1962 = 坂井直芳訳『ブルクハルトとヨーロッパ像』みすず書房 1967 年
- Kalberg, Stephen, Max Webers Typen der Rationalität: Grundsteine für die Analyse von Rationalisierungs-Prozessen in der Geschichte, in: W. M. Sprondel/ C. Seyfarth 1981
- Kalberg, Stephen, Max Webers historisch-vergleichende Untersuchungen und das »Webersche Bild der Neuzeit«: eine Gegenüberstellung, in: Weiß 1989
- Kalberg, Stephen, Max Weber's Comparative-Historical Sociology, Cambridge 1994
- Kant, Immanuel, Immanuel Kant Werkausgabe in 12 Bde., Frankfurt 1968
- Kaufhold, Karl Heinrich, Protestantische Ethik, Kapitalismus und Beruf, in: K. H. Kaufhold / G. Roth / Y. Shionoya (Hg.), Max Weber und seine »Protestantische Ethik«, Düsseldorf 1992
- Käsler, Dirk, Einführung in das Studium Max Webers, 1979 = 森岡弘通訳『マックス・ウェーバー その思想と全体像』三一書房 1981 年
- Kettler, David / Volker Meja / Nico Stehr, Karl Mannheim, London / New York 1984 = 石塚省二監訳『カール・マンハイム: ポストモダンの社会思想家』御茶の水書房 1996 年

- Kirn, Paul, Das Bild des Menschen in der Geschichtsschreibung von Polybios bis Ranke, Göttingen 1955
- Kocka, Jürgen (Hg.), Max Weber, der Historiker, Göttingen 1986
- Kocka, Jürgen, Geschichte und Aufklärung, Göttingen 1989
- Korte, Hermann, Einführung in die Geschichte der Soziologie, 3. Aufl., Opladen 1995
- Koselleck, Reinhart, Kritik und Krise: Eine Studie zur Pathogenese der bürgerlichen Welt, 1959 = 村上隆夫訳『批判と危機——市民的世界の病因論のための一研究』未来社 1989 年
- Koslowski, Peter (ed.), The Theory of Ethical Economy in the Historical School: Wilhelm Roscher, Lorenz von Stein, Gustav Schmoller, Wilhelm Dilthey and Contemporary Theory, Berlin 1995
- Köhnke, Klaus Christian, Wissenschaft und Politik in den Sozialwissenschaftlichen Studentenvereinigungen der 1890er Jahre, in: Rammstedt 1988
- König, René / Johannes Winckelmann (Hg.), Max Weber zum Gedächtnis, Köln/ Opladen 1963
- Krohn, Wolfgang, Die Wissenschaftsgeschichte in der Wissenschaft: Zu einer Historiographie der Wissenschaftsgeschichtsschreibung, in: Küttler/ Rüsen/ Schulin 1993
- Küttler, Wolfgang / Jörn Rüsen / Ernst Schulin (Hg.), Geschichtsdiskurs Bd. 1: Grundlagen und Methoden der Historiographiegeschichte, Frankfurt a. M. 1993
- Lamprecht, Karl, Moderne Geschichtswissenschaft: Fünf Vorträge, Dublin / und Zürich, 1971 (1. Aufl. 1904)
- Landshut, Siegfried, Kritik der Soziologie und andere Schriften zur Politik, Neuwied/ Berlin 1968 (1. Aufl. 1929)
- Langewiesche, Dieter, Liberalismus in Deutschland, Frankfurt a. M. 1988
- Lehmann, Hartmut, The Rise of Capitalism: Weber versus Sombart, in: Hartmut Lehmann and Guenther Roth 1993
- Lehmann, Hartmut/Guenther Roth (des.), Weber's Protestant Ethic: Origins, Evidence, Contexts, Cambridge 1993
- Lepenies, Wolf, Autoren und Wissenschaftler im 18. Jahrhundert: Linné-Buffon-Winckelmann-Georg Forster-Erasmus Darwin, München / Wien 1988
- Lepenies, Wolf, Gefährliche Wahlverwandtschaften: Essays zur Wissenschaftsgeschichte, Stuttgart 1989
- Levine, Donald N., Das Problem der Vieldeutigkeit in der Begründung der

- Soziologie bei Emile Durkheim, Max Weber und Georg Simmel, in: Rammstedt 1988
- Lévi-Strauss, Claude, *Anthropologie structurale*, 1958 = 荒川幾男他訳『構造人類学』みすず書房 1972 年
- Lichtblau, Klaus, *Kausalität oder Wechselwirkung? Max Weber und Georg Simmel im Vergleich*, in: G. Wagner / H. Zipprian 1994
- Lindner, Clausjohann, *Max Webers handlungstheoretisches Programm für die Soziologie*, in: Weiß 1989
- Löwith, Karl, *Welt und Weltgeschichte*, 1958 = 柴田治三郎訳『世界と世界史』岩波書店 1959 年
- Löwith, Karl, *Jakob Burckhardt: der Mensch immiten der Geschichte*, 1966 = 西尾幹二・瀧内慎雄訳『ブルクハルト 歴史のなかの人間』ちくま学芸文庫 1994 年
- Lukács, Georg, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, in: Georg Lukács Werke, Bd. 2, Neuwied / Berlin 1923
- Lukács, Georg, *Der junge Hegel*, in: Georg Lukács Werke, Bd. 8, Neuwied / Berlin 1948
- Lukács, Georg, *Die Zerstörung der Vernunft*, in: Georg Lukács Werke, Bd. 9, Neuwied / Berlin 1954
- Maffesoli, Michel, *Ein Vergleich zwischen Emile Durkheim und Georg Simmel*, in: Rammstedt 1988
- Makkreel, Rudolf, *Dilthey: Philosoph der Geisteswissenschaften*, Frankfurt a. M. 1991
- Mannheim, Karl, *Historismus*, in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 52, Heft 1, 1924 = 秋元律郎・田中清助訳『マンハイム シェーラー 知識社会学』青木書店 1973 年
- Mannheim, Karl, *Das konsevative Denken: Soziologische Beiträge zum Werden des politisch-historischen Denkens in Deutschland*, in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 57, Heft 1 u. 2, 1927 = 森博訳『保守主義』誠信書房 1958 年
- Mannheim, Karl, *Ideologie und Utopie*, 1929 = 高橋徹・徳永恂訳『イデオロギーとユートピア』（『世界の名著』56 卷）中央公論社 1971 年
- Mannheim, Karl, *Man nad Society in an Age of Reconstruction: Studies in Modern Social Structure*, 1940 = 福武直訳『変革期における人間と社会』みすず書房 1962 年
- Mannheim, Karl, *Essays on the Sociology of Knowledge*, London 1952
- Mayer, Hans, *Wendezeiten: Über Deutsche und Deutschland*, 1993 = 宇京早苗訳『転換期 ドイツ人とドイツ』法政大学出版局 1994 年

- Meier, Christian (Hg.), Die Okzidentale Stadt nach Max Weber: Zum Problem der Zugehörigkeit in Antike und Mittelalter, Historische Zeitschrift, Beihefte, NF., Bd. 17, München 1994
- Meinecke, Friedrich, Persönlichkeit und geschichtliche Welt, 1918, in: Friedrich Meinecke Werke, Bd. 4, Stuttgart 1959
- Meinecke, Friedrich, Die Entstehung des Historismus, 1936, in: Friedrich Meinecke Werke, Bd. 3, München 1959
- Meinecke, Friedrich, Schiller und die Individualitätsgedanke, 1937, in: Friedrich Meinecke Werke, Bd. 4, Stuttgart 1959
- Meinecke, Friedrich, Entstehungsgeschichte des Historismus und des Schliermacherschen Individualitätsgedankens, Stuttgart 1939
- Meran, Josef, Theorien in der Geschichtswissenschaft: Die Diskussion über die Wissenschaftlichkeit der Geschichte, Göttingen 1985
- Michels, Robert, Zur Soziologie des Parteiwesens: Untersuchungen über die oligarchischen Tendenzen des Gruppenlebens, Stuttgart 1989
- Mitzman, Arthur, The Iron Cage: An Historical Interpretation, New York 1970
- Mitzman, Arthur, Personal Conflict and Ideological Options in Sombart and Weber, in: Wolfgang J. Mommsen /Jürgen Osterhammel 1987
- Mommsen, Theodor, Römische Geschichte 1-8, München 1976
- Mommsen, Wolfgang J., Max Weber und die deutsche Politik 1890-1920, Tübingen 1974
- Mommsen, Wolfgang J., Max Weber: Gesellschaft, Politik und Geschichte, 1974 = 中村貞二, 米沢和彦, 嘉目克彦訳『マックス・ウェーバー・社会・政治・歴史』未来社 1977
- Mommsen, Wolfgang J., Max Webers Begriff der Universalgeschichte, in: Jürgen Kocka 1986
- Mommsen, Wolfgang J., Imperialismustheorien: Ein Überblick über die neueren Imperialismusinterpretationen, Göttingen 1987
- Mommsen, Wolfgang J. / Jürgen Osterhammel (eds.), Max Weber and his Contemporaries, 1987 = 鈴木広, 米沢和彦, 嘉目克彦監訳『マックス・ウェーバーとその同時代人群像』ミネルヴァ書房 1994年
- Mommsen, Wolfgang J. (Hg.), Leopold von Ranke und die moderne Geschichtswissenschaft, Stuttgart 1988
- Mommsen, Wolfgang J., Politik und politische Theorie bei Max Weber, in: Weiß 1989
- Mommsen, Wolfgang J., Der autoritäre Nationalstaat, Verfassung, Gesellschaft und Kultur im deutschen Kaiserreich, Frankfurt a. M. 1990

- Mommsen, Wolfgang J. / Gangolf Hübinger (Hg.), *Intellektuelle im Deutschen Kaiserreich*, Frankfurt a. M. 1993
- Montesquieu, Charles Louis, *Considérations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence*, 1734 = 田中治男・栗田伸子訳『ローマ人盛衰原因論』岩波文庫 1989 年
- Montesquieu, Charles Louis, *De l'esprit des lois*, 1748 = 野田良之他訳『法の精神』岩波文庫 1989 年
- Morikawa, Takemitsu, *Die neuere Weber-Forschung in Japan*, in: *Veröffentlichungen des Japanisch-Deutschen Zentrum Berlin*, Bd. 40, 2000
- Moscovici, Serge, *La machine à faire des dieux*, Paris 1988 = 古田幸男訳『神々を作る機械』法政大学出版局 1995 年
- Möller, Horst, *Vernunft und Kritik: Deutsche Aufklärung im 17. und 18. Jahrhundert*, Frankfurt a. M. 1986
- Muchembled, Robert, *L'invention de L'homme moderne*, 1988 = 石井洋二郎訳『近代人の誕生』筑摩書房 1992 年
- Nedelmann, Brigitta, »Psychologismus« oder Soziologie der Emotion?: Max Webers Kritik an der Soziologie Georg Simmels, in: Rammstedt 1988
- Nietzsche, Friedrich, *Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke*, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1964 / 1976
- Nietzsche, Friedrich, *Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben*, 1874 = 秋山英夫訳『生に対する歴史の利害』筑摩書房 1960 年
- Nippel, Wilfried, »Geschichte« und »Altertümer«: Zur Periodisierung in der Althistorie, in: Küttler / Rüsen / Schulin 1993
- Nolte, Ernst, *Zwischen Geschichtslegende und Revisionismus?: Das Dritte Reich im Blickwinkel des Jahres 1980*, in: Augstein / Bracher / Broszat u. a. 1987
- Nusser, Karl-Heinz, *Kausale Prozesse und sinnerfassende Vernunft: Max Webers philosophische Fundierung der Soziologie und der Kulturwissenschaften*, Freiburg 1986
- Oppenheimer, Franz, *System der Soziologie*, Jena 1926
- Osborne, Peter, *The Politics of Time: Modernity and Avant-Garde*, London / New York 1995
- Osterhammel, Jürgen, *Epochen der britischen Geschichtsschreibung*, in: Küttler / Rüsen / Schulin 1993
- Ostwald, Wilhelm, *Energetische Grundlagen der Kulturwissenschaft*, Leipzig 1909
- Page, Carl, *Philosophical Historicism and the Betrayal of First Philosophy*,

- University Park (Pennsylvania) 1995
- Pandel, Hans-Jürgen, Wer ist Historiker? Forschung und Lehre als Bestimmungsfaktoren in der Geschichtswissenschaft des 19. Jahrhunderts, in: Küttler/ Rüsen/ Schulin 1993
- Parsons, Talcott, On the relation of the theory of action to Max Weber's »Verstehende Soziologie«, in: W. Schluchter (Hg.), Verhalten, Handeln und System, Frankfurt a. M. 1979
- Peukert, Detlev, Max Webers Diagnose der Moderne, Göttingen 1986
- Popper, Karl R., The Open Society and its Enemies, 1950 = 内田詔夫・小河原誠訳『開かれた社会とその敵』第 1・2 部, 未来社 1980 年
- Popper, Karl R., The Poverty of Historicism, 1957 = 久野・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社 1961 年
- Popper, Karl R., What is Dialectics?, in: Conjectures and Refutations, 1963 = 黒田東彦訳「弁証法とは何か」(碧海純一他訳『批判的合理主義』ダイヤモンド社 1974 年に収録) ダイヤモンド社 1974
- Popper, Karl R., Unended Quest: An Intellectual Autobiography, 1974, with Postscript and updated Edition, London 1992
- Possekkel, Ralf, Rehabilitierung des Widerspruchs: Plädoyer für eine formale Geschichtsphilosophie, in: Küttler/ Rüsen/ Schulin 1993
- Precht, Peter, Husserl zur Einführung, Hamburg 1991
- Rachfahl, Felix, Kalvinismus und Kapitalismus, in: Johannes Winckelmann (Hg.), Protestantische Ethik II, Gütersloh 1978
- Rammstedt, Otthein, Die Attitüden der Klassiker als unsere soziologischen Selbstverständlichkeiten: Durkheim, Simmel, Weber und die Konstitution der modernen Soziologie, in: Rammstedt 1988
- Rammstedt, Otthein (Hg.), Simmel und die frühen Soziologen: Nähe und Distanz zu Durkheim, Tönnies und Max Weber, Frankfurt a. M. 1988
- Ranke, Leopold von, Über die Epochen der neueren Geschichte, Darmstadt 1982
- Raphael, Lutz, Epochen der französischen Geschichtsschreibung, in: Küttler/ Rüsen/ Schulin (Hg.), 1993
- Raynaud, Philippe, Max Weber et les Dilemmes de la Raison Moderne, Paris 1987
- Rebinder, Manfred, Recht und Rechtswissenschaft im Werk von Max Weber, in: Weiß 1989
- Rickert, Heinrich, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 5. Aufl., Tübingen 1929
- Rickert, Heinrich, Das Lebensbild Max Webers (Nekrologe), Frankfurter

- Zeitung vom 16. Juni 1926, in: René König / Johannes Winkelmann 1963
- Roth, Guenther / Wolfgang Schluchter, Max Weber's Vision of History, Berkley 1979
- Roth, Guenther, Vergangenheit und Zukunft der historischen Soziologie, in: Weiß 1989
- Roth, Guenther, Marianne Weber und ihr Kreis, in: Marianne Weber, 1989
- Roth, Guenther, Zur Entstehungs- und Wirkungsgeschichte von Max Webers »Protestantische Ethik«, in: K. H. Kaufhold / G. Roth / Y. Shionoya 1992
- Rothermund, Ditmar, Geschichte als Prozeß und Aussage: Eine Einführung in Theorien des historischen Wandels und der Geschichtsschreibung, München 1994
- Russell, Bertrand, A History of Western Philosophy, London 1979
- Russell, Bertrand, Outline of Philosophy, London 1979
- Rüsen, Jörn, Historische Vernunft: Grundzüge einer Historik I, Göttingen 1983
- Rüsen, Jörn, Rekonstruktion der Vergangenheit: Grundzüge einer Historik II, Göttingen 1986
- Rüsen, Jörn, Lebendige Geschichte: Grundzüge einer Historik III, Göttingen 1989
- Rüsen, Jörn, Zeit und Sinn, Frankfurt a. M. 1990
- Rüsen, Jörn, Konfigurationen des Historismus: Studien zur deutschen Wissenschaftskultur, Frankfurt a. M. 1993
- Schütz, Alfred, Sinnhafte Aufbau der sozialen Welt, Wien 1932 = 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』, 木鐸社 1981 年
- Schefold, Bertram, Max Webers Werk als Hinterfragung der Ökonomie-Einleitung zum Neudruck der »Protestantische Ethik« in ihrer ersten Fassung, in: K.H. Kaufhold / G. Roth / Y. Shionoya 1992
- Schiller, Friedrich, Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte?: Eine akademische Antrittsrede, in: Schillers Werke in fünf Bänden, Bd. 3, Berlin/ Weimar 1976
- Schleier, Hans, Epochen der deutschen Geschichtsschreibung seit der Mitte des 18. Jahrhunderts, in: Küttler / Rüsen / Schulin 1993
- Schluchter, Wolfgang, W. Die Entwicklung des okzidentalen Rationalismus. Eine Analyse von Max Webers Gesellschaftsgeschichte, 1979 = 嘉目克彦訳『近代合理主義の成立——マックス・ウェーバーの西洋発展史の分析』未来社 1987 年

- Schluchter, Wolfgang, Max Webers Gesellschaftsgeschichte, in: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Jg. 31, 1979
- Schluchter, Wolfgang (Hg.), Max Webers Studie über das antike Judentum, Frankfurt a. M. 1981
- Schluchter, Wolfgang (Hg.), Max Webers Studie über Konfuzianismus und Taoismus, Frankfurt a. M. 1983
- Schluchter, Wolfgang (Hg.), Max Webers Sicht des antiken Christentums, Frankfurt a. M. 1985
- Schluchter, Wolfgang (Hg.), Max Webers Sicht des Islams, Frankfurt a. M. 1987
- Schluchter, Wolfgang (Hg.), Max Webers Sicht des okzidentalén Christentums, Frankfurt a. M. 1988
- Schluchter, Wolfgang, »Wirtschaft und Gesellschaft« — Das Ende eines Mythos, in: Weiß 1989
- Schluchter, Wolfgang, Max Webers Beitrag zum „Grundriss der Sozialökonomik“: Editionsprobleme und Editionsstrategien, in: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Jg. 50, Heft 2, 1998
- Schnädelbach, Herbert, Geschichtsphilosophie nach Hegel, 1974 = 古東哲明訳『ヘーゲル以後の歴史哲学』法政大学出版局 1994 年
- Schopenhauer, Arthur, Die Welt als Wille und Vorstellung 1 u. 2, in: Arthur Schopenhauer Sämtliche Werke, Bd. 1 u. 2, Frankfurt a. M. 1986
- Schröder, Hans-Christph, Max Weber und der Puritanismus, in: Geschichte und Gesellschaft 21, 1995
- Schroeder, Ralph, Disenchantment and its discontents: Weberian perspectives on science and technology, In: The Sociological Review, Vol. 43 No. 2, 1995
- Schroeder, Ralph, Max Weber and the Sociology of Culture, London 1992
- Schulin, Ernst, Traditionskritik und Rekonstruktionsversuch, Göttingen 1979
- Segre, Sandro, Max Webers Theorie der kapitalistischen Entwicklung, in: Weiß 1989
- Seyfarth, Constans, Über Max Webers Beitrag zur Theorie professionellen beruflichen Handelns, zugleich eine Vorstudie zum Verständnis seiner Soziologie als Praxis, in: Weiß 1989
- Shionoya, Yuichi, Max Webers soziologische Sicht der Wirtschaft, in: K. H. Kaufhold / G. Roth / Y. Shionoya 1992
- Sica, Alan, Weber, Irrationality, and Social Order, Berkeley 1988
- Simmel, Georg, Die Probleme der Geschichtsphilosophie, 1892, in: Georg

- Simmel Gesamtausgabe 2, Frankfurt a. M. 1989
- Simmel Georg, Kant und der individualismus, 1904, in: Georg Simmel Gesamtausgabe 7, Frankfurt a. M. 1995
- Simmel Georg, Soziologie, 1908: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, Georg Simmel Gesamtausgabe 11, Frankfurt a. M. 1992
- Simmel, Georg, Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft Berlin, 1984 (1. Aufl. 1917)
- Simmel, Georg, Lebensanschauung: Vier metaphysische Kapitel, München/ Leipzig 1922
- Skocpol, Theda (ed.), Vision and Method in Historical Sociology, 1984 = 小田中直樹訳『歴史社会学の構想と戦略』木鐸社 1995 年
- Smith, Barry / David Woodruff Smith (eds.), The Cambridge Companion to Husserl, Cambridge 1995
- Smith, Woodruff D., Politics and the Sciences of Culture in Germany 1840–1920, Oxford 1991
- Sombart, Nicolaus, Die deutschen Männer und ihre Feinde, Wien/ München 1991 = 田村和彦『男性同盟と母権利神話』法政大学出版部 1994 年
- Sombart, Werner, Der Bourgeois: Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen, Berlin 1913 = 金森誠也訳『ブルジョワ——近代経済人の精神史』中央公論社 1990
- Sombart, Werner (Hg.), Soziologie, in: Arthur Liebert (Hg.), Quellenhandbücher der Philosophie, Berlin 1924
- Sombart, Werner, Weltanschauung, Wissenschaft und Wirtschaft, Berlin 1938
- Sontheimer, Kurt, Antidemokratisches Denken in der Weimerer Republik: Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933, 1968 = 河島幸雄・脇圭平訳『ワイマール共和国の政治思想』ミネルヴァ書房 1976 年
- Southard, Robert, Droysen and the Prussian School of History, Lexington (Kentucky) 1995
- Spengler, Oswald, Der Untergang des Abendlandes: Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte, Leipzig 1920/22
- Spinner, Helmut F., Weber gegen Weber: Der ganze Rationalismus einer »Welt von Gegensätzen«. Zur Neuinterpretation des Charisma als Gelegenheitsvernunft, in Weiß 1989
- Sprondel, W.M. / C.Seyfarth (Hg.), Max Weber und die Rationalisierung sozialen Handelns, Stuttgart 1981

- Stammer, Otto (Hg.), Max Weber und die Soziologie heute, Tübingen 1965
- Stammler, Rudolf, Wirtschaft und Recht nach der materialistischen Geschichtsauffassung: Eine sozialphilosophische Untersuchung, 2. Aufl., Leipzig 1906 (1. Aufl. 1896)
- Stehr, Nico / René König (Hg.), Wissenschaftssoziologie: Studien und Materialien, Opladen 1975
- Stehr, Nico, Zur Soziologie der Wissenschaftssoziologie, in: Nico Stehr / René König, 1975 Opladen
- Stehr, Nico, Practical Knowledge, London 1992 = 石塚省二監訳『実践〈知〉』御茶ノ水書房 1995 年
- Stehr, Nico, Arbeit, Eigentum und Wissen: Zur Theorie von Wissensgesellschaften, Frankfurt a. M. 1994
- Stein, Lorenz, Der Begriff der Gesellschaft und die Gesetze ihrer Bewegung: Einleitung zur Geschichte der sozialen Bewegung Frankreichs seit 1789, Leipzig 1850 = 森田勉訳『社会の概念と運動法則』ミネルヴァ書房 1991 年
- Tönnies, Ferdinand, Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie, 1887 = 杉之原壽一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念』上下, 岩波書店 1957 年
- Tawney, Richard Henry, Religion and the Rise of Capitalism, 1926 = 出口勇蔵・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆』岩波文庫 1959 年
- Tenbruck, Friedrich H., Das Werk Max Webers, in: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 27. Jg. 1975
- Tenbruck, Friedrich H., Der Fortschritt der Wissenschaft als Trivialisierungsprozeß, in: Nico Stehr/ René König 1975
- Tenbruck, Friedrich H., Das Werk Max Webers: Methodologie und Sozialwissenschaften, in: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 38. Jg. 1986
- Tenbruck, Friedrich H., Abschied von der »Wissenschaftslehre«?, in Weiß 1989
- Troeltsch, Ernst, Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen, Tübingen 1912 (Neudr. 1963)
- Troeltsch, Ernst, Renaissance und Reformation, in: Historische Zeitschrift, Bd. 110, 1913, Gesammelte Schriften, Bd. IV, Tübingen 1925 = 内田芳明訳『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫 1959 年
- Troeltsch, Ernst, Max Weber (Nekrologe), Frankfurter Zeitung vom 20. Juni 1920, in: René König / Johannes Winckelmann 1963
- Troeltsch, Ernst, Der Historismus und seine Probleme, Tübingen 1922

- Troeltsch, Ernst, *Der Historismus und seine Überwindung*, Berlin 1924
- Turner, Charles, *Modernity and Politics in the Work of Max Weber*, London 1992
- Tyrell, Hartmann, *Protestantische Ethik - und kein Ende*, in: *Soziologische Revue*, Jg. 17 H. 4, 1994
- Veyne, Paul, *Comment on écrit l'histoire*, Paris 1971 = 大津真作訳『歴史をどう書くか』法政大学出版局 1982 年
- Veyne, Paul, *L'Inventaire des differences*, Paris 1976 = 大津真作訳『差異の目録』法政大学出版局 1983 年
- Vierhaus, Rudolf, *Montesquieu in Deutschland: Zur Geschichte seiner Wirkung als politischer Schriftsteller im 18. Jahrhundert*, in: *Collegium Philosophicum: Studien Joachim Ritter zum 60. Geburtstag*, 1965 = 「十八世紀のドイツにおけるモンテスキューの影響」(成瀬治編訳『伝統社会と近代国家』岩波書店 1982 年に収録)
- Vogt, Josef, *Wege zum historischen Universum*, 1961 = 小西嘉四郎訳『世界史の課題』勁草書房 1965 年
- Voltaire, *Dictionnaire philosophique* = 高橋安光訳『哲学辞典』(抄訳), (『世界の名著』29 巻) 中央公論社 1970 年
- Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations et sur les principaux faits de l'histoire depuis Charlemagne jusqu'à Louis XIII*, Paris 1963
- Voltaire, *La Philosophie de l'histoire*, 1765 = 安斎和雄訳『歴史哲学』法政大学出版局 1989 年
- Voltaire, *Candid*, 1759 = 吉村正一郎訳『カンディード』岩波文庫 1956 年
- Voltaire, *Lettres philosophiques*, 1734 = 林達夫訳『哲学書簡』岩波文庫 1951 年
- Vucht Tijssen, Lieteke van, *Auf dem Weg zur Relativierung der Vernunft: Eine vergleichende Rekonstruktion der kultur- und wissenssoziologischen Auffassungen Max Schelers und Max Webers*, Berlin 1989
- Waas, Lohtar, *Max Weber und die Folgen: Die Krise der Moderne und der maralisch-politische Dualismus der 20. Jahrhunderts*, Frankfurt a. M. 1995
- Wagner, G. / H. Zipprian (Hg.), *Max Webers Wissenschaftslehre: Interpretation und Kritik*, Frankfurt a. M. 1994
- Weber, Alfred, *Geschichts- und Kultursoziologie*, in: *Wörterbuch der Soziologie*, Stuttgart 1955
- Weber, Alfred, *Soziologie*: in: Golo Mann (Hg.), *Propyläen Weltgeschichte*, Bd. 9, Berlin / Frankfurt a. M. 1960
- Weber, Marianne, *Max Weber: Ein Lebensbild*, München 1989 (1. Aufl. 1926) = 大久保和郎訳『マックス・ウェーバー』みすず書房 1965 年

- Weber, Max, Max Weber Gesamtausgabe, Tübingen [『マックス・ウェーバー全集』刊行中, 目次参照]
- Weber, Max, Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik, in: Wirtschaft und Gesellschaft, 4. Aufl., 1956, Anhang = 安藤英治他訳『音楽社会学』創文社 1967 年
- Weber, Max, Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehenden Soziologie, Tübingen 1972 (1922)
- Weber, Max, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie 1, Tübingen 1986 (1920)
- Weber, Max, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie 2, Tübingen 1988 (1921)
- Weber, Max, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie 3, Tübingen 1988 (1921)
- Weber, Max, Gesammelte Politische Schriften, Tübingen 1988 (1921)
- Weber, Max, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, Tübingen 1988 (1922)
- Weber, Max, Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Tübingen 1988 (1924)
- Weber, Max, Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik, Tübingen 1988 (1924)
- Weber, Max, Grundriß zu den Vorlesungen über Allgemeine (»theoretische«) Nationalökonomie, Tübingen 1990 (1898)
- Weber Max (Hg. Johannes Winckelmann), Die Protestantische Ethik I: Eine Aufsatzsammlung, Gütersloh 1991 (8. Aufl.)
- Weber, Max (Hg. Johannes Winckelmann), Die protestantische Ethik II: Kritik und Antikritiken, Gütersloh 1978
- Weber, Max (Introduction by Donald N. Levine), Georg Simmel as sociologist, in: Social Research 39, 1972, pp. 155–163 = David Frisby (ed.), Georg Simmel Critical Assessments, London 1994, vol. 1, ドイツ語版: Georg Simmel als Soziologe und Theoretiker der Geldwirtschaft, in: Simmel Newsletter I, 1991
- Wehler, Hans-Ulrich (Hg.), Deutsche Historiker 5bde., 1971/72 = ドイツ現代史研究会訳『ドイツの歴史家』未来社 1982/84 年
- Weiß, Johannes, Georg Simmel, Max Weber und die »Soziologie«, in: Ramstedt 1988
- Weiß, Johannes (Hg.), Max Weber heute: Erträge und Probleme der Forschung, Frankfurt a. M. 1989
- Weiß, Johannes, Max Webers Grundlegung der Soziologie, München 1992

- Weiß, Johannes, Vernunft und Vernichtung: Zur Philosophie und Soziologie der Moderne, Opladen 1993
- Whimster, Sam, Karl Lamprecht and Max Weber, in: Wolfgang J. Mommsen / Jürgen Osterhammel 1987
- Wittgenstein, Ludwig, Tractatus Logico-Philosophicus, 1922 (2. Aufl. 1933)
= 山元一郎訳『論理哲学論』(世界の名著 58巻) 中央公論社 1971 年
- Wölfflin, Heinrich, Kunstgeschichtliche Grundbegriffe: Das Problem der Stilentwicklung in der neueren Kunst, München 1923 (6. Aufl.)
- Zängle, Michael, Max Webers Staatstheorie, Berlin 1988
- Zeitlin, Irving M., Ideology and the Development of Sociological Theory, Englewood Cliffs, New Jersey 1968
- Zmegac, Viktor, Kunst und Gesellschaft im Ästhetizismus des 19. Jharhunderts, in: Propyläen Geschichte der Literatur, Fünfter Band: Das bürgerliche Zeitalter 1830–1914, Berlin 1981/84
- Zweig, Stefan, Die Welt von Gestern, Stockholm 1944 = 原田義人訳『昨日の世界』1・2, みすず書房 1973 年

- 阿閉吉男『ジンメルの視点』 勁草書房 1985 年
- 阿閉吉男『ジンメルとウェーバー』 御茶の水書房 1981 年
- 碧海純一他（編訳）『批判的合理主義』 ダイアモンド社 1974 年
- 秋元律郎『市民社会と社会学的思考の系譜』 御茶の水書房 1997 年
- 安藤英治『マックス・ウェーバー研究』 未来社 1965 年
- 安藤英治『ウェーバーと近代』 創文社 1972 年
- 安藤英治『マックス・ウェーバー』 講談社 1979 年
- 安藤英治『ウェーバー歴史社会学の成立』 未来社 1992 年
- 安藤英治, 内田芳明, 住谷一彦（編）『マックス・ウェーバーの思想像』 新泉社 1969 年
- 石塚省二『社会哲学の原像——ルカーチと〈知〉の世紀末——』 世界書院 1987年
- 石塚省二『ポスト現代思想の解説』 白順社 1992 年
- 石塚省二『近代の終焉と社会哲学』 社会評論社 1994 年
- 石塚省二「東欧の社会学」, 『情況』 1999 年 4 月号別冊
- 犬飼裕一「『プロテスタンティズムの倫理』論争と方法の転換」, 『西洋史論叢』 15 号, 1993 年
- 犬飼裕一「理念型の機能——ウェーバー社会科学論の基盤」, 『現代社会理論研究』 3 号, 1993 年
- 犬飼裕一「マックス・ウェーバーの批判対象」, 『理想』 654 号, 1994 年
- 犬飼裕一「マックス・ウェーバーにおける非日常性概念」, 『現代社会理論研究』

4号, 1994年

犬飼裕一「マックス・ウェーバーにおける普遍史概念」, 『社会学史研究』16号,
1994年

犬飼裕一「ルイ十四世と宮廷社会の社会学——ノルベルト・エリアスの社会像と
差異の問題」, 『現代社会理論研究』5号, 1995年

犬飼裕一「ノルベルト・エリアスと歴史社会学の方法」, 『年報社会学論集』8号,
1995年

犬飼裕一「理想型としての『近代』——マックス・ウェーバーにおける近代論の
実像」, 『Historia Juris 比較法史研究』4号, 1995年

犬飼裕一「ルーマンと倫理の問題」, 『ソシオロジカルペーパーズ』4号, 1995年

犬飼裕一「マックス・ウェーバーによる普遍史論の転換」, 『西洋史学』176号,
1995年

犬飼裕一「マックス・ウェーバーの歴史学方法論」, 『Historia Juris 比較法史研究』
5号, 1996年

犬飼裕一「ヴォルテール 光の世紀を自由に浮動する知識人——知識社会学試
論」, 『ソシオロジカルペーパーズ』5号, 1996年

犬飼裕一「思想史研究の方法について」, 『文学研究科紀要』(早稲田大学大学院)
第41輯, 第4分冊, 1996年

犬飼裕一「歴史の知識社会学——ノルベルト・エリアスによる展開」, 『岐阜経済
大学論集』第31巻第4号, 1998年

犬飼裕一「宮廷社会と市民社会——マックス・ウェーバーとノルベルト・エリア
ス」, 『中京大学教養論叢』第39巻第2号, 1998年

犬飼裕一「理性, 近代, 歴史と円環——自己言及の連鎖と主体」, 『岐阜経済大学論
集』第33巻第3号, 1999年

犬飼裕一「マックス・ウェーバー, ゲオルク・ジンメルと世紀転換期歴史科学
1890-1920」, 『中京大学社会学部紀要』第14巻第2号, 2000年

茨木竹二「もう一つの「理想型」」, 『社会学史研究』13号, 1991年, 14号, 1992年
茨木竹二『『文化科学方法論』の再検討にむけて』, 『思想』1992年5月号

上山安敏『ウェーバーとその社会』 ミネルヴァ書房 1978年

尾高朝雄「国家哲学」, 岩波講座倫理学 第7冊 岩波書店 1941年

大塚久雄「魔術からの解放」, 『世界』12号, 1946年

大塚久雄『近代欧州経済史序説』 弘文堂 1957年

大塚久雄・安藤英治・内田芳明・住谷一彦著「マックス・ウェーバー研究」 岩
波書店 1965年

大林信治「ウェーバーとニヒリズムの問題——ニーチェとの対比」, 『理想』1973
年5月号, 1973年

大林信治『マックス・ウェーバーと同時代人たち』 岩波書店 1993年

折原浩『危機における人間と学問』 未来社 1969年

- 折原浩『ウェーバーとともに四〇年——社会科学の古典を読む』 弘文堂 1996 年
- 折原浩『ウェーバー「経済と社会」の再構成——トルソの頭』 東京大学出版会 1996 年
- 金子栄一『マックス・ウェーバー研究』 創文社 1957 年
- 菅野正「M. ウェーバーにおける近代社会の「合理性」について」、『社会学評論』 11 卷 4 号 84, 1971 年
- 厚東洋輔『ウェーバー社会理論の研究』 東京大学出版会 1977 年
- 佐々木博光「歴史主義の徴候のなかの文化諸科学」、『人文学報』（京都大学人文科学研究所）, 第 1 号, 1998 年
- 佐藤慶幸『官僚制の社会学』〔新版〕 文真堂 1991 年
- 佐藤慶幸『デュルケムとウェーバーの現在』 早稲田大学出版部 1998 年
- 佐野誠『ウェーバーとナチズムの間』 名古屋大学出版会 1993 年
- 清水誠「エピステモロジーの系譜——バシュラールからアルチュセールまで——」、『思想』764 号, 岩波書店 1988 年
- 住谷一彦『マックス・ウェーバー』 日本放送出版協会 1970 年
- 廳茂『ジンメルにおける人間の科学』 木鐸社 1995 年
- 鼓肇雄『マックス・ウェーバーと労働問題』 御茶の水書房 1971 年
- 出口勇蔵『経済学と歴史意識』 弘文堂 1943 年
- 出口勇蔵編『歴史学派の批判的展開』 経済学全集 6, 河出書房 1956 年
- 富永健一『日本の近代化と社会変動』 講談社 1990 年
- 富永健一『行為と社会システムの理論 構造-機能-変動理論をめざして』 東京大学出版会 1995 年
- 富永健一『マックス・ウェーバーとアジアの近代化』 講談社 1998 年
- 那須壽『現象学的社会学への道：開かれた地平を求めて』 恒星社厚生閣 1997 年
- 仲手川良雄『ブルクハルト史学と現代』 創文社 1977 年
- 成瀬治編訳『伝統社会と近代国家』 岩波書店 1982 年
- 西原和久『意味の社会学：現象学的社会学の冒険』 弘文堂 1998 年
- 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』 名古屋大学出版会 1988 年
- 羽入辰郎「マックス・ウェーバーの『魔術』からの解放——『倫理』論文における“Beruf”概念をめぐる資料操作について——」、『思想』885 号, 1998 年 3 月
- 牧野雅彦『ウェーバーの政治理論』 日本評論社 1993 年
- 松本潤一郎「社会学派に於ける倫理思想」, 岩波講座倫理学 第 5 冊 岩波書店 1941 年
- 丸山真男『日本政治思想史研究』 東京大学出版会 1952 年
- 向井守『マックス・ウェーバーの科学論 デイルタイからウェーバーへの精神的考察』 ミネルヴァ書房 1997 年
- 森元孝『アルフレート・シュッツのウィーン』 新評論, 1995 年
- 森川剛光「社会科学方法論における初期ゴットルとマックス・ウェーバー」、『三

田学会雑誌』 90 卷 4 号, 1998 年